

元和五年九月二十日

七四二

之節可申述候、恐々謹言、

霜月十五日

光豊

專修寺僧正御房

實院几下

時慶

近衛殿御兩所へ、從堯秀門主、始而御禮被仰越候趣申入候處、最前御由緒儀候間、向後可被仰通由候、則返事如此候、拙者式迄令満足候能々可被申入候、

卯月七日

時(花押)

○堯真室織田氏ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔常磐井家譜〕

堯真十三代住職略ス、事蹟

内室 美濃國犬山城主遠江守織田信清女、壬子慶長十七年八月十日卒、號

大信院、

〔羽前織田家譜〕

信康天童與十郎

上卿

信清 津田十郎左衛門尉、下野守、犬山城主、

女 伊勢一身田堯真僧正妻、

二十五日、乙、石清水八幡宮正遷宮日時定、

〔弘誓院堯記〕

九月廿五日、乙、晴、石清水社正遷宮日時定宣下、風記、上卿中

院中納言、通村、辨藏人權辨(勸修寺)經廣、

來廿七日、可有石清水社正遷宮風記之間、勘文副之、任例宣旨可被沙汰之、
狀如件、

九月廿五日

權左少辨判

四位史殿

勘文

勘文

風記

擇申 八幡宮正遷宮日時、

今月廿五日、乙、巳、時亥、

同 廿七日、丁、未、時戌、

元和五年九月二十五日

七四三

元和五年九月二十五日

七四四

元和五年己未九月廿日

陰陽頭賀茂朝臣友景

宣旨

宣旨

左辨官下 石清水社、

應任日時令勤行當社正遷宮之事、

今月廿五日、乙巳、時亥、

同 廿七日、丁未、時戌、

右權中納言源朝臣通村宣奉勅、宜任日時令勤行者、社宜承知、依宣行之、

元和五年九月廿五日

左大史小槻宿禰判 奉

權左少辨藤原朝臣判

〔孝亮宿禰日次記〕

五

九月廿二日、壬寅、晴、石清水社正遷宮之事申來之間、

調宣旨、

廿五日、乙巳、晴、石清水正遷宮日時勘文、中院中納言通村被加風記二字者也、

奉行勸修寺權左少辨經廣、○宣旨略ス、弘誓院孝亮記ニ同ジ、

右宣旨、傳奏廣橋家附進之、

宣旨祿白銀五拾文目、自廣橋家至來、

二十七日、丁未、石清水八幡宮正遷宮、

〔弘誓院孝亮記〕

一

九月廿七日、未、晴、石清水社正遷宮也、戊尅、權左少辨經廣、

正六位上

右大史三善英芳、史生某、左官掌紀氏行、召使宗岡亮行等參向、

〔孝亮宿禰日次記〕

五

九月廿七日、丁未、晴、今夜石清水社正遷宮也、

〔石清水文書〕

四田中家文書、石清水八幡宮御修理造營之記

元和中御造營事略○中

一五年九月、若宮殿正遷宮、儀式如例、但無舞樂、

上卿 中院中納言、通村著座若宮拜殿、

辨 觀修寺 外記、史等如例、

社務 新善法寺、重清 諸祠官著座同前、

一同日、石清水鎮守正遷宮、

一同日、高良正遷宮、

○幕府、石清水八幡宮ヲ造營スルコト、四年是歲ノ條ニ、正遷宮日時定

ノコト、本月二十五日ノ條ニ見ユ、

二十八日、中尾張名古屋城主德川義利、義真城內ニ東照社ヲ勸請ス、是日、正

上卿

鎮守正遷宮

高良正遷宮

元和五年九月二十七日 二十八日

七四五

遷宮ニ就
合キテノ談

遷宮、勅使權大納言廣橋總光、參議花山院定好之（東照社脫之）二莅ム、

〔孝亮宿禰日次記〕五 元和四年九月廿七日、癸丑、晴、尾張國遷宮之事、於大

外記有談合、

五年三月七日、辛卯、晴、尾張國東照社就勸請遷宮、諸司參集、有談合、大外記來臨、

神寶裝束

八月十一日、辛酉、晴、諸司來、尾張國東照社就遷宮、神寶裝束之事、自南光坊僧正申來由、行事官朝治申之、

勅使發遣

九月廿三日、癸卯、雨降、尾張國東照社就勸請遷宮、調宣旨、參向之召使附遣之、

宣旨

左辨官下尾張國東照社

權大納言藤原朝臣總光、

參議藤原朝臣定好、

右權大納言藤原朝臣總光宣奉勅、爲令勤行當社遷宮事、差件等人發遣者、社宜承知、使者經被之間、依例供給、官府追下、

元和五年九月廿四日

左大史小槻宿禰判奉

左少辨藤原朝臣判

廣橋總光
花山院定好
等發ス

廿四日、甲辰、晴、今月廿八日、尾張國東照宮就遷宮并御法事、廣橋大納言、卿、總光

花山院宰相、定好、藏人小槻忠利、地下出納、召使御藏、左右馬寮、掃部寮、副使等

今日尾張國被下向、予粟田口迄送申、遷宮御法事導師南光坊大僧正也云々、

廿八日、戊申、晴、今夜尾張國東照權現勸請遷宮也云々、

廿九日、己酉、晴、今日尾張國東照社法事有之云々、著座廣橋大納言、花山院宰

法事

相、布施取殿上人藏人忠利、

十月四日、癸丑、晴、廣橋大納言、花山院宰相、忠利等自尾張有上洛、

六日、乙卯、晴、就尾州參向、廣橋大納言白銀二百枚、花山院宰相百枚、忠利三拾

枚、出納、一召使拾枚、御藏拾枚、左馬寮五枚、右一五枚、掃部寮拾枚、副使

二枚、宣旨祿砂金拾兩也云々、件宣旨祿者、於尾張、自成瀨隼人方相渡、召使請

取之云々、即件召使今日持參之、令請取了、

〔慈眼大師傳記〕

乾

元和五己未年、尾陽城主義直卿、相管中靈地之攸、奉勸請

東照宮、依爲勸會、大師參向、九月廿八日、寅夜設遷宮之儀式、大師勤之、同廿九

日、御法事、大師爲導師著座、卿相廣橋亞相、卿、總光、花山院宰相、卿、定好、其儀相標式、

皆攀紅葉山之良法而已、

廣橋總光
花山院定好
等歸京

宣旨祿

元和五年九月二十八日

七四八

神宮寺

御宮作奉

拜殿神名
ノ間
造營ノ費

御供所

〔編年大略〕

乾 元和五年己未

一三之丸御宮御造營成功、號天長山神宮寺、神領千石寄附、野田密藏院別當

傳云、前是天王初御藏有之、其跡御宮造作、(宋書)二、西と有之一

御宮作奉行 成瀬、竹腰、(正字)

奉行都築忠兵衛、御足輕頭、四人組云々、其外役人不詳

〔敬公實錄〕

二 元和四年戊午

一十月十日、東照宮御本社拜殿内之神名之間出來、

右御入用高

貳千四百九拾五石六斗四升三夕

外七拾七石九斗、ぬし又五郎被下、

銀合六貫三拾八匁七分五厘

金合貳兩

錢合四貫七百九文

木數四千貳百貳拾貳本、大小共、

御宮御供所、横四間二六間、同貳間二三間半之ひさし、同壹間二五間半之

唐門瑞垣

護摩堂

廊下、貳尺五寸貳間半之むさし、同四拾五間之堀、

右御入用高

米貳百四拾五石三斗壹合七夕貳才

木數大小三千四百五拾貳本

同唐門水垣六拾四間

御材木御入用高

惣銀、四貫八百五拾四匁壹分八厘四毛

木數大小千六百六拾三本

御作事御入用高

米合三百八拾二石五斗九合壹夕

銀合百五匁五分五厘

錢合三百四拾三文

御宮護摩堂、三間四方、西之むさし三尺二九尺、同北西貳拾三間之さるか

しら、同東矢來垣共、

御材木御入用高

元和五年九月二十八日

七四九

元和五年九月二十八日

七五〇

銀壹貫九百五拾七匁貳分貳厘八毛

木數貳千二百八拾四本、大小共、

御作事御入用高

米合三百石壹斗三升五合

銀合貳匁壹分也、

(朱卷)
〔右御作事方留〕

元和五年乙未

一七月廿一日、

東照宮御門、瓦葺之出來、

此御入用米五拾石五升五合四夕

御材木百廿六本

銀合六百六拾九匁四分四厘

(卷)
蜜藏院、横六間之立八間之出來、

此御入用高

米六拾壹石壹斗壹升九合五夕

密藏院

本社瑞垣
假拜殿

木數千三百四拾八本

銀六百四拾壹匁六分四厘

御宮殿御本社、同水垣、同貳間之三間之假御拜殿出來、

此御入用高

米拾四石八斗三升六合八才

木數千三百四拾八本

銀六百四拾壹匁六分四厘

(以下三行讀之)
御宮殿御本社、同水垣、同貳間之三間假御拜殿出來、

此御入用高

米拾四石八斗三升六合八才

木數貳百五本

代銀三百七拾壹匁七分壹厘

(朱卷)
〔右御作事方留〕

〔別敬公實錄〕二

九月十六日、略中三丸東照宮廟成、十七日、奉安神像、成瀬隼

人正正成竹腰山城守正信爲奉行、納神衣、甲冑、弓箭、宗近太刀、正恆太刀、國行

神寶奉納

元和五年九月二十八日

七五一

別當

社領ノ寄進

社領目錄

年中御供

祭禮諸入

修理料

別當領

神主領

供僧領

番人領

祭禮田

元和五年九月二十八日

七五二

太刀、南光坊天海爲導師、日増院權僧正珍祐爲別當、置田一千石、因賜黑印書於珍祐、

〔別敬公遺事〕 元和五未年

九月十七日、

一尾州三之丸東照宮御社領高千石御寄附被成置候處、今日御黑印被下之、

右之内

高百石充

年中御供其外諸入用、御祭禮諸入用、修理料、

高五百廿石

御宮別當 神宮寺

高五拾石

御宮神主 天長山 尊壽院 吉見大膳大夫

高百石

御城下六坊、野田六坊、寺門衆僧、

高三拾石

番人領

都合千石御寄附、

外之

高二百石

東照宮 御祭禮田

棟札

〔鹽尻〕 三十

尾州東照宮棟札之寫

王舎城

聖主 天中天 迦陵頻伽聲 哀愍衆生者 我等今敬禮

從三位權中納言源朝臣義利 奉新造東照大權現御寶殿一字

御導師山門探題大僧正天海大和尚 時御奉行 成瀬隼人正藤原朝臣政次 竹腰山城守藤原朝臣政次

裏書ニ曰、

元和五年丁未菊月十七日正迁宮、翌日開眼并

御大工藤原朝臣 澤田若狹守吉次

右のことくに書せらるし、○下略、名古屋市史所載東照宮祠官某雜記ニテ校ス、

〔參考〕

〔張州府志〕

神一 府城志

東照宮 在府城郭内、贈正一位大相國祠廟也、配

享日吉大神在左、摩多羅神在右、元和五年未九月十七日、敬公請大僧正天海、

準日光鎮座之儀、創建之、奉安神像、寛永四年、天海號天長山神宮寺、以山門日

増院權僧正珍祐爲別當、兼帶日増院及野田密藏院、名上乘院、其後代々住侶

任僧正、今名尊壽院、歷代大樹祠廟在東照宮西、是亦神宮寺掌之、樓門額二品

法親王良恕筆、良恕乃竹内門主、補天台座主、本地堂、安藥師及夾侍二菩薩、十

二神將、四天王等像、護摩堂、安不動及四天王木像、十二天畫像、寺産、敬公寄附

元和五年九月二十八日

七五三

日光鎮座ノ儀ニ準ズ
入道良恕親王筆樓門額
本地堂
護摩堂
神領

元和五年九月二十八日

七五四

春日井郡田幡村五百五十三石餘、牛毛村四百十六石餘、總計千石、歷代據此、
元和七年四月、以二百石爲祭禮料、祠官吉見氏、源朝臣幸勝、鉸正五位下、任宮
內大輔、勅爲東照宮神主、自後代々相續爲神主、宮寺、神宮寺事見前、祭禮、每歲
四月十五日、以三神輿出祭文殿、獻神供、十六日、獻神饌、同日、庭上奏舞樂、同夜
神前論議、十七日、味爽獻神供、奏樂行赦、神輿遊行到頓宮、行色盡美、實府下壯
觀也、

〔門主傳〕

○二十五要略十四所收 圓智院二品法親王、諱尊純 二月廿八日、

尾州東照宮歌仙十八枚清書、遣板倉伊賀守許、

〔蓬左舊記〕

尾州名古屋屋東照宮御祭禮

一元和四年戊午二月、御三回忌御執行、此時御祭禮被仰付、
一七間町方此節警固三四人出し申候、元和五己未年、西行櫻車出し初申候、
元和六庚申年、橋辨慶と仕替申候、御祭禮初而出候儀七間町と而候、仍之
先年者行歸共先車と被仰付候處、近年者本町車与隔年と被仰付候、

〔敬公實錄〕

二 元和五年乙未

一 四月十七日、御祭禮、

毛鑓

十筋

具足著

十人

雪こかし警固相止、西行櫻車出ル

下七間町

さくら警固

五人 桑名町鍛冶町

御神輿 御後御足輕頭
兩人步行御供

〔右堀氏留〕

〔編年大略〕

乾 元和七年辛酉

一 今年御祭禮初ト云々、毛鑓、具足著、御輿計之由、其前ハ御法事之由、
〔鹽尻〕 十九 府城 東照宮舞樂、自敬公在世之時、大概定之、

四月十六日、

平調

五常樂 音樂

拾翠樂 音樂

梓振 フ 笛鼓

大食調

太平樂 有舞

高麗音取

拍梓 有舞

陵王 前亂序笛鼓計

有舞

納蘇利 有舞

長慶子 音樂

元和五年九月二十八日

七五五

元和五年九月二十八日

七五六

十七日

每年如此、然誠公請朝家樂官、使傳祕曲於我伶人、自此還城樂、五常樂、散手、破陣樂、打毬、賀殿、林訶等新舞之、
同十七日朝音樂、

平調音取

五常樂 太平樂 長慶子

神行音樂

慶雲樂

頓宮音樂

千返樂 夜半樂 賀殿

還御音樂

千秋樂 還城樂

〔鹽尻〕三十 尾州東照宮棟札之寫

○上略棟札ノコト、御本地堂を天長山神宮寺尊珠院の號ハ、寛永四年、慈眼
=カ、ル、上=收ム、大師號をられし所也、藥師、日光、月光、十二、神將の像を安置ス
御神號一幅如左、御宮ニあり

神號

陰陽不測

造化無爲 南無東照三所大權現

弘誓亞佛

護國爲心 三國傳燈山門探題大僧正天海朱印アリ

此外御官服及ひ御甲冑等、神寶あまゝあり、

御宮の鐘銘ハ、珍祐僧正、元和八年四月十八日記之、

鐘ハ水野太郎左衛門藤原則重所鑄、珍祐ハ山門日增院の主として、當國野

田密藏院へ移る、御宮創建ハ時、別當職ハ命をられし、上乘院と稱ハ、寛永廿

年十月廿八日遷化也、

御宮三所 東照宮 山王權現 日光權現

藥師、釋迦、阿彌陀の御正體を懸ク、

或人曰、日光權現ハあらハ、摩多羅神也と云々、按ハ、日光山の三所ハ、摩多羅
を入ス、當國の御宮ハ、敬公の御心を以て、日光權現をまり、摩多羅ハ客神
と稱シ、宮中別ハ一座を祀ると云々、

是月、幕府、書院番頭板倉重宗ヲ京都所司代ニ補ス、尋デ、京都所司代板

元和五年九月是月

七五七

鐘銘

三所權現

倉勝重ヲ罷ム、勝重、家ヲ重宗ニ讓リテ隱居ス、

〔金地院文書〕○山城

○上略、板倉勝重、金地院崇傳ノ僧錄就職ヲ賀將亦周防守儀、爰元仕置等被
スルコトニカ、ル、九月十五日ノ條ニ收ム、賀將亦周防守儀、爰元仕置等被
仰付候義、是又忝存候、併先日如申候、拙者氣遣可被成御察候、猶期拜顔之節
候、恐惶頓首、

板倉伊賀守

勝重 黒印

九月十八日

金地院（兼傳） 貴報

〔言緒卿記〕十二月大一日、庚戌、天晴、

一板倉伊賀守、去月廿一日ニ隱居屋敷へ移徙ニヨリ、今日諸白兩樽、珍重之
由申持遣了、使大澤左衛門大夫也、

九日、戊午、小雨、

一板倉周防へ織筋之板物壹ツ、杉原十帖、上洛珍重之由申遣、使大澤左衛門
大夫也、

〔孝亮宿禰日次記〕五

十二月八日、丁巳、雨降、板倉周防守、爲京都所司代令

山科言緒
板倉勝重
隱居屋敷
敷ノ移徙
賀ス

板倉重宗
ノ上京

御馬ヲ賜

孝亮父子

重宗ヲ訪

義演勝重

賀ノ移徙ヲ

重宗ノ就

職ヲ賀ス

顯暲重宗

賀ノ就職ヲ

勝重隱宅

ヲニテ公事

裁決ス

所司代始

上洛、今日公家衆等被向之處、依眼病不對面、自禁中御馬拜領云々、

九日、戊午、晴、予、忠利向板倉周防守宅、太刀馬代持向之、

〔義演准后日記〕二十

十一月廿七日、板倉伊賀守隱居移徙爲祝儀、樽遣之、

十二月十七日、板倉周防守所司代爲禮、宰相侍從兩使、太刀一振、馬代銀一枚
遣之、

〔鹿苑日錄〕六十

十二月十一日、齋了、赴板倉周防殿、伸初受所司代之職之
賀、呈一束一本、

〔梵舜日記〕二十

十一月廿六日、晴、寒風、霰少降、板伊州隱居宅へ罷越處ニ、
公事對決在之故罷歸也、

廿七日、晴、板伊州所司代之義、息男周防守與奪付、隱居之宅罷越、南都樽 一ツ
檳柑 一臺 令持參、及對面、仕合也、

十二月十日、微雪、板倉周防守所司代始之御禮ニ、當家兼英、萩原兼從、馬太刀
也、兩人同事御禮、予杉原十帖、扇五令持參候、次板伊州隱居所へ萩原（兼從）、
兼英諸白樽 二、鴨 二、昆布一臺之禮、及面會、念比仕合也、予前廉依罷越、不及
持參也、次齋僧來、次東寺茂兵衛（兼一）、持參也、次社參、御燈進上也、

勝重堀川
ノ第ニ閑
居ス
勝重ノ養
老料
重宗ノ加
増

元和五年九月是月

〔東大寺雜事記〕二

十二月十三日、京へ出ル、大寒大風、
十四日、板倉周防守代替ノ禮ニ、彼院ト兩人出ル、進上油煙十挺、長池下ル、大
寒大風、

十五日、歸寺、

〔東武實錄〕六

是年、板倉伊賀守勝重、老衰ニ依テ、其子周防守重宗ヲ、父勝
重ニ相副エラレ、京都ノ所司代ヲ勤ム、

〔寛政重修諸家譜〕一八〇

板倉勝重伊賀守 六年、今の呈譜、七旬を踰るま
より、職を辭シ、致仕シ、堀川の邸ニ閑居セ、此トとき、さねたまふ所領山
城、近江、三河等一萬七千石餘、
六千六百十石餘、
養老の料ニ宛ラテ、

重宗周防守 六年、今の呈譜、父ニ繼テ、京都の所司代職となる、このと、た、さき
み附屬せら、是し、與力三十騎、同心百人を廢せら、終て、の俸祿千石を重宗
にたまむ、をへて二万七千石餘を領セ、トナスハ誤ナラコト、

○重宗、京都所司代補任ノ年月詳ナラズ、姑ク金地院文書ニ據リテ、是
月ニ掲書ス、勝重、播磨國圓通寺及ビ稱名寺ニ寺領寄附ノ奉書ヲ出ス
コト、十月二十二日ノ條ニ、京都清水成就院及ビ建仁寺ニ寺領替地ノ

勝重善法
寺幸清等
ヲシテ事
ヲ重宗ニ
議セシム

奉書ヲ出スコト、十二月二十一日ノ條ニ見ユ、重宗、京都所司代トナル
後ニモ、ナホ政務ヲ執リタルヲ知ルベシ、然レドモ罷免ノ月日明ナラ
ズ、勝重、京都所司代トナルコト、慶長六年八月是月ノ條ニ、卒スルコト
寛永元年四月二十九日ノ條ニ、重宗、上京ノコト、本年五月八日、秀忠上
洛ノ條ニ、萬里小路桂哲等ノ處罰ニ參與スルコト、本月十八日ノ條ニ
見ユ、

〔参考〕

〔石清水文書〕三

田中家文書

追而、乍慮外、眼病故印判コ候、以上、

當社山林之儀、無斷コ町人大木伐採候由、我等コ御尋不審存候、相國様御代
こも、三人之社家衆、其元法度公事出入共コ、諸事被相究可然由、被仰付候コ、
無理神木於伐採者、此方へ不及御届、可爲曲事候、如有來急度被申付、尤存候、
併武家へ被尋候儀於有之者、周防守近日可罷上候間、可有御談合候、恐惶謹
言、

板倉伊賀守

元和五年九月是月

此本紙、新善法寺殿ニ在之候、

勝重印

八幡

善法寺

新善法寺御報

〔元和年錄〕

七月十三日

一板倉伊賀守御免、同周防守京都御守護、○本書七月十三日ノコ

〔元寬日記〕

三

三月、板倉伊賀守隱居、息周防守重宗家督被仰附、被補諸司

代職、伊賀守、去慶長十七年、元和五年、八ケ年之内勤諸司代職、無恙隱居、剩讓

所司代息周防守、誠可謂冥伽之由有上意、○本書勝重ノ補任ヲ慶長十七年

〔藩翰譜〕

板倉

伊賀守源勝重也、

○中元和五年、從四位下侍從、あさる、齡

既、傾きし、職、あさり、辭し申、入るによつて、同六年、御ゆるしを被つ

て、子息周防守重宗、父、關、補せられて、勝重年積り、八十三歳、寬永元年四

月廿九日、卒し、參、候へ、未、汝、代りて、此職、おさむ、將軍家、あし、と仰、られ

勝重後任 推舉重宗 勝重宗 推舉重宗 推舉重宗 推舉重宗 推舉重宗 推舉重宗 推舉重宗 推舉重宗

て、御許、あら、何、事、止、さ、れ、都、候、ひ、て、多、く、の、御、家人、の、事、知、り、候、へ、未、
其、人、を、許、ら、れ、何、事、止、さ、れ、都、候、ひ、て、多、く、の、御、家人、の、事、知、り、候、へ、未、
去、お、程、の、人、の、中、に、あ、り、申、さ、し、侍、ら、ん、よ、く、子、に、候、御、尋、有、り、候、へ、未、
夫、の、首、の、へ、き、者、は、大、悦、せ、し、給、ひ、を、以、て、父、の、召、し、補、せ、ら、れ、候、へ、未、
や、と、申、し、ら、れ、將、軍、家、は、大、悦、せ、し、給、ひ、を、以、て、父、の、召、し、補、せ、ら、れ、候、へ、未、
ふ、事、の、重、御、父、の、す、め、る、重、宗、の、申、し、候、御、尋、有、り、候、へ、未、
力、及、御、推、舉、の、預、り、候、も、の、哉、と、向、ひ、重、宗、の、申、し、候、御、尋、有、り、候、へ、未、
事、話、を、知、給、り、候、候、ひ、爆、し、そ、と、ら、し、と、い、ふ、勝、重、の、ち、笑、ふ、候、へ、未、
事、話、を、知、給、り、候、候、ひ、爆、し、そ、と、ら、し、と、い、ふ、勝、重、の、ち、笑、ふ、候、へ、未、

〔滑稽美談〕

一 板倉伊賀守勝重京都所司代、任せらるゝ事

○本文略ス、藩翰勝重、其子重宗をして、我、關、官、補、せ、ら、る、事、誠、忠、と、云、へ、し、
將軍家の家人多中、よは、重職、堪、へ、勝重、劣、ら、さ、る、を、の、ち、と、り、あ、る、へ、
し、ま、う、れ、と、も、勝重、廣、く、人、を、見、る、と、あ、ら、さ、れ、見、る、所、の、子、我、進、め、て、外、
聞、を、憚、ら、ら、ぬ、猶、密、夫、の、首、切、る、へ、き、を、の、よ、は、候、の、と、息、此、事、を、申、せ、し、候、
味、ひ、有、て、面、白、し、と、や、い、え、む、そ、へ、て、諸、民、の、訴、訟、心、情、起、り、決、斷、せ、る、處、
情、よ、き、及、密、夫、通、情、起、り、素、より、盜、賊、の、類、ひ、と、等、し、か、ら、ん、然、り、と、い、へ、
とも、是、後、お、や、け、よ、せ、る、時、は、五、常、を、失、せ、刑、あ、く、ん、の、あ、る、へ、ら、ら、ぬ、さ、り、
と、て、首、うち、切、る、程、の、事、は、あ、ら、し、公、訴、を、聞、く、事、か、く、を、事、あ、く、又、と

りりあさむく事をし、上かくそ事有時は下盗む、上をうる時は下遁る、謹むへきの訴被聞よあ、略、○下

〔故諺記〕牛込時樂軒語らむし、我等忠左衛門たゞし時、御目付役被仰付候、其砌板倉周防守殿の吹聴に参りし、折ふし在宿にて對面有し程、某申様の、不調法なる拙者の、今日御目付役被仰付、難有奉存候、依之御吹聴に参し候由申せられ、重宗聞給ひ、一段の事、目出度候、御自分此不調法を必御かくし有間敷候、其方不調法をかくされ候得者、下よ立候役人よ迷惑する者多き物にて候、其方此不調法を不調法よ立て御勤候へ、御上よは御人多く候得者、御役御免被遊、其器みらとりとる者よ被仰付る、間、かあらは不調法を飾り被申間敷よし御申候間、忝御異見にて候、此御言葉、我等守よかけ、勤可申と申候へ、周防守殿又被申、是我等の言葉よあらは、亡父伊賀守申とる事、候、次而なら語て聞せ可申候、以前御上洛乃節、於京都よ伊賀守方へ上意有之、其方事年を寄候ま、代りの役人を被遣度思召候得共、未思召當られとる御人も、かく候故、不被遣候間、其方儀も、代り乃役人よ可成者を見立候へと上意也、時よ伊賀守申上候、拙者忝周防守あど、見

重宗就職
當時ノ
トヲ牛込
ル重宗ニ
語

重宗所司
代ノ見習
トシテ上
京ス事務
ヲ重宗ニ
引渡ス

重宗事務
見習ノコ
ニトヲ勝
重宗許
サノ請フ

勝重不調
法ヲ顯ハ
ベシテ勤
戒ム重宗
ニ

事可勤ものと存候間、可被遣哉之よし申上候へ、御尤と思召候、御上よても、内々の左様とも思召候由上意にてありしなり、某事、其比未御小性にて御側よ勤候處、翌年不計被仰出候、其方事、伊賀守代り可被遣候間、上京仕候而見習可申由上意に付、奉畏候由御請申上、登りし、京著の日、伊賀守座鋪を改、左右よ下役人を置、帳目録を置とる對座へ某を上せ、江戸表の御機嫌を伺、其後帳目録を引渡候て、今日より所司職可相勤よし申候故、某も興のさめとる事よ思ひ候て、拙者儀只今まで御側よ候て、世間被存せず、諸事不案内と申、其上上意よも、先參候て、一兩年を勤方を見習候得と被仰付候間、一兩年を御側よて見習可仕由申候へ、伊賀守申様の、御目乃黒き殿様の、可勤者と思召の、被遣とるなるへし、其方を親と子あきりとて、見違ひとる人もななれ、目顔違ひとるへし、然、心とても違ひとるへし、我み隨ひ候て居内、我等とくみも可成候へ共、離れとる時、其方の了簡よりも外、有間敷候、其方此不調法を顯して勤むへし、其方不調法被かくされ候へ、五畿内の不及申、西國までのもの難義みおよひ候間、少も飾り被申間敷候、不調法上み御存候へ、大勢の御人よ候へ、其器量の

者も御取替被成候、少しも恥ぢらず、是非今日より可勤由申候付、其時、某も親み見限らば、ての口惜事と思ひ、其上の辭し可申様も無御座候間、畏候と請合候へ、いつの間み、町屋を調置、其日の内、伊賀守の町屋へ引越、町の名主年寄のうとへまじり、關東より所司代被上候と付、御役儀を引渡し、御一町を引移り候、今日より御仕置の事不存候間、萬事御指圖可給と申廻り、其後京乃名有町人を集め、碁を打候口すさみ、今度所司代のきひしき者なるを、我等會釋ひする様、心得候而、大きよめいよくに可出合と云て、町は二三年住居せし故、下よて我等の批判する者なうし也、其内よ我等も御役被仕習する也、其節伊賀守言葉尤と存る故、今御自分おも、不調法うさり給ふと申也と語り給ひしと也、○勢免傳 話草向ジ

〔落穂集追加〕

六 板倉伊賀守殿之事

一問て云、板倉伊賀守殿京都諸司代役御理り被申上候節、其方跡役をばとむるきと存寄あるもの有之よおゐて、書付候而差上可申旨被仰出候處、私せられ周防守外より、私の跡役可相勤者無御座旨書付被差上候へ、其通りに子息周防守殿へ不相易諸司代役被仰付候と有義を、世間

よて申ふれ候を、い、被聞及候哉、答て云、(大道寺友山)我ら承り及ひ候へ、伊賀守殿義若きころの板倉四郎右衛門と申、天正中、權現様駿府に御在城被遊候節、彼地の町奉行職被仰付、關東へ御入國以後、御當地の町奉行被仰付候由、然る處、慶長五年、天下御一統と付、京都諸色之義を、(奥平美)奥平美作守殿へ御預け被遊、其以後、慶長七年、權現様御代、四郎右衛門殿へ京都諸司代職被仰付、それより伊賀守殿と申候、大坂冬夏兩度の御陣之節、品々御忠節被申上、元和五年まで十八年、間御役被相勤、次第に老衰と付、御役義勤り兼候由、台徳院様御代御願ひ被申上候刻、右の通りの上意と付、子息の周防守殿義を被書上候へ、其と流り、被仰付候を以、其身の堀川の下屋敷に隱居の致し居被申候處、元和七年に至り、從四位下侍從に被任、寛永元年、八十歳に而卒去被仕候と也、親父伊賀守殿見立の通り、子息周防守殿儀も卅五年の間、大切ある諸司代御役を無異儀被相勤、官位も從四位少將まで被仰付候由承り及候あり、同問て云、伊賀守殿義御息周防守殿事、とへ何れとの器量有人よも致せ、諸司代役と有、江戸表の御老中よ相あらひ、結構れる御役義も有之候處、親

父の身として、跡役を書出し被申候と有、いづゝ致しよる物候哉、よ
 の常の人乃不仕事候、其許よりいづゝ被存候哉、答て云、惣而何より
 及、おもれ物を荷あひ候、二ツこ取分ケ、棒の跡先より、持候物の義
 き、急火の節あつ、人込の中み、持兼候を以、打捨申外、是あく候、去
 依て、是の捨る事のならさると在之、大切の物あつ、我う身引あめ
 てせおひ申如く致し、捨る事、不能成如く仕り、是非相うあひさる時、
 其荷物、せおひ死し仕る、外よき無し、其如く主人の御爲と在之、お
 めて、我身、曳懸せおひ申如く在之候、我、信の忠節人とい可申、こて候、
 右伊賀守殿義、の、權現様の御神慮、被相叶、小身人を大身、御取立被遊、
 大切の京都を御預ケ置被遊、との人みて候を以、公儀の御爲を其身、
 曳懸、御大切、被存、み付て、上の思召、御老中方の御下墨、世人のおも
 く、あつ、在之處、の、毛頭程を、貪著無之、自分の存念、一とをりを遠慮、
 被申上ある事の様子、被存候、主人の御爲と我うあめとを、兩う、
 致して、荷あひ、あひりき申如くなる者の分別と、伊賀守殿、
 比了簡よき、よ、と此あひも無之て、いづゝあひ申、あひしく候あり、
 ○勝重、重宗ヲ推舉スル、コト、マダ、續編、武林隠見

秀忠重宗 重宗指添 見習トシ 勤メシ 重宗指添 見習トシ 勤メシ 秀忠重宗 重宗指添 見習トシ 勤メシ 勝重、重宗ヲ推舉スル、コト、マダ、續編、武林隠見

箋録、武家秘、見ユ

〔前橋舊藏聞書〕

一板倉伊賀守年寄被申ニ付、台徳院様仰ニ、向後周防
 守、伊賀守ニ指添見習、御用兩人仕可相勤ノ旨、其時ニ、周防守、御前ニテ此
 御請ハ申上間敷候、右之通ニテハ、御用相勤申候儀、何ケ度モ御訴訟可仕
 候、其意趣ハ、拙者不調法ニ御座候ヘハ、仕損多可有御座、其時、伊賀守老耄
 故ナト、被申候ヘハ、伊賀守只今迄ノ御奉公水ニ罷成候由被申上、尤之
 由上意ニテ、則伊賀守ハ休申、後見可仕、京都仕置ハ周防守一人ニ被仰付
 之旨被仰出、其時奉畏候由、御請被申上ノ由、
 一板倉伊賀守隠居以後、三間口ノ町屋ヲ求、引籠被申被移候ト、其儘上下ヲ
 著、家並ノ一町ヘ、向後御介抱頼入候由ニテ、常ノ町人ノ勤申候様ニ被仕
 ケル由、

〔可觀小説〕

一帝國圖書館本 一板倉伊賀守殿、多年京都所司代御役義斷
 被申候得とも、替、被遣候人無之由、而、御免不被成候、其後、江戸、被參
 候節、直、被申上候處、台徳院様御意、成程御聞届被成候得共、替り、被
 仰付候人無之候間、乍大儀可相勤旨、御座候ヘ者、伊賀守被申候、ハ、大勢

御家人之中、私替りよ被遊候人無之と申義、有之間敷与奉存候、是の御無理よ奉存候旨被申上候得者、兎角御前之御目利こ而、誰も勤可申と被思召候人無之候間、左候の、伊賀守目利こ而申上候得と之義こて、伊賀被申候の、私義常こ京都こ罷在候ゆへ、江戸御家來之人品不被存候への、存當申人無之由被申上候處、其とも可然と存候者の無之哉申上候様、再三上意こ候、其時伊賀守被申上候の、左様御座候者、せうれ周防守大方の相勤可申与奉存候、外こ思召寄り之者無之候の、周防守よ被仰付候様こ奉存候、密夫之首切申様成をのこて、無之由被申上候得者、此一何之義候哉、其節台徳院様こ御合點と見候、數十年考台徳院様候へ共合點不參候、ふそとき見候へと被申候、御考可被成候、考夫あれと御安堵こ被思召候旨よ而、伊賀守御暇被下、歸京以後、周防守被仰付、早速上京候而、伊賀守と替り申様との儀こ候處、周防守、不存寄儀、中私之不材よ而、京都御仕置勤申義、可罷成との不奉存候、大事之御役こ候處、只今御請申上候而、以後こ仕そこあい候て、御爲こよろしからぬ義こ候間、御免被下候様被申上候、其時被仰付候の、其方親伊賀守目利よ而、其方可然旨申上候、此上は御斷申上こ不及旨、重而被仰出候へ共、周

重宗所司
代補任ノ
命ヲ固辭ス

安藤直次
重宗ヲ訪フ

直次重宗
ヲ説ク

防守、老とひ伊賀守申上候而も、私心よ中こ請合不申義を、奉畏候義の、不罷成候間、達而御免被成候様こ被申、中こ合點不被致候、其節安藤帶刀江戸こ相勤候而罷在候、周防守と別而咄申候故、老中方、帶刀被招被申、御自分の周防守と相口こ候間、御請申候様こ御申可有之候旨、帶刀被申候の、親伊賀守申こ付、上を再三被仰出候上を、左様御斷申儀こ候者、我等申候而も、中こ承印可仕との不存候得共、申而見可申旨被申候而、周防守方被參候への、周防守出被申、何とて被參候哉と被申候へ者、帶刀いや別儀も無之候得共、久し逢不申、其上頓而紀州被罷越候故、逢可申と存候而參候とて、緩々咄被申候、亭主も、定而此間之義、帶刀被申出るきと被存、帶刀も、亭主がいひ出さるゝと存候而、互よ不申出、すてに暇乞して座を立被申候故、周防よらへうをられ候て、扱此間手前事、聞被申候哉と被申候へと、帶刀被申候の、成程聞申候、いづも其方の京之所司、成申、適しきと存候由被申候への、周防守殿の、其方も左様こ被存候而、珍重こ候、手前之不材こ而、何とて成申ものこ候哉と被申候、其時帶刀被申候の、いや不材こ而つとめゑまいと申事こ而、無之候、其方腰うぬけて

居申故、勤得まいと云事こ而候と被申候へ、周防守驚被申、手前腰うぬくるとの如何之義こ候と被申候得者、帶刀其時被申候、よく合點して見られ候へ、親う見立候而、其方可然と申こ付、上こも被仰付候、君父之御意と云物こ而候、外こ可被仰付人、思召當り無之こ付如此候へ、此上の辭退こ不及事こ候、不及是非と申物こ候へ、罷越勤候而、仕そこない候へ、腹を切而のを候へ、よく候、それと跡先を考候、腰脱と申物こ候、是程よ其方腰脱候、んと不存候と被申候へ、周防合點いとされ、御請被申上候而、上京有之、伊賀守こ對顔して、此度御替りこ私を御見立被成候而、被仰上候義、御恩難有奉存候得共、御あさけあき儀こ候とて、落涙候へ、伊賀守其時、扱、此殿の世話をまらぬと見へ申候、あつい火子こを扱いと申事有之候と被申候、世語、參河言葉よて俗語之事を申候、周防守被申候、第一公事沙汰承候事大切之事こ奉存候、私向後意得よ罷成義候、被仰聞被下候へと被申候得共、伊賀守被申候、別之事も無之候、鈴木殿奥州下りと小僧三ヶ條と、此二りを能合點候へとよく御座候、鈴木、熊野山、山伏ノ形よ様をかへ、とる、奥州へ、七十五日と申

重宗命ヲ奉メ

勝重鈴木
三郎奥州
下郎及箇
小僧三箇
係例ヲ重
引例ヲ重
宗引例ヲ重

こ著申由、舞こもまひ候、久敷か、運せるとをかり打き、候て、濟不申候、只今熊野、奥州へ、い、程と被存候哉、二十日計この自由こ參所こ而候、然るを七十五日と申所、き、所こ而候、七十五日懸り候、定而鎌倉か吟味も、は、よく、道も難通候故、野よ伏、山よ臥候て、人目を忍ひ候而、い、程の苦勞を、い、い、し候て、參候、然るを七十五日こ著とる、久しを懸とるよ、ちとどかりいふてのけ候て、始終の事合點參物こ而無之候、公事を承候も左様こ而候、書物このさやうよかきくとか、ぬ物こ候故、其大要を書付候て出し申候、然るを公事承候を、の、あら、見候而、下情中々知レ申儀こ而、無之候、まつ公事を仕と申義も、證文を調、證人を、の、い、い、苦勞を仕候而申出、事こ候へ、先容易あらぬ事と被存がよ、候、扱、其申立の訴狀を見而も、幾度も心をつ、候ておし、をかり見不申候、こ、而、只一通りの句面をかりよて參物こ而無之候、扱、小僧三ヶ條と申事、或、我子を出家こ仕とて、去ル寺へ小僧こ出し置候處、親の方へ參候而、住持之、は、かい様無理こ候て、勤められ不申旨申候故、親まかり候へ、其小僧申候、味、増を、を、候へ、とる様惡敷とて、まかり申候、雪隠

へ參り候へり志かり申候、此比つふりをそらされ候故、すま候へり、すま
 様惡敷とて志かり申候由申候故、親承候而、それの近比きまへぬ儀候、
 左様候へり、罷越候而取返し可申とて、寺へ參候て、右之段申候へり、住
 持申候へり、夫の相違候而、味増之事、すり鉢候へり、すま候へり、よく候、然る
 を鍋入、杓子よてすま候故、志かり申候、其證據候へり、すり折候杓子是こ
 候とて、いくつも出し見せ申候、次こ雪隠之事、雪隠は參候を何とて志か
 り可申哉、此海と客人の志め、新敷雪隠を拵置候、此小僧は用事を申付候
 へり、其まゝ雪隠へ參候とて、右之客雪隠へといひ、袂て居申候故、志かり
 申候、其證據候へり、右之雪隠常こ鎖おろして置候處、鎖を袂ち切申候と
 て、袂ちきま候鎖を出し見せ申候、次よつふりすり候事、頃日はふりすり
 習候而よくすり候故、すらせ候へり、腹を立候而、むと物拙僧あまを態
 と切申候、是見候へり、頭巾をぬき候へり、つふり七八ヶ所もかこそり
 疵有之候、其時親得心いとし申候、公事を承候も、此意得有之候、片口承
 候得と、扱く、無理成事を申かけ候と存事も有之、又扱く、道理と存義
 も有之候へ共、とくと承候へり、相違の事後こよく知レ申候間、必そこつ

安藤直次
重宗ニ諷
説ス

勝重切腹
覺悟ヲ
説イテ重

よ一編こ心得申事惡敷候、此二つさへよく御意得候へり、別こ替さる儀
 も無之候と被申候、周防守此訓誡を忘せ不被申候而、父子相續、則良吏之
 名を得被申候、○下略、重宗、聽訟ノコトニカ、ル、明曆二年十二月一日、重
 宗卒スル條ニ收ム、家康、小僧三ヶ條ノ談ニ依リテ、老中等
 ヲ戒メタルコト、岩淵夜話別集、
 神君玉條、駿河土産等ニ見ユ、

〔遺老物語〕

老談一 言記二

一板倉周防守所司代仰付られし時、辭し申さ

れてたり、一族衆いさめしうと、さらよ用ひられ候、一族衆、安藤帶刀へ、異
 見して給われといふ、人々の申されてきり候ぬを、某う申さむいと
 て用ひ給ふへうら候、といひあうら、來りて何ともいひて候へて、寒温
 を敍しまゝよてむらぬ居て、さて歸る時、亭主此事をいひ出し、われ、
 其時、帶刀、辭し申さるゝも理りなり、これ、ゆたて仕損たる時腹をきる
 とおもえね、御うけをあらぬ所也とどかりいひたり、防州、誤り候とて、
 忽御うけせられしと也、○落穂雜談
一言集同ジ

〔別續武家閑談〕

十七

一板倉伊賀守勝重、老衰御役訴訟の節、跡役よ可然

者可及言上由鈞命有し處、悴周防守可然旨申上候、則周防守重宗よ被
 仰付、重宗歸宅して、君命の難有旨を述て、勤仕の肝要被尋るゝ、伊賀守、只

元和五年九月是月

七七六

腹を切よとの一言也、防州忽承伏して退く、是ハ上へをつらひを、廉直よ可沙汰也、万一御意よ不叶時ハ腹被きれとの事歟、一周防守御暇給へりて、又父よ勤役の大要を問ふ、伊賀守曰、不斷、頭よ公方様ましほせと可存と云々、是ハ常よ油断なく恐れ慎めとの事歟、

〔太平將士美談〕

一板倉伊賀守、京所司代を子息周防守よ、相代り勤むへきよし仰を承らせたる時、伊賀守來國光の刀を防州よ贈らる、其時の詞よ、人を切るを人よきらるゝを、身を守るも人の身を守るも、刀の徳あり、然共氣違よあとも違ひ、氣違の用ひてを替る事れし、其方職分よおゐて、はしんて、此刀を氣違に渡さぬやうよとの心得よて、御政事を捌へきよし申されき、

幕府、三河形原邑主松平家信ヲ攝津高槻城ニ、武藏岩槻城主高力忠房ヲ遠江濱松城ニ、備中某邑主小堀政一ヲ近江淺井郡ノ内ニ移シ、家信、忠房ノ封ヲ加フ、

〔東武實錄〕^六 ^(九月)是月、松平紀伊守家信三州形ノ原ヲ轉シテ、攝津高槻ノ城食邑二万石賜ル、

是月、高力攝津守忠房武州岩村ノ城采地二万石ヲ改メ、遠州濱松ノ城食邑三万石賜ル、^{外ニ、寛永十一年、五千石加賜、}

〔寛政重修諸家譜〕

^{二十} 松平家信 ^{紀伊} ^(元和)五年九月、洛み上を給ふ乃時、

家信父子を伏見城よめされ、領地を攝津國ようりさ終、嶋上郡高槻城を賜む、加増ありて、二万石を領し、其内五千石を男康信よたまふ此む、仰をかうゆゑ、

康信 ^{若狭} ^(元和)五年九月、洛み上らせたまふの時、父家信とよをに伏見城よめされ、父の所領の内五千石を知行すへきよし、恩命をかうゑる、^{○譜牒餘録}

〔丹波龜山松平家譜〕

^(元和)同五己未年九月、家信、康信父子ヲ城州伏見ノ城ニ召

サレ、攝津州高槻城ヲ賜フ、是城主ノ始ナリ、此時一倍ノ加増高一萬石ヲ賜ハリ、都合二万石トナル、時ニ五十五歳、高ノ内五千石ハ、康信部屋ノ料ニ賜ハルノ由仰出サル、^{今案ニ、家信形原ニ退去セシヲ召サレ、大留守居職ニ仰ムルニ、因テ、此度賜ハル時、部屋料ノ仰アルカ、}

康信 ^(元和)同五己未年九月、台徳公在洛ノ中、召ニ依テ父ニ從ヒ、城州伏見ノ城

ニ參ル、時ニ、父家信ニ攝津高槻ノ城主并ニ加恩壹萬石ヲ賜フ、都合二万石

元和五年九月是月

七七七

高力忠房

小堀政一

政一ノ入部

ノ内、五千石ハ康信部屋料ニ頒チ與フヘキノ仰アリ、父ノ名代ヲ勤ム

〔寛政重修諸家譜〕五百一 高力忠房左近 五年九月、岩槻城をあらため、遠

江國濱松城をたゝひ、一万石を加恩あり、長上、敷智、豊田、龜玉の四郡乃うち
にうたされ、○下略、家譜に見ナシ

〔寛政重修諸家譜〕千二 小堀政一遠江 此乃年、備中國の領地を近江國

淺井郡のうちようつさゑ、○家譜所見ナシ

〔本光國師日記〕二十 一 同日、○中略

一、○中略、河内眞觀寺領ノ條ニ收ム、カ拙者も江州ニ而、備中之替知被下候間、今日罷越候、頓而罷上、可得御意候、東より御左右、此比不承候、尙追而可得御意候、恐惶謹言、

小堀遠江守

判

廿七日

金地院様 尊答

右兩通共、本文ハ久右衛門ニ渡し置也、

○小堀政一轉封ノ月日詳ナラズ、姑ク入部ノ日ニ據リテ、茲ニ掲書ス、

〔附録〕

〔譜牒餘録〕四十一 松平豐前守 元和五己未年、○中略 右御上洛之刻、於京都酒井雅

樂頭、土井大炊頭方、（天正十二年） 先年尾州犬山陣之刻、家信、野呂孫二郎を鑑付候時の

鎗差上可然旨、右兩人依差圖、獻上之仕候、○丹波松平家譜同ジ

幕府、杉田忠次、松村時直ヲ河内澁川郡ノ代官ニ補ス、

〔本光國師日記〕二十

一 先日已來者不得御意候、御床敷存候、隨而今度河内澁川郡杉田九郎兵

へ殿、松村吉左（時直）右衛門殿御兩人御代官之由候、○下略、九月十四日附、小堀政一宛、崇傳書狀全文

ハ、下ノ幕府、攝津ノ堤防ヲ修理スル條ニ收ム、

○忠次等補任ノ月日明ナラズ、姑ク崇傳ノ書狀ニ據リテ、茲ニ掲書ス、

幕府、攝津ノ堤防ヲ修理ス、

〔本光國師日記〕二十

一 先日已來者不得御意候、御床敷存候、隨而今度河内澁川郡杉田九郎兵

へ殿、松村吉左（時直）右衛門殿御兩人御代官之由候、然者眞觀寺門前、境内、守

護不入之御判頂戴仕儀、貴様御存知之通被仰渡可被下候、今度攝州堤

家信秀忠
命ニ依
鑑ヲ獻
ズリ

河内澁川
郡代官
田代官
攝津人
眞觀寺
講ノ人
ニ課ス

崇傳諸役
免除ノコ
トヲ小堀
政一ニ訴

元和五年九月是月

七八〇

普請ニ付而、人足之儀、右御兩人之御下代衆ヲ被仰置之由、留守居之者
申來候、殊ニ貴様御奉行之由候條、如有來頼存候、猶松首座口上ニ可得
御意候、恐惶謹言、

九月十四日

金地院

(小堀政一)
小堀遠江様人々御中

一 小堀遠江ハ返書來、案左ニ有、
尊書拜見仕候、如御意、先日之後御見廻も不申上候、然者河州志ふ河郡
御代官杉田九郎兵衛、松村吉左衛門仕ニ付而、眞觀寺御寺領分之義被
仰下候、委曲相意得奉存候、彼地之様子、先年より有來通、相違之義御座
有ましく候、御氣遣被成ましく候、尙松首座可被仰上候、恐惶謹言、

小堀遠江守

十四日

甫在判

拜上 金地院様 尊答

此本文、久右衛門ニ渡ス、

崇傳眞觀
寺領判物
寫ヲ杉田
忠次ニ示

一 雖未申通候、一書令啓候、河内澁川郡御代官被遊由、め出度存候、龜井村
眞觀寺、拙老進退ニ候、先年御知行被下、門前、境内、守護不入之御直判頂
戴候、爲御心得、案紙懸御目候間、被得其意、御馳走頼存候、猶使僧可得御
意候、恐惶謹言、

九月十九日

金

杉田九郎兵衛殿 御宿所

青銅百疋令進入候、御祝儀之驗迄候、

右同文言ニて、松村吉左衛門殿へも狀遣ス、兩人御判二通之案遣ス、
九郎兵衛、吉左衛門兩人共ニ永原迄御送ニ被參、テ秀忠、京都ヲ發シ、
九月十八日、廿一日ニ、伏見ニ而、松首座進物届ル、吉左ハ返書來、左之
帳之うらニ案文有、本文ハ久右衛門帳箱ニ有、九郎兵衛ハ、煩ニ而無
返事、書狀進物ハ遣ス、重而返書可越由、

一 松村吉左衛門返書之案、

御書辱拜見仕候、仍河州澁川郡之内龜井村眞觀寺之儀被仰下候、一々
得其意存候、何様共御如在申上間敷候、何様伺公いとし、萬々可得奉高

松村時直
崇傳ニ如
在傳ニ答
フジキマ

元和五年九月是月

七八一

意候、委レ此御使僧へ申上候、恐惶謹言、

九月廿一日

松村吉左衛門尉

金地院様尊報

尙々、爲御音信鳥目百疋被下候、忝次第ニ奉存候、是非ニ伺公仕、御禮可申上候、以上、

此本文、久右衛門帳箱ニ有り、

一同廿五日、松首座を伏見之小堀遠州へ遣、河内真觀寺之役義之事理り申候へレ、則兩代官へ折紙被遣、案左ニ有、

一書申入候、河州ニふ川郡龜井村高千六百拾石九斗九升ノ内、五百石ノ真觀寺領、殘而六百拾石九斗九升ノ門前之者作仕候由候、此役目之事、此已前下總殿御知行被成候時之ニとくニ被仰付尤ニ候、真觀寺領御墨印（不詳）、門前、境内ト御座候間、竹木ニとレ出申間敷事トと存候、此已前下總殿御知行之時之ニとくニ御申付候而、其上相違之事候者可承候、隨御意ニ御談合可申候、恐々謹言、

小堀遠江守

小堀政一
真觀寺領
諸役免除
杉田忠次
等告大

九月廿五日

判

杉田九郎兵衛殿

松村吉左衛門殿

右之狀、伏見ノ松首座取候而來候、松村吉左衛門へレ、松首座持參仕候、返書ノ直ニ可遣之由也、杉田九郎兵衛ノ大津ニ被居候、則爲持遣、返書來候を、遠州へ書狀相添、九郎兵衛爲持遣、

一同廿七日、右之杉田九郎兵衛返書を遠州へ爲持遣候時、書狀遣、文言、河内二ヶ寺之義、代官衆へ如先規被仰付候由、満足申候、尙松首座ノ可申上候由申遣、

一同日、右杉田九郎兵衛ノ小遠州へ之返書、遠州ノ見せニ來、并遠州ノ之返書兩通之案左ニ有、本文ノ、兩通共ニ、久右衛門へ渡ス、

一御狀拜見申候、仍ニふ川郡龜井村千六百拾石九斗九升内、五百石真觀寺領、殘而六百拾石九斗九升ノ門前之者作仕候由、此役儀、下總殿御知行之時ノとく先申付可然由、相心得存候、未松村吉左、我等仕ニけ不仕候付而、手代をも越不申候、一兩日中ニ内ニけいトし、手代遣し可申

元和五年九月是月

七八三

杉田忠次
真觀寺領
諸役免除
沙汰スベ
キコトヲ
政一ニ答

候間、前々の通り可申付候、恐惶謹言、

杉九郎兵へ

九月廿六日

印判

小堀遠江守様 貴報

一 尊書辱存候、眞觀寺領之義、杉田九郎兵衛、松村吉左衛門へ以書狀申候處、如此之返事、御座候間、相違之義、御座有間敷候、拙者も、江州こ而備中之替知被下候間、今日罷越候、頓而罷上、可得御意候、東より御左右此比不承候、尙追而可得御意候、恐惶謹言、

小堀遠江守

廿七日

判

金地院様 尊答

右兩通共、本文の久右衛門こ渡し置也、

○幕府、攝津堤防修理ノコト詳ナラズ、姑ク崇傳ノ書狀ニ據リテ、茲ニ掲書ス、

洛中屋舎
破損甚シ

風損ニ依
少リ年貢減

田畠損亡

是秋、近畿、風雨洪水アリ、伊勢長島ノ地、亦災ニ罹ル、幕府、長島城主菅沼定芳ニ、米及ビ黃金ヲ給ス、

〔土御門泰重卿記〕^三 八月九日、己未、雨天、戌刻雨ニ又風出也、

十日、庚申、大風大雨、洛中舍宅破損不斜候、

〔孝亮宿禰日次記〕^五 八月十日、庚申、雨降、風雨、

〔義演准后日記〕^四 八月十日、大風發、

〔梵舜日記〕^二 八月十日、風、雨降、大風也、

十一月五日、雨降、當院年貢米納之、壽等來、申付、例年如此也、當年風損、ヨリ少分納也、

〔春日記錄〕^七 正預祐範、元和五年紀記 一五日、大風也、

一七日、大雨也、

一八日、雨下故不參了、

一九日、參社、從酉剋大風雨終夜不止也、

二十日、以外風雨、田畠損亡ト云々、酉下剋ヨリ止了、

〔東大寺雜事記〕^二 八月九日、大雨、風、

十日雨天風

〔菅沼家譜〕左近定芳傳

一元和五己未年秀忠公御上洛其頃長嶋洪水故ニ定芳不供奉追跡上京於

水足郷訟長嶋水損之患至元老介昭ハ久世也於是恤賜八木千五百石黃金

二千兩

〔寛政重修諸家譜〕三百 菅沼定芳織部六年貞享呈譜をよひ封地水災

にうゝるよより米千五百石金二千兩をたまふ

〔參考〕

〔元寛日記〕三 一自五月三日至七月大旱魃雨不降一滴禾穗乍立枯不登

五穀由自諸國注進又不時雜尊卑疱瘡疫疾人民牛馬死夥

一八月十日天下一同洪水田畑大損亡民屋漂流人民牛馬犬雞溺夏夥故飢

死者滿街

一十二月五日天温如極暑万民著帷子猶拭汗今年天變地妖相續

〔雨窓閑話〕上 織田信長公吝嗇并印陣打の事附神君御代駿河よて御檢

約の事

諸國旱魃
疱瘡疫疾
流行

寒中極暑
ノ如シ

幕府本多
正信ノ時
へタル金
穀ヲ出シ
救世ヲシ
救済ス

此佐渡守兩三年の御儉約中、金銀米穀軍用等此手宛澤山に拵置し、元

和五年天下困窮及びし節其貯よて御救下されし由佐渡守が功爰よお

いて顯せり○上

○是歳奥羽地方五穀不作ノコト便宜左ニ合敘ス

〔塔寺八幡宮長帳〕七 元和五年未此としの春大そく小そく一切ちうい

申候そむゆへ夏米壹升か六拾五文こうも申候殊カ稻の殊々草おも能候へと

も、そのうへへしを米一切いとし不申候

幕府三河舉母邑主三宅康信ヲ伊勢龜山城ニ移ス

〔寛政重修諸家譜〕千三 三宅康信越後五年元和の秋舉母をあらためて伊

勢國みうりさき龜山城をよみふ○譜牒餘

〔三河三宅家譜〕康信元和同五年己未伊勢國龜山城ヲ賜フ

〔東武實錄〕七 是年元和三宅越後守康信勢州龜山ノ城采地一万二千石賜ル

加賜二

○康信轉封ノコト東武實錄ニハ六年ニ係ケタリ今姑ク寛政重修諸

家譜譜牒餘錄等ニ從ヒテ茲ニ掲書ス

十月大 庚戌 朔 盡

二日、辛亥亥猪ノ儀、例ノ如シ、

〔言緒卿記〕十月二日、辛亥、天晴、

一御嚴重申出、使大澤左衛門大夫、

〔孝亮宿禰日次記〕五十月大二日、辛亥、晴、禁中御ケンテウ、子忠利分令申

出、

○十四日、亥猪ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔土御門泰重卿記〕三十月十四日、癸亥、晴、入夜、御巻ん志よとりこ長橋御

局へ被參候、銀杏之葉こなうつらさ殿御書付アリ、

○諸社寺、諸家亥猪ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔春日記錄〕七正預補範元和五年七紀記 一、二日、亥ノ子餅沙汰之、大神主殿、治

部殿父子、刑部殿、向井殿、正眞院殿父子、采女殿、若神主殿他行、指合、今西殿

指合、奥殿、服忌、各無御出也、禰宜衆加藤左衛門、安右衛門、左近左衛門、三郎

右衛門、勘三郎、竹松、久助、(亥前カ)子餅酒飯有之、

一十四日、亥子餅、於大神主殿有之、參了、

一廿六日、若神主殿ニ亥子有之、連歌出座故不參也、餅鈴ツル送給了、

〔東大寺雜事記〕二十月二日、於金藏院ニイノコアリ、行、

七日、於上院イノコ、引上而アリ、坊内皆請、

十四日、イノコ也、

〔言緒卿記〕十月廿六日、乙亥、天晴、

一興門主光來、夕飯振舞申了、

一來衆、妙清、同竹、夜叉、チマ、クリ、

一餅參スル方々、大上様、冷泉中將、藤谷少將、四條侍從、御茶々、楠木主水、竹内

刑部少輔、長者町二條等也、

十二日、辛酉幕府、河鰭基秀、西大路隆郷ニ、新ニ知行ヲ給シ、姉小路公景、飛

鳥井雅宣、綾小路高有、日野西總盛ノ知行ヲ加増ス、尋デ、倉橋泰吉ニモ

知行ヲ給シ、壬生忠利ニ極藤料ヲ給ス、

〔菊亭文書〕十六○山城

(包紙)諸家新

元和三年以來領知差出

慶安四年正月日

元和五年十月十二日

元和五年十月十二日

(編纂書) (基秀) (朱書)
一川鱒三位(元) (和) (五)

元和五年十月十二日

川鱒家領之内

三拾五石壹斗

五拾七石貳斗貳升八合

五石五斗貳升貳合

貳石貳斗四升

右合百石也(九斗九升)

西土川村

西坂本村

岡村

上久世村

(編纂書) (隆郷) (朱書)
一西大路(元) (和) (五)

覺

一八拾石三斗四升

一拾七石四斗七升

一貳石壹斗九升

合百石也

上植野村

岡崎村

岡村

右元和五年十月十二日知行仕候

西大路少將(隆郷)

(編纂書) (姉小路) (朱書)
一姉小路中納言(元) (和) (五)

姉小路中納言高貳百石之内 百石者

上植野村之内

清水村之内

坂本村之内

元和五年十月十二日御加増

八拾石

貳石八斗四升九合

拾七石壹斗五升壹合

(編纂書) (飛鳥井) (朱書)
一飛鳥井中納言

元和五年十月十二日、爲新地御加増、山城國上植野村之内七拾九石五斗三升、野中村之内貳拾石四斗七升、合百石致拜領候、

飛鳥井

中納言(雅宣)

元和五年十月十二日

元和五年十月十二日

七九二

綾小路高

(編纂書) 和 五綾小路[○]元 和 五年 八、高 有
(元書) 元和五年十月十二日 御加増

九拾貳石五斗七升

寺戸村

七石四斗三升

上久世村

右之通り書付致進上候、

正月十四日

俊良

廣橋大納言殿

〔綾小路家譜〕

第八代 高有 同五年十月十二日家祿百石加増

〔菊亭文書〕

○十六城

(包紙) 家新知

元和三年以來領知差出

(編纂書) 慶安四年正月日

〔日野西〕

○元 和 五年 八、總 盛
ノ 世 代 = カ、ル、盛

覺

略○中

日野西總盛

倉橋泰吉

無足衆ニ 知行ヲ給 知行ノ由 風説ヨリ 傳奏ヨリ 倉橋泰吉 與ノ知行 告給

元和五年十月十二日

七九二

綾小路高

(編纂書) 和 五綾小路[○]元 和 五年 八、高 有
(元書) 元和五年十月十二日 御加増

九拾貳石五斗七升

寺戸村

七石四斗三升

上久世村

右之通り書付致進上候、

正月十四日

俊良

廣橋大納言殿

〔綾小路家譜〕

第八代 高有 同五年十月十二日家祿百石加増

〔菊亭文書〕

○十六城

(包紙) 家新知

元和三年以來領知差出

(編纂書) 慶安四年正月日

〔日野西〕

○元 和 五年 八、總 盛
ノ 世 代 = カ、ル、盛

覺

略○中

日野西總盛

一高百石

同所

元和五年十月十二日知行御加増、

右合貳百石

日野西

(編纂書) 元和 五年 倉橋 三位

泰吉新地拜領之覺之、元和五年十月二、寺戸村ニ而百石、寛永拾五年九月二、

唐橋村ニ而五拾石、兩度ニ都合百五拾石ニ而御座候也、

正月十三日

泰吉

〔土御門泰重卿記〕

三 九月十六日、丙申、晴、家君伏見へ御暇乞ニ御出候、○

略、公家衆、伏見城ニ抵リ、秀忠ニ對面スル、無足衆知行出申候由承及、珍重也、

倉橋手前知行出之由、自愛不淺候、

廿五日、乙巳、晴、今日從兩天奏、倉橋ニ知行百石被下候由申來候、忝之由返事

申入畢、

廿六日、丙午、晴、於國母様、倉橋知行御禮之事申上候、

元和五年十月十二日

七九三

元和五年十月十二日

七九四

壬生忠利

〔孝亮宿禰日次記〕

五

九月小二日、壬午、晴、就知行御朱印之事、速水安藝守

書狀來、鹽小路并忠利知行之事、板倉伊州迄可示合由、前内府（傳）被仰云々、

○通規知行ノシ、

ト諸書所見ナシ、

十三日、癸巳、晴、忠利知行所仰出有之、近日自板倉伊州可告知之、内々示之由、

廣橋前内府有命、

十月十七日、丙寅、曇、忠利極藤料知行所上植野村庄屋來、

〔壬生家譜〕

中

忠利

（元和）

同五年十月十二日、爲極藤知行、上植野村之（内訖之）九十二

石八斗五升、下津林之内七石一斗五升、合高百石賜之、

〔壬生文書〕

○二 京都帝國大學所藏文書所收

山城國上植野村之内九拾貳石八斗五升、下津林村之内七石壹斗五升、合百石之所、今度爲新知被遣之候、從當未季可有御所務候、御朱印之儀、重而申請、可進之候、爲其如此申達候、恐惶謹言、

板倉伊賀守

勝重（花押）

元和五年十月十二日

極藤殿

○土御門久脩ノ請ヲ聽シ、其次子泰吉ニ、別家取立ヲ命ジ給フコト、慶長十七年十二月十一日ノ條ニ見ユ、幕府、清水谷實任、小倉公根、花園公久、裏辻季福、藤谷爲賢、油小路隆基、七條隆脩、久世通式、岩倉具起ニ、新ニ知行ヲ給シ、西坊城遂長、東園基教、平松時興（時）ノ知行ヲ加増スルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔菊亭文書〕

○十六山城

（包悉） 家新知

元和三年以來領知差出

慶安四年正月日

（端裏書） 清水谷前大納言（實任） 和五

清水谷前大納言知行

上桂村之内 百石

岡村之内 貳拾五石八斗三升九合

馬場村之内 七拾三石九斗五合

上植野村之内 貳斗八升

元和五年十月十二日

七九五

任清水實

元和五年十月十二日

合貳百石

元和五年より拜領所務仕候

小倉公根

(編纂書) 小倉「元永」十五 ○元和五年ハ、公根

小倉知行所

高百五拾石

内

拾六石九斗六升五合ハ、

寺戸村

四拾三石八升ハ、

一乗寺村

參拾九石九斗五升五合ハ、

東福寺廻

百石 右者元和五年ニ拜領

花園公久

(編纂書) 花園「元永」十五 花園中將「元永」十五

下鴨村

五拾四石五斗三升

下坂本村

貳拾七石壹斗二升二合

裏辻季福

(編纂書) 裏辻「元永」十五 裏辻「元永」十五

元和五年ニ、

塔森村

拾五石四斗五升八合
貳石八斗七升八合

西岡村

高百石 略○中

慶安四年

正月十三日

實景

藤谷爲賢

(編纂書) 藤谷「元永」十五 藤谷「元永」十五

元和五年

高百石三ヶ所

上植野村

高五十四石七斗

元和五年十月十二日

元和五年十月十二日

出灰村

高二十九石六斗六升

大藪村

高十五石六斗四升

合百石

油小路隆基

(宋書) 一油小路前中納言〔元永和十五年〕 ○元和五年八、隆基

初拜領仕候分

元和五年

市原野村

一高五拾三石

上植野村○中

同年 一高四拾七石

七條隆脩

(宋書) 一七條〔元永和十五年〕 ○元和五年八、隆脩

七條拜領所之事

一高九拾四石九斗五升五合

山城國西岡之内馬場村

一高五石四升五合

同國之内法勝寺村

右貳ヶ所合百石者、元和五年ニ拜領仕候、○中

惣高合百五拾石

慶安四年正月十四日卯ノ

七條中將〔續四〕

久世通式

(宋書) 一久世〔元永和十五年〕 ○元和五年八、通式

久世中將知行所

一貳百石

下久世村

元和五年十月十二日、拜領申候也

岩倉具起

(宋書) 一岩倉〔元永和十五年〕

岩倉宰相知行

岡村之内

七拾貳石壹斗五升七合

今熊野村之内

拾九石八斗七升

下久世村之内

七石九斗七升三合

元和五年十月十二日

元和五年十月十二日

合百石、右新地、元和五年に拜領

八〇〇

西坊城途

(編纂者) 一、元、和、五、高辻侍從、坊城氏ヲ稱ス、西

高辻少納言

古帳ニ有、
一七拾九石

一乘寺村

同

吉祥院村

同

朱雀村

元和五年二月日

上桂村

合貳百石

東園基敷

(編纂者) (朱書) 一、東、園、和、五、〇、元和五年ハ、基敷

東園家領之事

山城國

朱雀村之内

三拾石

芹川村之内

四拾貳石五斗壹升

郡村之内

七石四斗九升

右者、最初ハ爲家領所務仕候、

同

松ヶ崎村之内

五拾石

久我村之内

五拾石

是ハ、元和五年、爲御加増拜領仕、所務仕候、

惣高合百八拾石

東園中將内

雜掌

平松時興

〔平松文書〕

〇二 京都帝國大學所藏文書所收

山城國寺戸村之内八拾三石三升五合、大藪村之内拾六石九斗六升五合、合百石之所、今度爲御加増被遣之候、從當未歲可有御所務候、御朱印之儀、重而申請可進之候、爲其如此申達候、恐惶謹言、

板倉伊賀守

勝重(花押)

元和五
十月十二日

元和五年十月十二日

八〇一

元和五年十月十二日

平松殿

河緒基秀

〔河緒家譜〕

基秀卿實左近衛權中將基久母慶長十一年丙午年月日誕生同十

六年十二月三十日敍從五位下六才同十九年二月十六日元服聽昇殿九歲

同日任侍從元和二年正月五日敍從五位上十養父公康ノ事蹟ハ天正三年

ヲ以テ終リ其後ヲ記サズ此際一時廢絶セルモノナラン

西大路家ノ再興

〔西大路家譜〕

自文明五年至元和六年凡百四拾八年中絶元和本書西大路家中

絶トナスハ

隆鄉父正二位權大納言廣橋總守女正五位下左近衛權少將

〔諸家傳〕

西大路隆鄉實權大納言總母慶長十五年十一月九日

誕生元和六年閏十二月廿日從五位下十二同月廿四日元服昇殿同日侍從

清水谷家ノ再興

〔諸家傳〕

清水谷公松實久卿男實權中母永正八年正月廿八日

從五位下同年七月廿七日侍從同十二年十月十六日從五位上加級已來

至慶長六年中絶永正十四年

〔清水谷家譜〕

實任時公孫男實阿野季天正十五年六月三十日誕生慶長六

年正月六日敍爵

〔小倉家譜〕

系譜并事蹟

小倉家ノ再興

季藤從四位上右近衛權中將母姓

公根從三位參議實三條西左近衛權中將實教男實母新野左馬頭女

公根母姓氏不詳天正十二年甲申年誕生月日傳記元和五年正月六日敍爵本書ニ據

正末年ノ頃勅勘ヲ蒙ル此際家領ヲ失ヘルカ

〔花園家譜〕

公久廓然院內大臣公孫左中天正十九年月日誕生元和

五年正月六日從五位下○本書ニ據ルニ公久

裏辻家ノ創立

〔裏辻家譜〕

季福正親町從一位季秀一男右少將從四位下季康男裏築地

家始祖從三位參議右中將正保元九二薨四

〔諸家傳〕十三裏辻季福正親町左中將母慶長十年七月廿六日誕生

元和五年正月六日從五位下十五

〔藤谷家譜〕為賢從二位納言大職冠鎌足二拾七代權大納言正三位冷泉為

滿次男號藤谷

〔冷泉家譜〕

元和五年十月十二日

為滿權大納言、正三位、為賢、為藤谷元祖、

〔諸家傳〕下十三 藤谷為賢冷泉權大納言 母、文祿二年八月十三日誕生、

慶長十一年六月五日從五位下十四 同日、元服、昇殿、同十五年閏二月十三日

侍從、同十七年正月五日從五位上廿 同十九年正月五日左權少將、同廿年

正月五日正五位下廿三 元和五年正月六日從四位下廿七

〔油小路家譜〕 隆繼隆夏男、實參議房任、卿男、母、從二位、前權中納言、隆基、位元、和五年、至中絶八十五年、

自隆繼隆夏男、實參議房任、卿男、母、從二位、前權中納言、隆基、位元、和五年、至中絶八十五年、

中絶已後、號油小路大宮、モト

隆基 前内大臣兼勝公二男相續、母准大臣光康公女、

〔諸家傳〕五下 油小路隆基元隆經、又隆良、隆繼、卿男、實前内大臣兼勝公次男、 母准大臣光康公女、

文祿四年誕生、元和五年正月六日從五位下廿五

〔七條家譜〕 隆脩水無瀬前中納言、氏成、權中將、 慶長十七年十二月廿日生、寬

文九年十月廿五日、五十八歲ニ卒〇本條家ノ祖ナリ、隆脩

〔諸家傳〕上十四 七條隆脩水無瀬前中納言、氏成、權中將、 母、慶長十七年十二月廿日誕

生、元和六年十二月廿日從五位下九 歲、

七條家ノ創立

久世家ノ創立

〔久世家譜〕 通式大納言、久我敦通次男、 寬永五年五月一日卒〇本書ニ據

久世家ノ祖ナリ、

〔諸家傳〕上十四 久世通式敦通、卿次男、 母、文祿二年誕生、元和二年十

一月廿一日從五位下廿四 同年十二月五日元服、昇殿、侍從、同四年正月十四

日右權少將、同五年十二月廿五日從五位上廿七

〔岩倉家譜〕 具起具起、男、母、園頭、 慶長六年辛丑六月十四日誕生、元和五年

己未十月二日、敍從五位下十九 歲、

〔久我斷絶庶流家譜〕坤

櫻井木工頭、正 具起岩倉祖、權中納言、

〔東園家譜〕 基教園贈左大臣、基任、公二男、 寬永十三年十月卒〇本書ニ據

東園家ノ祖ナリ、

十四日亥、癸 砲術師田付景澄歿ス、

〔寛政重修諸家譜〕四百四十八 田付

景定美作守、今乃呈譜、兼定に作る、

景澄兵庫助、

元和五年十月十四日

世系

東園家ノ創立

岩倉家ノ創立

元和五年十月十四日

八〇六

景治四郎兵衛、兵庫

景澄 母は伊庭藏人某の女、父景定生害せし、○景定、永祿十一年九月、織田信長ノ爲メニ殺サルいと孝なきにや、田付○近江國神崎郡を去て、攝津國三田よりうつり住し、まゝ美濃國に閑居せ、かつて炮術に長せしにより、其聞えあきて、慶長十八年、めさきて東照宮に召せられたるに、下總國香取郡に在りて、采地五百石をたまふ、十九年、大坂乃役に供奉し、元和元年此役より、土井大炊頭利勝に屬し、首一級拔得たり、五月七日、敵備前嶋比櫓より志きりに銃炮をそれち、御先備えりられ、景澄、安藤對馬守重信より下知により、大筒をそれり、五度にをよひ、漸く志りまる、其此ち、仰あきて、か乃大筒に、象眼よて、景澄の姓名拔え、そのひとりの浦此苦（屋敷）と銘せらる、おと定家より浦乃苦屋と詠せしころ、拔とりて、景澄のおひ申せしなり、後代々炮術技師範し、田付流と稱せ、あらはれ、そのころ乃書、銃炮打方、十三段初心集、同別卷、銃炮傳來記、中筒打方、鶴鐘問答、求中集、同別卷、十二影此書、直し方此書、早打此書、出合打方、算法、大筒町積、銃目録、銃算書、目當乃祕事家の文字、三方一圓等十八部なり、元和五年十月十四日死せ、年六十四

履歴

家康ニ仕

大坂陣ニ
使用セルニ
大筒ノ一
ヲ浦ノ一
屋ト名ク
田付流
著述

子景治嗣

花押

元和五年十月十四日

八〇七

〔花押彙纂〕

部タ之

田付景澄

〔参考〕

法名宗鏡今此呈講、剃髮號 采地香取郡いちのわけめ一分目村乃善雄寺に葬る、
景治 母は某氏、元和五年十二月、遺跡拔たまひ、父よはきて、銃炮乃ことを
うたぬる、○下
○景澄、家康ニ祿セラル、コト、慶長十八年是歳ノ條ニ見ユ、



○田付流砲術傳書
慶長拾七年閏十月七日附景澄砲術傳書

〔印章彙纂〕

部タ之

田付景澄

元和五年十月十四日

八〇七

元和五年十月十四日



○田付流砲術傳書
慶長十七年閏十月七日附景澄砲術傳書

〔本朝武藝小傳〕

八砲術 田付兵庫助景澄

田付兵庫助源景澄者、砲術達人也。其父美作守景定者、江州神崎郡田付村之人。而佐々木庶胤也。景澄以其藝奉仕東照宮。改宗鐵。其子兵庫助景治相續其藝。其子四郎兵衛方圓奉仕大猷大君。其子四郎兵衛直平繼箕裘之藝。其名徧於海內。推曰田付流。

景澄、稲富、安見、一夢、元勝、併稱セラル

或人曰、田付宗鐵、稻富伊賀、安見隱岐三人を、其比、鐵炮の名人と、京田舎共(元勝)、風聞し侍る。

〔日本武術系譜略〕

砲術

源景澄

田付兵庫助、後改宗鐵、砲術達人也。其父美作守景定者、江州神崎郡田付村之人。而佐々木庶胤也。景澄以其術奉仕于東都。

景治 同兵庫助、

方圓 同四郎兵衛、

下リ三位ノ大事

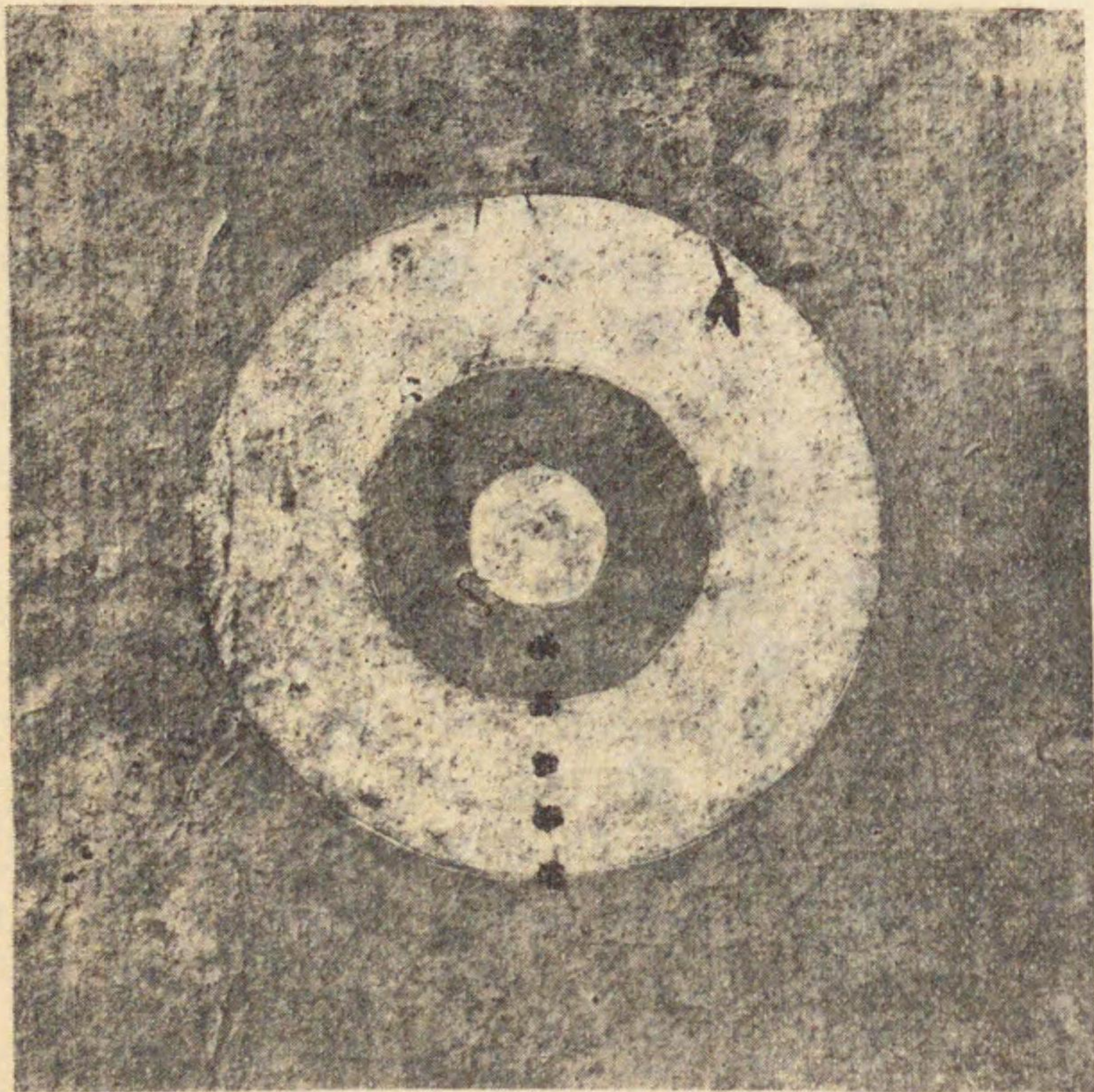
直平 同四郎兵衛、

〔田付流砲術傳書〕

○三浦周行氏所藏

○コノ前ニ落テアリ、

以上下リ三位之大夏口傳



○中央ノ圓形ノ部分ハ銀泥、其次ハ金泥、其次ハ銀泥、外ノ方形ノ部分ハ金泥ナリ。

元和五年十月十四日

一右之口傳ニ云、町ヲ打時、一人シテ打位アリ、又二人シテ、一丁ノ筒ヲ、カハ
 リ、ニ打位アリ、
(朱摺下同)
 一四キニ付而ノ積アリ、是大事ノツモリアリ、
 一其日ニヨリテノ位アリ、是ハ其座ニヨリテノ口傳多シ、
 一鐵炮ノ地當ニヨリテノツモリアリ、
 一藥ノ上中下ニヨル口傳アリ、
 一其人ノ手前ニヨル位アリ、是第一ノタンテンナリ、此位ヲ見ハカライテ、
 人ニウタスル事、尤之口傳ナリ、
(傳説カ)
 右之大事工夫口傳、不殘悉御相申候者也、

慶長拾七年十月三日

田付宗鉄入道 (朱押)

殿參 宛名ヲ擦リ消シタリ、下同ジ、

十二空ノ大事

○一拾二空之大事 (朱摺下同)

一此工夫ハ遠近自由之法ト云、誠フシキ之積、キタイノ口傳也、
 一三匁玉、三匁五分ノ玉 行分マ、
(タスリ下同)

十八空ノ大事

○一拾八空之大事

- 一 一兩玉 6分マ
- 一 五匁玉、六匁玉 行分マ、
(タスリ下同)
- 一 拾匁玉 2匁マ
- 一 拾五匁玉 2匁マ
- 一 貳拾匁玉 2匁マ
- 一 貳拾五匁玉 2匁マ
- 一 參拾匁玉 3匁マ

以上拾八空ノ大事

右之工夫ニ云、二町ノ積ニテ三町ヲウチ、三町ノ位ニテ二町ヲ打ツモリ也、
 也、是小筒之位也、又大筒五町ノ位ニテ八町ヲ打、八町ノツモリニテ五町ヲ打、
 拾町ニテ八町、八町ニテ拾町、何モ自由自在也、

田付兵庫助入道

元和五年十月十四日

慶長拾七年十月九日

八二二
朱印
花押

○一八風之大事

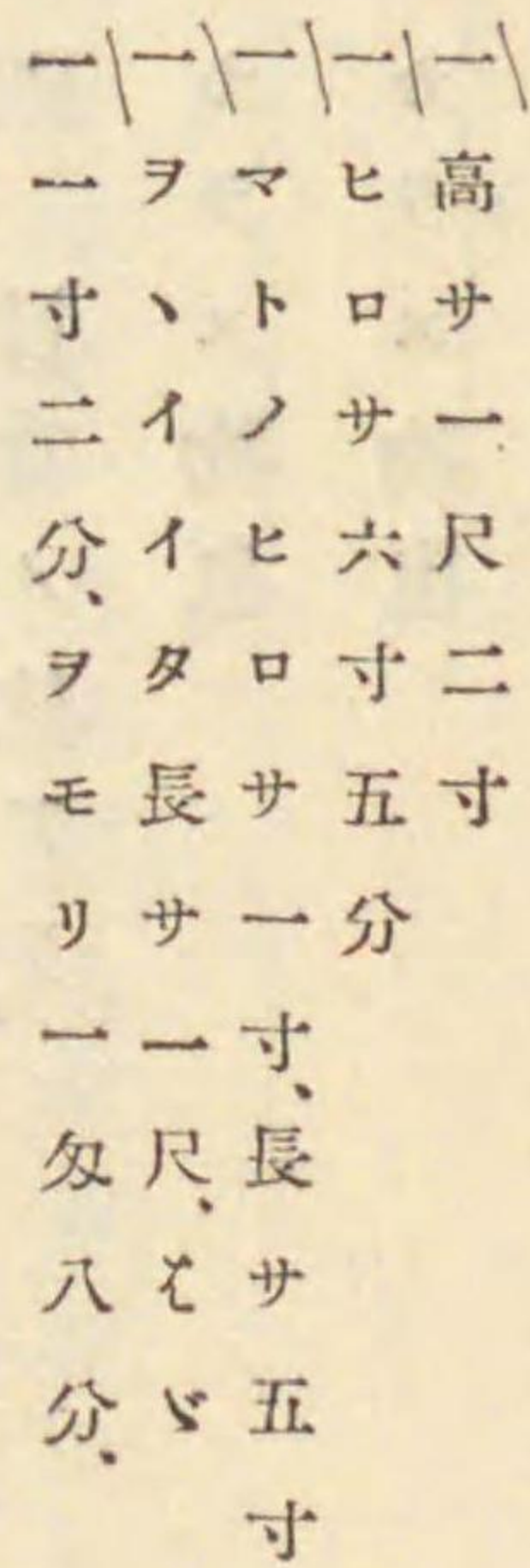
八風ト云事、東西南北、其角ノヨリ吹ニヨリ、八風トハ名付タリ、カセニ付而ハ種々工夫アリ、鐵炮ノヤマイト云ハ風也、風アル時ハ當事マレ也、此口傳相傳申候てハ、又アタラヌト云、
 一其月ニヨリテ、風ノ口傳アリ、
 一其日ニヨリテ、目當之口傳アリ、
 一地ニ付而吹風、目當ヲカユル位有リ、
 一空ニ吹風、藥ニ付而工夫アリ、
 一前ニ吹風、藥ニ心持アリ、
 一サキニ吹風、目當ニ口傳アリ、
 一ヨコサマニ吹風、目當、藥ニ口傳アリ、
 一セナカニヨイテ吹風、藥ニ口傳アリ、

一ムカヒテ吹風

目當、藥ニ口傳アリ、

以上、右九イロニワケテ、其位ヲ工夫ナクシテハ、中ノ當、
 右之大事ニ、水道風知之位ト云、
 ○風ヲ見ル様

○一風窓之



以上

慶長拾七年十月十一日

田付宗鉄入道
朱印
花押

○一雨フリノ打様之大事

雨ノツモリ風ヨリモ大事ノ物也、雖然風ハ大小ニヨラス、日々夜々天地ニ
 タヘスアル故ニ、第一ノ大事ニ思也、雨ハ月ニヨリ日ニヨル事ナレハ、第二

元和五年十月十四日

八一三

十雨十躰ノ位

ノ大事ニ仕也此十雨十躰之打様無相傳人ハ中ノ當事不在之天地草木
十躰ノ心ヲ

心ナキ土モ草木モ水マテモ雨ヨリ出ル心トハシレ

○拾雨拾躰之位

- 一 春雨ノ位 正月十五日ヨリ二月マテ藥ヲカエテ目當ニ位アリ
- 一 五月雨ノ位 雨フル時ハ不及申雨フラス時モ天地シメル夏也目當ヲカヘテ藥ヲマス位アリ
- 一 夜るフリテ朝ニアカル雨 朝四ツ時マテハ藥ニ位アリ
- 一 二日三日フル雨 目當ノ位アリ
- 一 村雨 クルシカラヌ物也
- 一 夕立 クルシカラヌ物也
- 一 八月ニフル雨 藥ノ積アリ目當ヲカユル事也
- 一 風マセニフル雨 目當ヲカヘテ藥ノ積アリ
- 一 一時雨 目當ヲカヘテ藥ノ位アル事也
- 一 雪ミソレ 目當ヲカヘテノ積藥ヲカユル位アリ

以上

右拾雨拾躰之大事工夫口傳悉御相傳申候者也

田付兵庫助入道

慶長拾七年後十月二日

□(朱印)花押

藥籠ノ次第

○藥籠之次第是第一之祕蜜也此兩目少も相違候ハ度々ニ當事不在之者也

○一三匁五分玉ヨリ三匁玉マテ

- 一一町 2匁
- 一一町五反 2匁
- 一二町 2匁
- 一二町五反 2匁 5匁
- 一三町 2匁 5分
- 一三町五反 2匁 5分

元和五年十月十四日

玉五
匁六
匁

元和五年十月十四日

一六町	三匁	五匁
一六町五	三匁	五匁
一七町	四匁	
一七町五	四匁	
一八町	五匁	
以上		
○一五匁六匁玉		
一町	三匁	五匁
一町五	三匁	五匁
二町	三匁	五匁
二町五	四匁	
三町	四匁	
三町五	四匁	
四町	四匁	五匁

兩玉ノ積

元和五年十月十四日

一四町	二匁	五匁
一四町五反	三匁	三匁
一五町	三匁	三匁
以上		
○一兩玉之積		
一町	二匁	五匁
一町五	二匁	五匁
二町	二匁	五匁
二町五	二匁	五匁
三町	二匁	五匁
三町五	三匁	五匁
四町	三匁	五匁
四町五	三匁	五匁
五町	三匁	五匁
五町五	三匁	五匁

元和五年十月十四日

一八町	一九町	一九町五	一十町	一十町五	一十一町	一十一町五	一十二町	一十二町五	一十三町	以上	〇一 30 匁 タマ	一一町
20	20	20	20	20	20	20	20	20	30			10
4匁	4匁	4匁	5匁	5匁	7匁	7匁	8匁	8匁	2匁			8匁

元和五年十月十四日

一一町	一二町	一二町五	一三町	一三町五	一四町	一四町五	一五町	一五町五	一六町	一六町五	一七町	一七町五
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	20	20
2匁	2匁	2匁	5匁	5匁	5匁	5匁	8匁	8匁	8匁	8匁	2匁	2匁

三十五
玉 匁

元和五年十月十四日

○ 一 30 5匁
タマ

一 十四町	一 十三町五	一 十三町	一 十二町五	一 十二町	一 十一町五	一 十一町	一 十町五	一 十町	一 九町五	一 九町	一 八町五
30 3匁	30 3匁	30 2匁	30 2匁	20 9匁	20 9匁	20 7匁	20 7匁	20 7匁	20 6匁	20 6匁	20 6匁
但 30 2匁	但 30 2匁		但 20 9匁		但 20 7匁						

元和五年十月十四日

一 八町	一 七町五	一 七町	一 六町五	一 六町	一 五町五	一 五町	一 四町五	一 四町	一 三町五	一 三町	一 二町五	一 二町	一 一町五反
20 6匁	20 4匁	20 4匁	20 4匁	20 4匁	20 4匁	20 4匁	20 2匁	20 2匁	20 2匁	20 2匁	10 8匁	10 8匁	10 8匁
							但 20	但 20	但 10 8匁	但 10 8匁			

元和五年十月十四日

一町	20	2	匁
一町五	20	2	匁
一二町五	20	2	匁
一三町	20	2	匁
一三町五	20	4	匁
一四町	20	4	匁
一四町五	20	4	匁
一五町	20	8	匁
一五町五	20	8	匁
一六町	20	8	匁
一六町五	20	8	匁
一七町	20	8	匁
一七町五	20	8	匁

元和五年十月十四日

一八町	30	30	匁
一八町五	30	30	匁
一九町	30	30	匁
一九町五	30	30	匁
一十町	30	30	匁
一十町五	30	30	匁
一十一町	30	30	匁
一十一町五	30	30	匁
一十二町	30	30	匁
一十二町五	30	30	匁
一十三町	30	30	匁
一十三町五	30	30	匁
一十四町	40	40	匁
一十四町五	40	40	匁

元和五年十月十四日

一十五町 40

以上

十四
十五
玉
五
四

○一 40
405
50
タマ

一一町 30

一一町五 30

一二町 30

○コノ
アノ
間ニ

慶長拾七年

後十月三日

田付兵庫助入道

□(朱
押印)

八二八

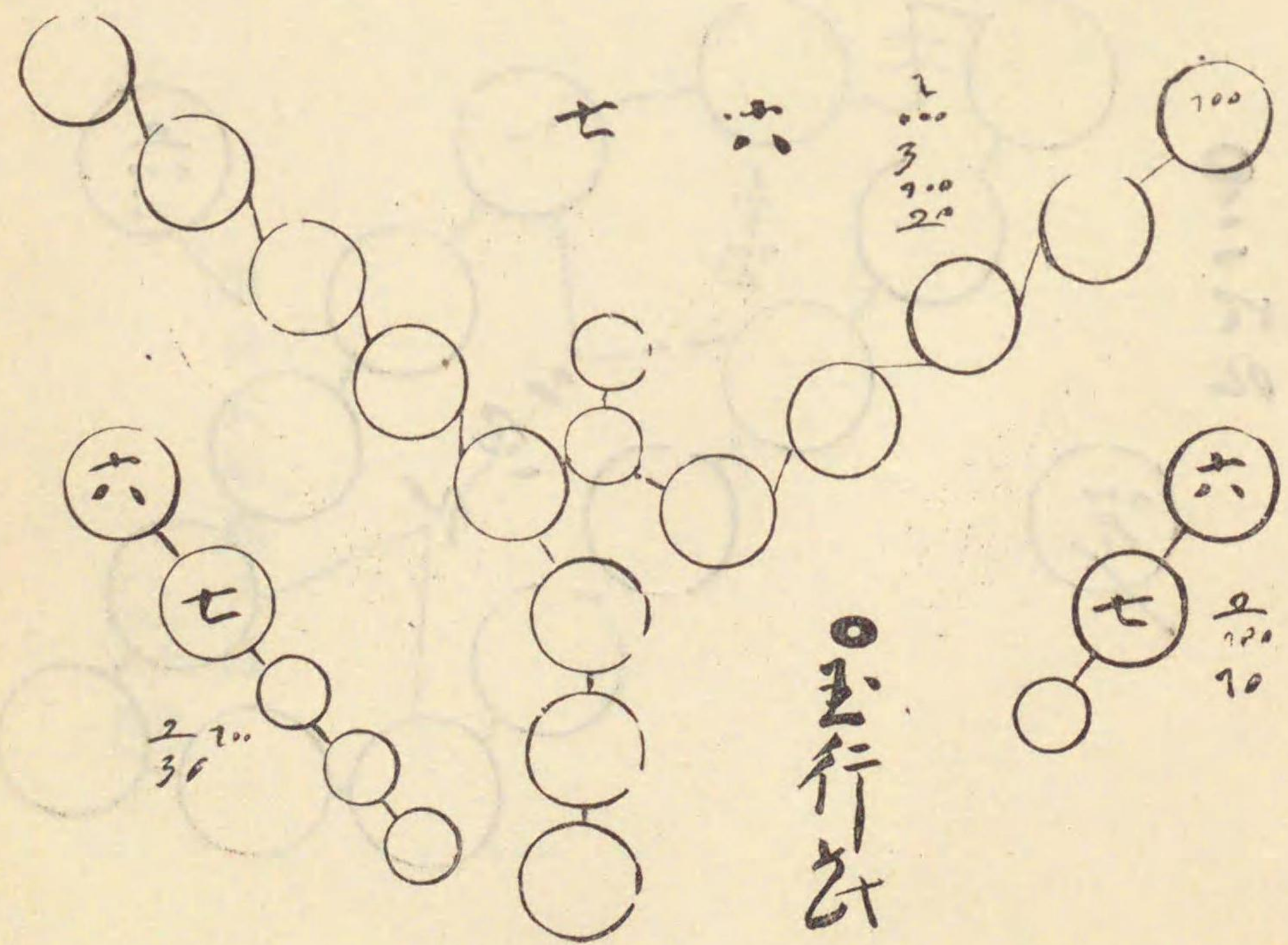
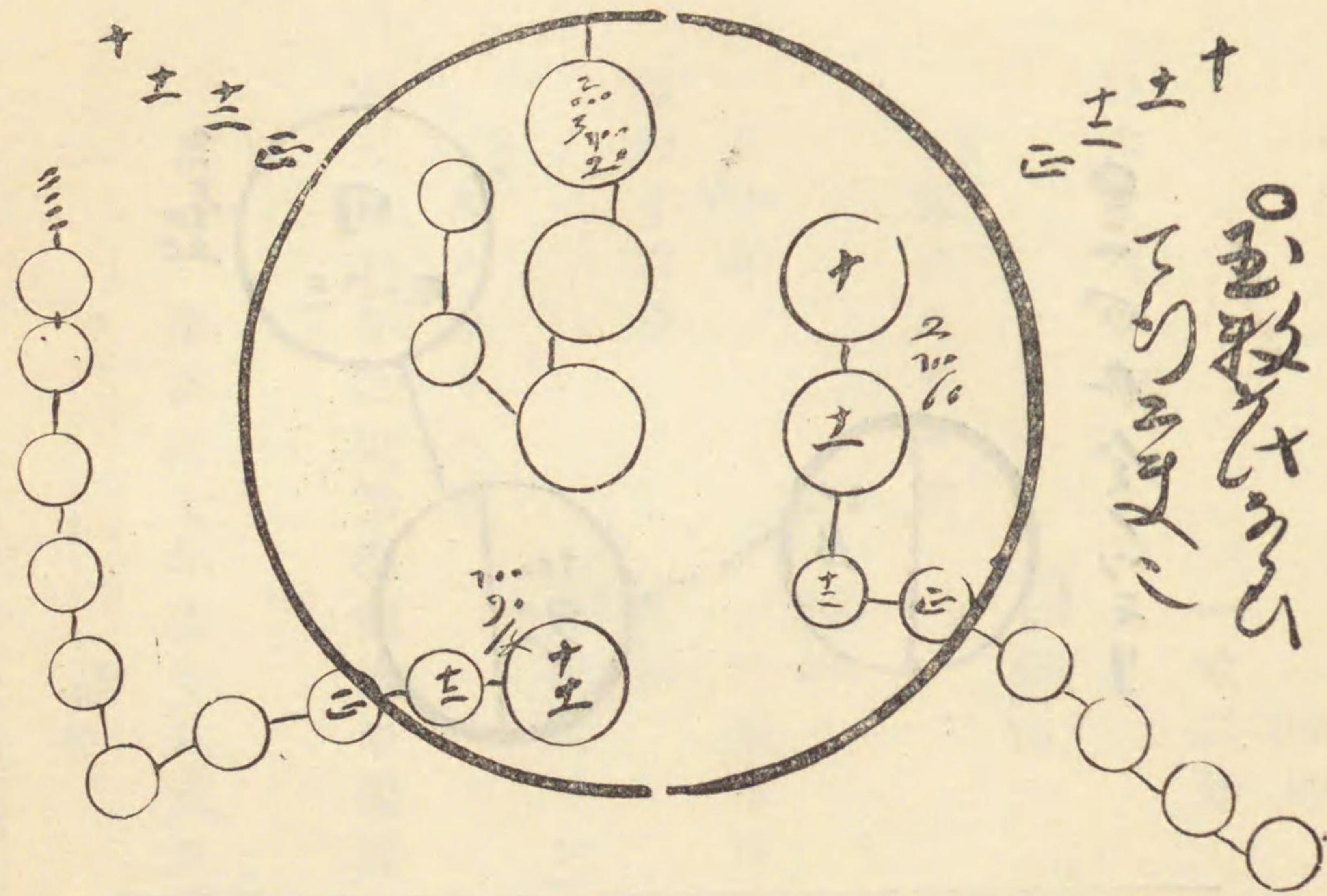
本地
妙法
ノ位

○本地妙法之位

天地のあそびを渡せよしあまは色をかちちも空のくうあり
一とせを四りよわすたる工夫よ里はもる工夫の六りよこそあま

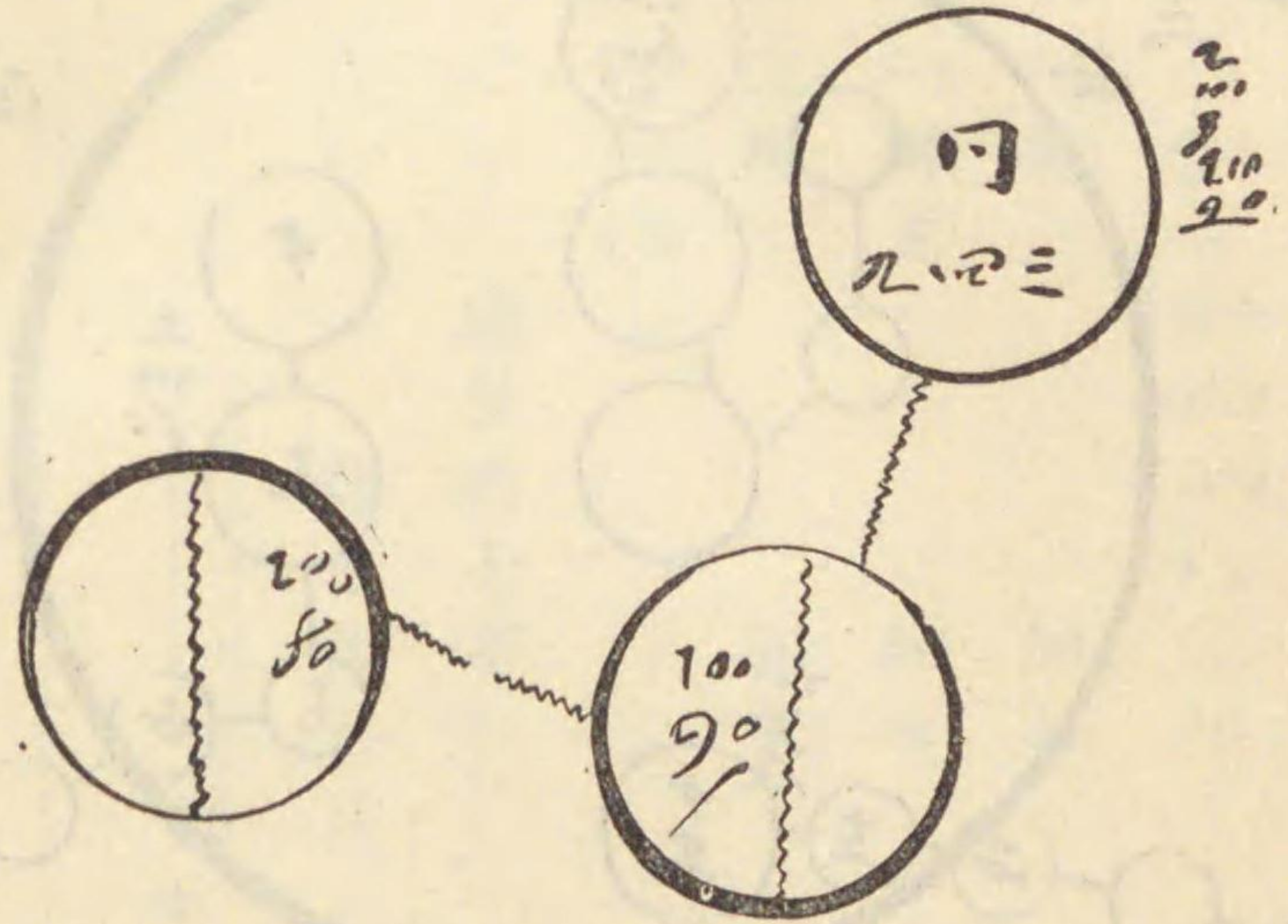
殿
參

元和五年十月十四日



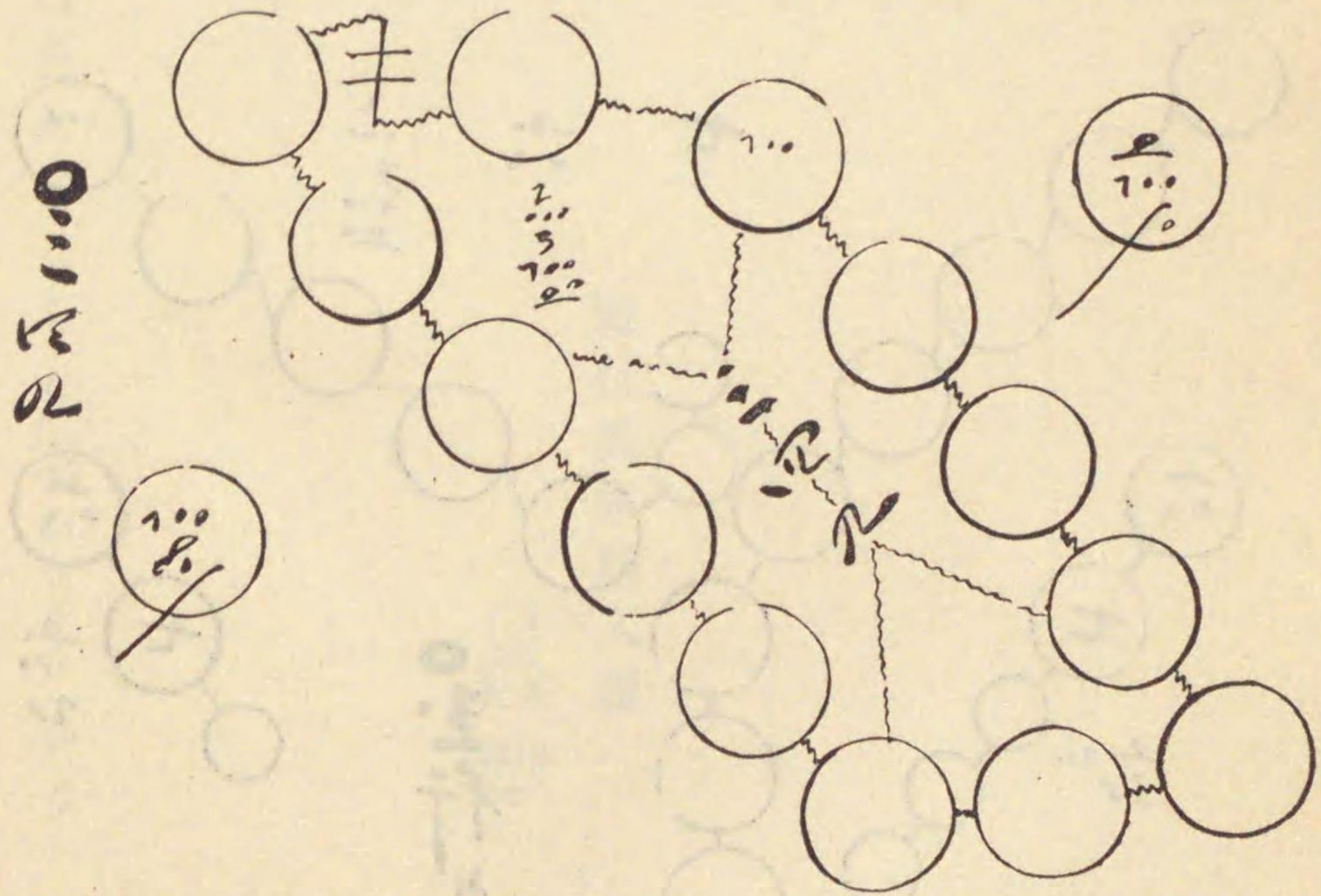
八二九

元和五年十月十四日



〇二四九令ノツマリ

八三〇



〇二四九

一寸二分 100 20

〇六寸六分

〔朱書〕七分 70

〔朱書〕五ノカ子ニ吉

一寸五リン 100 5

〇六寸六分 6 100 60

〔朱書〕六分六リン 60 6

〔朱書〕八ノカ子ニ吉

右天地和合之位、悉御相傳申候者也、

田付兵庫助入道

〔朱印〕花押

慶長拾七年後十月五日

殿 参

元和五年十月十四日

八三一

元和五年十月十四日

○町幕立様同カラカサ

一二町三町 小筒ニテ打、カサノノリ一尺アル吉、

一四町三町五反 小筒、中筒、一尺五寸ノノリ吉、

一五町六町 筒、大小共ニ、二尺ノノリ吉、

一七町八町 三尺ノ位吉、

一九町十町 四尺ノノリ吉、

一十一町十二町 五尺ノノリ吉、

一十三町四町 六尺五寸ノリ吉、

以上、亥之外當ツヨキ鍛鍊也、

異風物

○一異風物但一兩玉、五匁六匁有、心也、藥ニカハリ有、

一町五反 1 寸 5分

一二町 3 寸 7分

一二町五 6 寸 7分 5リ

一三町 9 寸 7分 5リ

一三町五 1 分 2 寸 8分

一三町五

三ノ外

一四町

二ノ外

一四町六

二ノ外

一五町

三ノ外

一五町六

三ノ外

右之得道早入

左之得道早入

秋



田代流

一四町五
一四町五
一五町

3尺 2尺 2
3m 4m 尺
5寸 1m

田付流絶術傳書 京都三浦潤氏所藏

原寸大

一三所立

攻の流木

一四町立

定流

一四町立

定流

一五所立

定流

一五所立

定流

一

右之得流

田付流

是流指立



初志

一三町五
一四町五
一四町六

定規
定規
定規

一四町 2尺2寸
一四町五 2尺4寸
一五町 3尺
一五町五 3尺2寸
以上 3尺6分

右之口傳悉申入候者也、

慶長拾七年壬十月七日

田兵庫入

朱押印

様參

三十夕玉

○一 30夕玉
一長サ六尺八寸 本口三寸一分二分
末口二寸五分六分 前目當高サ
一寸三分四分
一(地)行生(物)カ、リ

元和五年十月十四日

一夜明ヨリ四ツ時分マテ、一光ノ位アリ、下、

右之鍛鍊悉相傳申候者也、
○一三光之位

北	南	西	東
内此	其此	八此	也此
十方	内方	九方	其方
一十	六へ	二へ	内へ
テ	七向	心向	二向
十打	ニテ	持テ	三打
二時	少打	ア打	ニ打
正ハ	心時	リ時	心時
十五	アハ	其ハ	積者
心モ	リ越	外ロ	リヨ
持下	也	ハク	口リ
アル	也	ク其	傳越
リ	也	ク也	事
		内	

以上此工夫種々口傳共多シ、
右之口傳能御相傳申候者也、
○一四方之目當ト是モ云光之位

103丁	103丁	102丁	102丁
5	5	5	5
6尺	5尺	5尺	4尺
7	5	5	5
5分	5分	5分	5分

101丁	10丁	10丁	10丁	9丁	9丁	同5	8丁	7丁	7丁	6丁	6丁	55	5	4丁
5	1丁	5	丁	5				5		5				5
3	2尺	2	1	1	1尺	5尺	4尺	3尺	1尺	9	7	6	4	3寸
尺	5	尺	尺	寸	尺	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸
2	5分	5分	5分	5分	5分	5分	5分	5分	5分	5分	5分	5分	5分	5分
5分														

ト口
云傳
工ニ
夫云
仕入
但仕
立候
テヨ
ラヨ
八リ
町二
八手
町入

元和五年十月十四日

八三六

一四ツ過ヨリ八ツ下リマテ、二光ノ位アリ、越、
一七ツカシラヨリ日暮マテ、三光ノ位アリ、少下、
右大事之工夫アリ、悉相傳申候者也、

田付兵庫助入道

〔朱押〕

慶長拾七年壬子十月十日

殿參

目當之詰

△目當之詰

一三匁 三匁五分 一兩玉
貳尺二寸五分
一壹町五反ヨリ三町五反マテ
同寸尺ナリ、
一四町 二尺一寸ニ成、三匁五分三匁玉右ニ
一寸五分みシカク成事也、
一兩玉ハ二尺二寸五分也、

一四町五反、三匁五分玉三匁 二尺也、

又一寸みシカシ、

一兩玉二尺一寸五分 右カクニ一寸事みシ

一五町 三匁五分 三匁 二尺也、小迄筒此

一兩 二尺一寸五分

一五町五反 一兩玉 二尺五分 右ニ一寸

一六町 一兩玉 二尺 右ニ五分

一六町五反 一兩玉 二尺 此所ルヨリ

以上

○一五匁六匁玉

一町五反 二尺五寸三分

此尺一町五反ヨリ四町五反マテ同尺ナリ、

一五町 二尺四寸 右スツル

五町五反ヨリ六町マテ同寸尺、

一六町五反 二尺三寸 右ニ一寸

元和五年十月十四日

八三七

七町同尺

一七町五反 二尺二寸右ニ一寸

一八町 二尺二寸也同尺

以上

〇一八匁十匁玉

壹町五反 二尺七寸八分

此良四町五反マテ同寸尺也

一五町 二尺六寸右ニ一寸八分

五町五反 六町 六町五同分也

一七町 二尺五寸シカシ

七町五 二尺八寸

一八町五 二尺四寸ツル

九町 同寸尺

以上

〇一十五匁但玉十三

一町五反 三尺一寸五分

此尺一町五反ヨリ四町五反マテハ同寸尺也

一五町 二尺九寸ニ寸五分

五町五反 同 六町 同 六町五反 同

一七町 二尺八寸

一七町五反 同

一八町五反 二尺七寸一ムル

一八町五反 同 九町 同

一九町五反 二尺六寸一ムル

十町 同 十町五 同事アニヨル

一十町五反 二尺四寸二ムル

一十一町 二尺三寸一ムル

以上

〇一廿匁玉 廿五匁玉

一壹町五反 三尺五寸

元和五年十月十四日

元和五年十月十四日

一町五反ヨリ四町五反マテ同寸尺也、
 一五町 三尺三寸右ニムル
 五町五反 六町同、六町五反 七町同、
 七町五反 八町同、八町五反 九町同、
 一九町五反 三尺二寸一マツ
 十町同、
 一十町五反 三尺一寸一マツ
 一十一町 三尺一マツ
 一十一町五反 十二町同、
 一十二町五反 二尺九寸一マツ
 一十三町 二尺八寸五寸ツツハ事也
 一十三町五反 二尺七寸一マツ
 以上
 ○一三十多玉 三十五多玉
 一壹町五反 三尺八寸

二町同 二町五反 三町同 三町五反
 四町同 四町五反
 一五町 三尺七寸一マツ
 五町五反 六町同、六町五反
 一七町 三尺六寸一マツ
 七町五反 八町同、八町五反
 九町同 九町五反
 一拾町 三尺五寸一マツ
 一十町五反
 一十一町 三尺三寸二マツ
 一十一町五反 十二町同、
 一十三町 三尺三マツ
 一十三町五反
 一十四町 二尺八寸二マツ
 以上

元和五年十月十四日

元和五年十月十四日

右之工夫口傳悉御相傳申候者也、

一 慶長拾七年壬子十月十三日

殿 參

田付兵庫助入道

□(朱花押)

- 一 長サ七尺ヨリ七尺二寸三寸マテ、
- 一 本口三寸四分五分六分、
- 一 末口二寸九分、三寸、
- 一 前目當高サ一寸五分、
- 一 サキ高サ一寸一分二分、
- 一 地3丁5分參ル當ヲナラシテ4丁カ、ル様ニ仕吉、
- 一 2丁5分ノカ子ニテ4丁ヘカクル事モアリ、是ハカ子サキ也、
- 一 一カ八分カ、リ、

○一4丁5分

一 此所藥にて打モ吉、

一 又直ニ行モアリ、

一 8分5分にてにて上々也、地行ノカ子ノ事也、

○一丁

一 1尺5分是吉地行ノカ子、

一 下ルハ藥ヲマス、

一 2分5分ノカ子仕入ニ吉、

○一5分

一 2分5分5丁カ、リハ此也、4丁5分ノカ子ハ5分にて仕入事也、

右之分ハ地行ヲツモリテ仕工夫也、是ヒミツノ位也、

○一6丁

一 5分 本^⑤ノ筒口クナル所吉、正直ノ月吉、三四九十二吉、

一 4分 越ニ吉、放ノ後吉、てる日ニ吉、六七ニ吉、

一 5分 下ル、上ヤ下ヤニ吉、雨ニ風ニ吉、

元和五年十月十四日

- 一八町 八町五 4尺
- 一九町 九町五 4尺5寸
- 一拾丁 十町五 5尺
- 一十一町 十一町五 5尺5寸
- 一十二町 十二町五 6尺
- 一十三町 十三町五 6尺
- 一十四町 十四町五 7尺
- 一十五町 8尺

以上、右工夫口傳悉御相_○關_ク、以下

○コノ間ニ落_テアリ

二百五十目水入よし、それまで_□あ_カく、水ヒた_ヒく、よ入よし、

四きよ付かけんノ事

一冬はエンセウ壹貫目ニ付而冊目入ル、

一夏ハハイ百メニ付而四文め入、内イワう三匁メ入事也、

一薬カためやう、大うとまり、中かとまり、小かとまり、又こと四_トいろころと

め申候、これ第一のクテン也、萬一こすき候へは、こまりのふるいまでと
をして、其こを又水までうとめ、そうの中へ入申候、其内さときくせりの
其まゝこをふるゑすこおき申、これ又たんでん也、
一ひとて入とは一ふ、
一二ていせとは二ふ也、
一とりかとの廿五間こてうちあろふよし、

○筒いろ付る事

- 一イロウ八匁 八月、九月、十月、十一月、十二月
 - 一イロウ十匁 正月、二月、三月、四月、五月、六月、七月、八月、九月、十月、十一月、十二月
 - 一イロウ六匁 少五、六月、七月、八月、九月、十月、十一月、十二月
- 一いろにもよきあか土百目の内へ右イワう入ル、
以上

右のくせり、よくくこまろにして、水までよきをとに繰り付、まつ筒よ
くみろき、いろよにもにえたるゆ、筒のすへ入て、てのあてらせぬやとあつ
くありたる時、くせりをぬる、又くろとつけたき時、そふん七八分入ル、

ふん下へ入ル、のこる二笏目一ふんを三つよをり、七ふん上へ入ル、三つこむ時の、七ふん二つよワリ、三分五リン又上へ入ル、一兩玉を四笏二分こそる事、此薬こもこせんためあり、大小共、此くせりこもあり、つ縁よとりうち、又ふたんうつよよし、

一三つをりとうかやし

玉六笏め、薬六笏めを三つよをり、二笏目のこして四笏目下へ入、又のこしたるくせり、上くせりに二笏目入あり、合六笏めあり、又玉三つこむとき、中にくせり二つよをり、一ふん入ル、一笏めあり、合七笏目こある、町のとをき所よし、

一けいそくひ、^ひうひそくひの玉ここの時の、玉うす入候とも、上くせり入す、下くせりは半かやしあり、

一うひそく^ひひらとをあり、兩方へ出候ところのありさ一寸二^ひありら、少ぬらしてこむ、ひららす七せし十せし、ひらをいくつよもひりて、

一けいそくひ、^ひそくもとかせと、そくもの長さ兩方へ一寸つ、中のかせ、そくもこ一ふせかりやとみちうく、うひ二せし、縁づをのふとさやと、

かせせかりあめしてこむあり、

一町ヨリ内チカキトコロハ、半かへしのかせりこもにてうつ、玉め半ふんあり、大小共こ如此、

〇十八くうの事

一廿五笏玉よて、五町のくせりこみニテ、八町をうつ時の、まつ矢藏を八町之たんへ上、又三たんくちのふん、矢藏を上てうちて當、

一八町の薬こみて五町をうつ、まつ矢藏を五町へさけ、又三たんくちさけてうちて當、十二くうもををし事あり、

一薬をますの二町五たんヨリ上あり、
一たんくち、二たん三たんくちおつるも、十二くうのかせりそのまよす、十二くうの玉目のふん、

一^{大筒}十八くうにてます、一反くち、二反くち、三反、四反くちまで、十八くうのかせりこも、そのまよす、

一^{地行}の町をうつ、薬八ふか、八ふか、一笏こ八ふん、十笏こ八笏め、

元和五年十月十四日

八五二

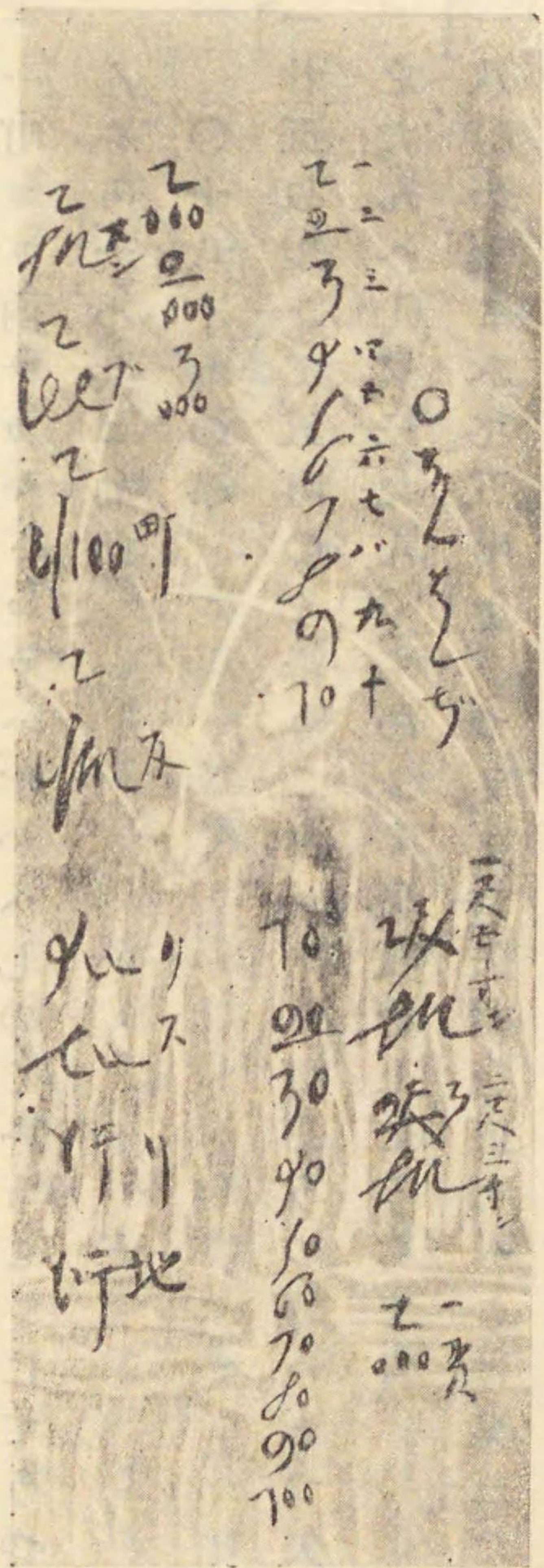
異風物

一 地行の地うち六間十二間こてうつ、薬四ふかゝり、四ふかゝりとは一
 匆めこ四ふん、十匆めこ四匆め也、筒大小共こおあし事あり、
 一 一兩玉と三匆五ふん玉とは、町の地行こ付、薬の心もちあり、但十きやう
 の第一よかきつけてあり、

○いふう物

一 長さ二尺五寸五分一兩玉の、つ糸の一兩玉の筒の本口すへ口のふとさ
 なり、五匆六匆の、つ糸の五匆目の筒の本口すへ口ノふとさあり、四匆め、
 五匆目、六匆め共こ、長さのおあし事あり、○次のなんそんぢノ一節ハ、特
 寫眞版トシテ、其原形ヲ示ス、

南蠻字



大めんか
うのづか

○大めんかうのづか

浮木ノ位

一 上もおほる、一 下もおつる、とひつ所のたうき
 六間ウ一たんのつもまなり、三間上下半たん落、それないつきも右の
 つもりこて、上下ともこかんかへてうつ也、

○浮木ノくらいてつわうもたせ所の事

- 一 十匆の△さき一三町四町、△中二五町六町、△前三七町八町、
- 一 拾五匆△先一四町五町、△中二六町七町八町、△前九町十町、
- 一 廿五匆卅目、△先五六七町、△中二八九十町、△前三十一二十二十三町、
- 一 卅五匆四十目五十目、
- 一 △先一五六七八町、△中二九十一十二町、△前三十三十四十五町、
- 一 一五匆六匆、△先一三町五反、△中二四町五反、△前三五町六町、
- 一 三匆五分四匆ハ、△先一二三町、△中二四町五反、△前三五町六町一兩玉
 ぶん、

三燈集

三燈集第一

一 一けんにて此内の事、大筒の常まけんなり、まくれ共、て此うち

元和五年十月十四日

八五三

- 一 中道こもり事なり、又巻くう乃さんむきく有所を、望んけんよもりなり、
- 一 七くむをうたて此内の事、小筒の常こそくむやうあり、巻くう此さん高
所の筒大小共こそくむやうよ持よし、
- 一 中道此ての内の事、おもくむかるくもなきての内なり、望んけんこそくむ
やうの間なり、
- 一 右切のての内此事、書物こそ書付のことくなり、
- 一 又右切、右同書付のよし、
- 一 左切のて此内の事、書物こそ書付たる如也、
- 一 上くむいのて此内の事、上へまむる心也、
- 一 下くむいのて此内の事、下へまむる心也、
- 一 常樂此ての内の事、下一切よもりの袋よ當所を、中道よおほゆる事を、
こゆむよてあるあめあり、大筒の下一切よもされす候ゆへ、袋ここゆむ
ああるところ一切也、
- 一 志せうまれんので此内の事、小筒臺よて、かは付て、うはとき的事、むより
此ての乗物也、心安し、右のてまてこて打なりて、此内のよくとりて、少下

ゑくりぬくる心もちなり、

- 一 けんせうのて此内て、臺中放のて此内なり、まれんのをうよ臺尻をとり
て、て此内とゆむされこて、ろくよこそむとくこ持也、
- 一 直常遠町を打て此内、右左臺此上こまむし、いっよをろくよもちて、むし
を内へむ糸り入也、
- 一 ふせんでの内の事、筒先を持上心もち也、右左乃大ゆむの糸此ふくらみ
て臺ををし、ゆむこて筒先をもち上る心もち也、
- 一 琴思此て此内、小ゆむこて位をとる、まゆつき出てとる、そのつき出しあ
るぶんをむきもとす、三むやうし、筒此もとるむやうしと、むくむやう
し、いきをむのこむときと、三むをうしなり、
- 一 こゆけん此て此内、くさくる海とほよくとる、これけんせう此ての内へう
ゆするきあめ也、
- 一 けんせうのて此内、中道常樂こそ持て、こゆけんことり、むゆくりとくゆろく
る也、まぬりもせず、くゆろきもせぬて此内なり、

三灯集 第二

一 一輪一寸十八間より内此事也、一分一尺此ウを一町にて此積也、
三灯集 第三

一 一寸一反五分半反、さよめ此繩より一寸かほよれ、一反下る、五分よ
れ、半反下る、又一寸のけの一反越、五分のけの半とんこす、
三灯集 第四

一 てのとう此くらいなり、書物かき付此如也、
三灯集 第五

一 書物此とくなり、○本書ハ、景澄ノ自筆ニカ、ル、金銀泥ニテ草木花鳥
牛馬等ノ模様ヲ描キタル五色ノ鳥子紙ヲ用ヒタリ、

十五日、御日待ヲ停メラル、

〔土御門泰重卿記〕三 十月十五日、甲子、當年ハ禁中御日待無之候、時雨降

畢、

十七日、秀忠、日光東照社ニ參詣ス、

〔元和年録〕坤 十月十三日、

一日光の御發駕、十六日、日光の御著、十七日、御參宮、十八日、日光の御發駕、

○秀忠、日光社參ノコト、他ニ所見ナシ、姑ク元和年録ニ據リテ、茲ニ掲

〔參考〕

〔元和小説〕 十月十三日、

一日光の御發駕、

十六日、

一日光の御著、

〔台徳院殿實紀〕一五 十月十三日、日光山御參の御首途あり、此夜岩槻よ

とまらせ給ふ、元和年録

十四日、古河よつらせ給ふ、

十五日、宇都宮よとまらせらる、

十六日、日光山よつらせらる、元和年録

十七日、御參宮、元和年録

十八日、日光山御發興有て、宇都宮よつらせたまふ、元和年録

十九日、古河よとらせらる、

廿日、岩槻よとらせ給ふ、

元和五年十月十七日

十八日、公家衆處罰ノコトニ依リ、宸翰ヲ右大臣近衛信尋ニ賜ヒ、讓位ノ叡慮ヲ傳ヘ給フ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

宸翰掛引繼第一號之内

〔中御入書〕

〔後陽成院勅書〕カ、コノ御ウハ書ハ、靈元天皇ノ宸翰ニ

□□將軍馳走之段、祝著千万ニ候ヘテ、對將軍、少も所存無之候ヘとも、我等器量あく候ヘテ、とく逼塞申度候間、將軍機嫌能様ニ憑候通、申被傳候ヘク候、

今日其許板倉伊賀守、藤堂和泉守參候由、内々承候、然者、略如御物語申、今度公家衆法度被申付儀、尤至極候、併う様之儀出來候事も、我等不器用故ニ候條、必定將軍も見うきらられ候んと恥入候、何うと役者共遅々候得と、ふるき道もたえ候而、禁中もそとせ候儀、且者武家之爲こも候ヘテ、此上者、我等兄弟何事ニ而も即位させられ候而、王法たゞしく候はん事可然候歟、我等即位之刻者、家康公以馳走、そやゝ八年在位之事候ヘテ、旁々以山居之志候間、此等之趣委細申被申含候て、讓位候事、爲兩人可然様ニ、將軍へ申入候

板倉勝重
藤堂高虎
尋近衛信

御在位八
年ヲ過ギ
御山居ノ
マシ
マシ
マシ

様ニ頼入候通、可有傳舌也、

十月十八日

〔近衛信尋〕
右大臣とのへ

○近衛信尋ニ勅シ、藤堂高虎ト謀リ、秀忠ノ女和子入内ノコトヲ幕府ニ議セシメ給フコト、九月五日ノ條ニ、秀忠ノ奏請ニ依リ、萬里小路桂哲、中御門宣衡、四辻季繼、高倉嗣良、土御門久脩、堀河康胤等ノ不行迹ヲ譴メテ、處罰シ給フコト、同月十八日ノ條ニ、和子入内ノコト、六年六月十八日ノ條ニ見ユ、

二十日、御咳氣ヲ病マセ給フ、

〔鹿苑日錄〕

二十 十月廿日、午後於橋殿、候禁裏御咳氣、奉獻蜜柑一折、舜

岳西庵案内者也、

幕府、上野麩橋城主酒井忠世、武藏河越城主酒井忠利ノ封ヲ加ヘ、又下野宇都宮城主奥平九八郎昌忠ヲ下總古河城ニ、下總小見川邑主安藤重信ヲ上野高崎城ニ、高崎城主松平信吉ヲ丹波笹山城ニ、某邑主青山忠俊ヲ武藏岩槻城ニ、古河城主小笠原政信ヲ下總關宿城ニ、關宿城主松平重勝ヲ

遠江横須賀城ニ移シ、九八郎、重信、忠利、政信ノ封ヲ加フ、

〔東武實錄〕

六

是月、松平大隅守重勝、下總國關宿ノ城、食邑二万六千石ヲ

轉シテ、遠州横須賀ノ城ヲ賜リ、領地員數元ノ如ク、○下略、重勝、駿府城代

是月、小笠原左衛門佐政信、總州古河ノ城、采地二万石ヲ轉シテ、同國關宿ノ

城、食邑二万七百石餘ヲ賜ル、

是月、奧平九八郎後美作守、下野國宇都宮ノ城、采地十万石ヲ轉シテ、下總國

古河ノ城、食邑十一万石賜ル、

是月、酒井雅樂頭忠世、上州里見ニ於テ、采地一万石加賜セララル、

是月、酒井備後守忠利、武州ノ内ニ於テ、食邑一万石加賜セラレ、統テ三万七

千石ヲ領ス、

是年、青山伯耆守忠俊、武州岩付ノ城、食邑四万五千石賜ル、

〔元和年錄〕

坤

十月廿日、

一〇中

小笠原左衛門賜關宿貳万二千石、酒井備後守御加増、貳万石、奧平千

石、福賜古河、安藤對馬守賜高崎五万六千石、青山伯耆守賜岩付城五万石、酒

井雅樂頭御加増、壹万石、上略

井雅樂頭御加増、州、○下略

酒井忠世

〔寛政重修諸家譜〕

九十五

酒井忠世

頭雅樂

十月二十日、

上野國碓氷郡里見

領シ、抜いて、一万石、抜くこへたまふ、○モト八萬五千石、合計九萬五千石、

〔播磨酒井家譜〕

忠世

同年十月、

上州里見ニ於テ、壹万石加與セララル、

〔寛政重修諸家譜〕

一六十

酒井忠利

備後

五年十月、

一万石を加へらむ、武

藏國入間、高麗、比企三郡のうちよをいて、都て三万七千石餘を領し、○下

〔若狭酒井家譜〕

忠利

同五年、

己未十月廿日、於武州之内所々、壹萬石御加増、

入間郡、高麗郡、比企郡之内三萬八千九拾壹石四斗新田改之高、被成下之、

〔寛政重修諸家譜〕

五百四

奧平忠昌

郎、

五年十月、

宇都宮をあらむめ

て、下總國古河城みうつさき、一万石を加恩あり、せへて十一万石を領せ、

〔豊前奥平家譜〕

忠昌

同五年、

己未十月十三日、封ヲ轉シ、下總古河城ニ移ル、一

萬石ヲ加賜フ、支城眞岡、小山二所、老臣卒長ヲ部署シテ、之レヲ守ル、○譜牒

事ナシ、本書十三日、トナヌハ誤ナラン、

〔寛政重修諸家譜〕

千四百

安藤重信

對馬

十月、

上野國高崎城をよまむ、二

万石此加増ありて、同國群馬、片岡、近江國神崎、高嶋四郡比うちにし多、五万

六千六百石を領せ、

酒井忠利

奧平忠昌

安藤重信

元和五年十月二十日

八六二

松平信吉

〔磐城〕安藤家譜〕重信○中此年十月、上野國高崎ノ城ヲ賜フ、加賜二万石、高合

五万六千六百石トナル、

〔寛政重修諸家譜〕七 松平信吉伊豆守、安房守、五年、まゝ高崎を轉して、丹波國

多紀郡笹山みうたさゑ、五石高を祀よむと此城主松平周防守康重に預を

青山忠俊

とぬひし村上道安を召預參らる、是年、伊豆守にあらたむ、

〔上、山前〕松平家譜〕伊豆守源信一○中同五年、丹波國笹山ノ城ニ移ル、此時伊

忠俊大坂
兩役ノ賞
増セララル

豆守ト改、

〔寛政重修諸家譜〕七百二 青山忠俊伯者六年十月二十日、武藏國乃う

岩槻ハ江
戸ノ根城
タリ

ち○本に於いて、一万石を加恩あり、岩槻城○中に住し、都て四万五千石を領せ、

附屬ノ與
力ヲ家臣
ト爲ス

〔丹波〕青山家譜〕從五位下伯者守忠俊○中同五年己未十月二十日、武藏國岩

槻ノ城主ニ轉シ、一萬石ヲ加増シ、合テ四萬五千石ノ領主タリ、是大坂兩役

ノ勳功ヲ賞セララル、ニ由ト云、

〔禮典〕伯者守忠俊君 同○中年十月廿日、武州岩槻城主被仰付、壹萬石御加増、

都合四万五千石被下置、拜領之、被賞大坂之軍勞、岩槻者以江戸之爲根城、被

下之旨、蒙御懇之上意、賜從前附屬與力之士廿五騎、爲家臣、

御家傳御系譜ニ、此年附元和六年或五年与有之、是ハ○忠俊泰雲君御自筆御譜

ニ、元和五未年、中略翌申年、岩槻拜領仕候、御詞ニ、岩槻ハ江戸御城之根、

て候間被仰付候由、尙々忝上意候与有之ニ付、此年度御採用ナレ、何故

歟、此年度ニ思召違有之、此誤寛政永享保ノ兩譜ニ及フ、モ然レ、幕府日記類、岩

槻城主沿革記下記、江戸崎代地ノ義御達書等ハ、悉ク五年ナリ、故藩翰譜

モ五年トシ、小書ニ、一説ト在、元寛日記ニ、元和五年十月五日、高力左近大

元和五年十月二十日

八六三

夫忠房、改武州岩付、於遠州濱松、賜三万五千石、○石高元和五年十月廿日、青山伯者

守忠俊賜岩付、其外皆同、其證明確ナリ、故ニ之ヲ訂正シ、五年へ加へ、年度

ヲ改ム、温故隨筆ニモ、大門新開達書ヲ證ト

一寛永譜ニ、武州岩築の城を賜ふ、この時與力の知行五千石の外、一万石を

加へ賜り、都て四万三千石を拜領すトアリ、又本光君御遺書○青山忠俊こ、

覺 高千貳百拾五石壹斗九升六合 大門新開 服部石見上給之内

元和五年十月二十日

八六四

右之所、江戸崎爲替地、青山伯耆守殿に被下候間、當未ノ物成可有御渡候、以上、

元和五 未 十月廿八日

伊丹喜之助判

松平右衛門判

伊奈半右衛門殿

右參考書、

泰雲君、元和六年本ノマ、五年ノ事、前記年月附、岩槻城四萬石餘、於御前御拜領、本光君御考ノ御本ニ云、忠俊様御覺書ニ、四萬石餘与御座候、

行方書付ニ者、後檢地被仰付、四萬千石ニ而、千石ハ岩付近所大と申所ニ而御取被成候由、書上ハ不審ハ、檢地被仰付候ハ、四萬石餘之内ニテ、出高可有御座事ニ候、然處外ニ大とん千石御拜領と御座候事ハ、打出し千石ニ大とんかとを添候而、定而四萬三千石と世上よて申候物と奉存候、已前城地之順考出候時、方々ニ而相尋候時、四萬三千石の高と相見候、

附記、此事青山忠俊、相君江戸崎御拜領ノ處ニ詳記、此御書付ハ、天和度青山忠俊、凌松君

ハ松平隼人（忠冬）正殿へ被差出候御譜之節、本光君ハ凌松君へ之御申上書にて有之候、是ハ、四萬石餘ハ拜領高郷村表高ニテ、餘ノ三千石ハ、右御拜領之節、其郷村ニ新田有之、既ニ大門新開モ其一ト見へ候、此新田、郷村目録ニ入ラサルトハ、鹿沼御領知目録ニ、其理由附紙有之、三千石ノ内千石ハ新田ナラン、此大門達書年月附モ、岩槻御拜領同年十月十日ナリ、御打出者貳千石ナラン、後追々ノ御拜領ニ者有マシ、其事ハ圓相君御譜、江戸崎ノ處ニ詳記ス、

右御考御本ノ趣ハ、檢地打出ノ高歟、御拜領歟之趣也、此書付之書ハ、寫と相見候得共、江戸崎爲替地被下之趣也、以來御考合就、可

一御遺書ノ内、行方半右衛門書出、伯耆守様御部屋住五千石、鹿沼、御跡式、貳萬五千石、都合三萬石ニ而、大坂御陣御勤、其後一萬石御加増ニ而、御知行四萬石にて、岩付御城御拜領、此時與力廿五騎ハ直ニ被下、御家來ニ罷成候、同心百人者御家來、附記、元與力也、淺井半兵衛致支配、亥年之御上洛迄相勤申候、夫ハ青山大藏様へ御預被成候、

此儀別紙ニ伯耆守様御知行高、此書付ニ四萬石と書申候、惣高四萬石

元和五年十月二十日

八六五

元和五年十月二十日

八六六

ニ而御座候、此千石ハ御知行所ニ打出シを千石之高ニ御結、岩付之近所大とんと申所ニ而御拜領被成候間、本書ニハ書不申候、

一温故隨筆ニ、岩槻拜領ノ時、馬乘同心廿五騎手人ニナル、是迄三万石之内モ、五千石ハ右ノ馬乘同心給也、

此岩槻御領知目錄、郷村高帳ハ傳ハラス、文化八年辛巳、此國郡御尋之御答書ニ、不相知トアリ、江戸崎上地ノ事ハ、前記ニ有レ、其他ハ不知且岩槻御知行高ニ相違有之事等ハ、圓相君江戸崎ノ處ニ詳記、此岩槻ノ節、御加増一万石、與力給五千石、外新田三千石、合壹万八千石ノ御知行高御拜領ト見ユ、是亦江戸崎ノ處ニ記ス、此御本文ニ、被賞大坂ノ軍勞トアリ、寛永享保譜ニ此事ナシ、寛政重譜ヨリ入、此出所不詳、

一岩槻久保宿町ニ一寺御創立、雲居山大龍寺ト號、曹洞宗貝塚青松寺第九世和尚御招請、開山トス、故ニ青松寺末寺トナス、地所四町三反、并本尊釋迦牟尼佛座像、金塗木製、惣高二尺、此臺座ニ、于時元和六申霜月十五日、奉安置釋迦牟尼佛、大守青山伯耆守忠俊造ト記ス、寄附當家ノ創立ニ係ルヲ以、寺紋滑錢ヲ用ユ、

忠俊岩槻建ツ

小笠原政信

〔寛政重修諸家譜〕

百九 小笠原政信 若狭、五年十月二十日、古河茨苅ら

ためて、同郡關宿にうはさぎ、まのとき檢し出せる此地をわへせ、二万二千七百石餘を領せ、二萬石

〔越前小笠原家譜〕

政信 同五己未年正月十一日、改總州葛飾郡古河采

地、被移同國同郡關宿、打出加二千七百七十七石、賜二万二千七百七十七石、同年十月、入部于關宿、封ト本書、正月十一日、轉

〔寛政重修諸家譜〕

六十 松平重勝 大隅、五年、遠江國横須賀にうつさ終

て、略

〔豊後松平家譜〕

重勝 大隅、元和五年、己未、遠江國横須賀城ニ移ル、

○松平信吉、松平重勝轉封ノ月日詳ナラズ、便宜茲ニ掲書ス、

〔参考〕

〔安藤對馬守殿御領分高覺帳〕

安藤重信領分高覺帳 向郷

向郷

乘附村○上野片岡郡、下同ジ

一高千百拾九石壹斗四升壹合

元和五年十月二十日

八六七

元和五年十月二十日

八六八

内譯 四拾九町貳反九畝拾分
貳拾町貳反二畝六分

田方 畑方

石原村

一高貳千四百四拾七石四斗六升壹合

内譯 九拾壹町八畝拾七分
貳拾八町九反九畝貳分

田方 畑方

寺尾村

一高六百三拾九石八斗壹升貳合

内譯 貳拾七町六反貳畝九分
貳拾八町九反九畝貳分

田方 畑方

下佐野村○上野郡 下野群馬

一高五百九拾七石六斗壹升七合

内譯 三拾六町五反貳畝拾三分
三拾貳町三畝拾七分

田方 畑方

佐野久保村

一高四拾九石七斗六升

内譯 壹町四反五畝六分
三町貳反五畝九分

田方 畑方

上佐野村

一高八百三拾三石九斗七升貳合

内譯 六拾三町壹反六畝八分
貳拾壹町壹反貳畝貳分

田方 畑方

和田々中村

一高四百三拾七石壹斗貳合

内譯 三拾町四反四畝廿分
九町貳反四畝四分

田方 畑方

新後閑村

一高三百三拾石壹斗貳升四合

内譯 貳拾三町四反貳畝八分
九町壹反拾貳分

田方 畑方

元和五年十月二十日

八六九

元和五年十月二十日

八七〇

一高四百三拾石壹斗貳升四合

下佐野村

內譯 貳拾六町九反拾分

田方

壹町六反壹畝分

岩押村

一高百七拾三石五斗九升七合

內譯 貳拾町四反貳畝三分

田方

四町五反七分

高關村

一高四百四拾六石貳斗三升六合

內譯 三拾町五畝拾三分

田方

四町五反七分

下中居村

一高千貳百八拾九石四斗四升

內譯 八拾貳町六反六畝拾六分

田方

三拾三町八反三畝五分

畑方

一高七百七拾八石七斗九合

內譯 五拾町貳反五畝五分

田方

貳拾壹町三反貳畝八分

畑方

高合壹万百八拾五石壹升五合

內譯 五百五拾貳町九反四畝拾九分

田方

貳百八拾四町壹反三畝拾七分

畑方

中郷

飯塚村

一高千六百八拾九石三斗五升八合

內譯 百貳拾壹町五畝廿八分

田方

貳拾九町三反六畝廿八分

畑方

正觀寺村

一高三百七拾七石四斗三升六合

元和五年十月二十日

八七一

中郷

内譯 八町九反貳畝廿七分
貳拾五町八畝拾分

田方
畑方
棟高村

一高四百九拾石三斗六升七合

内譯 拾五町三反六畝廿八分
四拾四町壹反九畝廿七分

田方
畑方
菅谷村

一高五百七拾八石六斗四升八合

内譯 五町六反九畝九分
五拾三町拾八分

田方
畑方
中泉村

一高貳百六拾九石六斗八升三合

内譯 九町六反分
拾三町貳畝拾六分

田方
畑方
三ッ寺村

一高四百八拾三石貳斗七升四合

内譯 拾町八反三畝分
貳拾三町六畝五分

田方
畑方
小八木村

一高七百九拾五石三斗壹升七合

内譯 貳拾八町九反六畝拾三分
四拾三町八反四畝九分

田方
畑方
中尾村

一高八百六拾石貳升五合

内譯 三拾壹町七反四分
六拾町九反壹分

田方
畑方
貝澤村

一高千三百九拾三石九斗八升六合

内譯 九拾壹町六反五畝拾九分
四拾壹町九反五畝廿分

田方
畑方

濱尾村

一高六百九拾八石五斗八升

内譯

四拾四町貳反三畝三分

田方

拾五町三反拾七分

井野村

田方

一高五百五拾七石九斗貳升六合

内譯

四拾四町貳反六畝貳分

田方

貳拾八町七反壹畝拾三分

畑方

江田村

一高四百九拾三石七斗八升

内譯

貳拾貳町九反貳畝廿八分

田方

拾九町貳反五畝四分

畑方

新保田中村

一高四百四拾石三升貳合

内譯

三拾町八反貳畝拾七分

田方

三拾三町四反三畝三分

畑方

古市村

一高六百拾四石八斗貳合

内譯

五拾町貳反四畝拾壹分

田方

三拾三町七反廿六分

畑方

小相木村

一高百五拾八石七斗三升四合

内譯

拾貳町九反八畝廿九分

田方

拾八町五畝拾貳分

畑方

内藤分村

一高四百八拾六石六斗七升三合

内譯

九町五畝廿三分

田方

三拾三町三反貳畝九分

畑方

大渡村

高者内藤分ニ入

元和五年十月二十日

内 (マ) 六町七反壹七分

八町八反貳畝拾七分

高合壹万千三百八拾九石五斗四升壹合石〇六斗二升一合十八

内 (マ) 六百拾六町壹反五畝九分

五百六拾壹町八反壹畝拾四分

上郷

下小鳥村

八七六

上郷

一高八百七拾五石五斗四升四合

内譯 五拾四町壹反六畝廿五分
四拾町貳反五畝拾八分

田方

畑方

中里村

一高百六拾石九斗三升五合

内譯 八町七反六畝拾四分
九町五反四畝貳分

田方

畑方

足門村

一高百七拾石貳斗壹升五合

内譯 拾壹町貳畝拾九分
拾貳町五畝廿三分

田方

畑方

柏木澤村

一高四百貳石三斗五升貳合

内譯 拾九町四反九畝拾八分
拾三町三反七畝壹分

田方

畑方

新井村

一高五百三拾石八斗七升三合

内譯 三拾六町五反三畝拾分
貳拾八町三畝壹分

田方

畑方

山子田村

一高六百四拾石八斗四升三合

内譯 五拾三町八反壹畝廿九分
三拾五町七反三畝廿三分

田方

畑方

元和五年十月二十日

八七七

一高六百五拾五石三斗九升七合

內譯 貳拾九町六反七畝七分

三拾八町壹反八畝貳分

南下村

田方

畑方

北下村

一高六百五拾五石三斗九升七合

內譯 三拾壹町貳反貳畝廿八分

三拾四町五反壹畝七分

田方

畑方

池端村

一高三百五拾石貳斗六升

內譯 拾四町七反八畝拾五分

拾三町壹反八畝拾六分

田方

畑方

長岡村

一高五百七拾石貳斗七升三合

內譯 三拾壹町壹反拾五分

田方

一高^(成アル)百四拾四石三斗九升

內譯 三拾三町六反九畝拾三分

貳拾貳町四反壹畝廿九分

三拾四町壹反貳畝五分

上野田村

畑方

田方

小倉村

畑方

田方

內譯 九町六反貳畝廿六分

七町五反四畝拾貳分

有馬村

畑方

一高七百九拾壹石八斗壹升七合

內譯 六拾壹町四畝廿七分

三拾三町八反三畝廿壹分

田方

畑方

八木原村

一高六百九拾三石四斗七升七合

元和五年十月二十日

內譯 四拾九町九反四畝分
貳拾八町七畝廿四分

田方
畑方
漆原村

一高千百五拾四石三斗貳升貳合

內譯 四拾八町六反三畝拾七分
四拾六町壹反七畝六分

田方
畑方
阿久津村

一高貳百拾四石三斗七升七合

內譯 九町三反分
九町八反五畝分

田方
畑方
川嶋村

一高四百八拾四石五斗八升貳合

內譯 拾九町八畝拾貳分
三拾六町九畝貳分

田方
畑方
金古宿

八八〇

下郷

一高四百貳拾八石四斗七升貳合

內譯 貳町五反五畝廿六分
貳百六拾六町壹反四畝廿貳分

高合壹万百三拾壹石八升四合

內譯 五百五拾壹町壹反九畝廿壹分
七百六拾四町三反貳分

下郷

江木村

一高千貳百七拾九石貳升貳合

內譯 九拾五町四畝拾九分
貳拾三町七反貳畝拾四分

上大類村

一高七百三石壹斗六升八合

內譯 五拾貳町九反九畝六分
貳拾貳町三反八畝壹分

田方
畑方

元和五年十月二十日

八八一

元和五年十月二十日

宿大類村

八八二

一高六百石貳斗六升七合

内譯

四拾貳町三反三畝拾七分

田方

内譯

貳拾貳町三反八畝七分

畑方

矢嶋村

一高貳百八拾四石六斗七升七合

内譯

貳拾三町五反七畝分

田方

内譯

三拾五町五反四畝四分

畑方

柴崎村

一高九百六拾石五斗貳合

内譯

六拾五町三反四畝拾壹分

田方

内譯

貳拾六町四反七畝廿壹分

畑方

矢中村

一高九百五拾石五斗壹合

内譯

五拾八町三反六畝拾九分

田方

拾九町六反六畝廿九分

畑方

綿貫村

一高九百四拾貳石貳斗貳升

内譯

三拾八町壹反四畝拾九分

田方

内譯

四拾九町八反五畝壹分

畑方

武州須玉郡

山王堂村

一高百石

内譯

八町拾分

内譯

拾貳町八反三畝七分

一高合壹万八百拾三石八斗壹升三合三斗五千八百七合九分

内

六百九拾五町八反三畝廿六分

内

三百九拾三町四反四畝廿六分

西郷

赤坂町郡○上野群馬

元和五年十月二十日

八八三

一高千貳百三拾四石五斗八升七合

八拾町八反五畝貳分

田方

內譯

貳拾三町五反九畝拾九分

畑方

下并榎村

一高三百八拾九石五斗六升六合

三拾壹町壹反四分

田方

內譯

三町八反六畝拾分

畑方

上并榎村

一高七百拾六石三斗七升六合

六拾七町壹反八畝廿七分

田方

內譯

拾七町七反五畝廿壹分

畑方

下小墻村

一高六百拾貳石七斗八升壹合

五拾三町壹反五畝廿三分

田方

內譯

八町三反五畝拾貳分

畑方

我峯村

一高貳百六拾五石三斗八升七合

拾七町九反八畝廿壹分

田方

內譯

七町八反四畝廿六分

畑方

菊地村

一高四百三拾九石八斗四升

三拾八町三反六畝貳分

田方

內譯

拾四町六反四畝廿三分

畑方

西新波村

一高三百拾壹石九斗三升五合

貳拾四町四反四畝廿四分

田方

內譯

拾町六反四畝廿三分

畑方

樂間村

一高三百九拾三石壹斗貳升六合

內譯 貳拾八町八反八畝拾七分

田方

拾壹町四反六畝廿五分

畑方

一高貳百五拾三石六斗五合

行力村

內譯 拾三町七反九畝拾四分

田方

拾町八反九畝拾貳分

畑方

一高百九拾壹石

北新波村

內譯 拾壹町四反五畝廿貳分

田方

七町八反四畝拾九分

畑方

一高四百七石壹斗三升壹合

南新波村

內譯 貳拾九町七反壹畝廿七分

田方

拾四町四反六畝廿壹分

畑方

一高五百貳拾石壹斗八升四合

上小塙村

內譯 三拾六町七反六畝拾八分
貳拾壹町七反三畝拾七分

田方

畑方

一高貳百貳拾五石壹斗六升七合

筑繩村

內譯 五町四反貳畝廿四分

田方

七町六反四畝分

畑方

一高百七拾壹石貳斗貳合

上小鳥村

內譯 七町貳反四畝拾四分

田方

九町七反七畝拾四分

畑方

一高千貳百三拾五石六斗九升

大八木村

內譯 四拾五町八反七分

田方

五拾五町三反八畝九分

畑方

井出村

一高六百三拾五石六斗六升壹合

內譯 三拾四町貳反九畝拾八分

貳拾六町貳反壹畝拾九分

田方
畑方
濱川村

一高千九百九拾石三斗七升四合

內譯 六拾貳町七反七畝拾三分

四拾壹町三反九畝拾三分

田方
畑方
保渡田村

一高千九百九拾石八斗三升七合

內譯 六拾八町九反壹畝壹分

五拾貳町四反四畝貳分

田方
畑方
生原村

一高六百四拾石壹斗九升七合

內譯 拾九町八反四畝七分

五拾五町七畝七分

田方
畑方

一高五拾三石六斗八升

內譯 五反九畝廿四分

拾壹町四反廿三分

金鋪平村

一高合壹万千六拾壹石壹斗四升六合

內譯 八百六拾八町六反五畝分

四百拾四町九畝拾五分

田方
畑方
大田方
(畑方脱力)

惣社領

上新田村

一高七百拾九石貳斗四升四合

內譯 四拾五町五反四畝三分

三拾町壹反八畝廿壹分

田方

畑方

下新田村

一高四百貳拾石四斗九升貳合

內譯 三拾町五反六畝四分

田方

拾九町七反八畝拾八分

畑方

萩原村

一高七百四拾六石貳斗四升三合

內譯 三拾八町三反四畝廿貳分

田方

三拾五町六反四畝貳分

畑方

横手村

一高三百拾九石六斗八升五合

內譯 拾町壹反五畝壹分

田方

拾八町七反八畝分

畑方

大澤村

一高四百六拾三石五斗九升壹合

內譯 拾壹町壹反壹畝拾貳分

田方

六町四反四畝廿貳分

畑方

川曲村

一高貳百七拾六石四斗六升壹合

內譯 拾壹町九反四畝廿分

田方

貳拾町五反四畝拾貳分

畑方

稻荷新田村

一高貳百九拾貳石壹斗九升六合

內譯 貳拾五町九反九畝拾七分

田方

拾町貳反壹分

畑方

中嶋村

一高貳百五拾石三斗九升三合

內譯 六町八反八畝拾八分

田方

貳拾貳町八反八畝廿分

畑方

碓氷郡

上増田村

一高貳拾五石

內譯 七反三畝拾八分

田方

壹町貳反貳畝拾四分

畑方

元和五年十月二十日

八九二

一高六拾四石貳斗七升九合

小江内○國郡未詳

一此反八町五反三畝拾壹分

畑

箱田村○上野群馬郡下同

一高百三拾石

拾八町四反九畝分

田方

內譯 七町壹反九分

畑方

稻荷臺村

一高拾壹石八斗壹升貳合

此反壹町七反七畝廿九分

畑

高合三千四百拾九石三斗九升六合

惣社領

右之通惣高合

五万六千九百九拾九石九斗九升五合也○五萬二千二百一十九石四斗五升一合九分

內（七方）三千三百拾五町六畝拾五分

田方

貳千六百町五反九畝拾三分

畑方

近江國神崎郡

山上村

一高貳千貳百七拾六石四斗九升

佐目村

一高五拾三石五斗貳升五合

（壹方）尾村

一高貳拾六石三斗五升

蓼畠村

一高三拾壹石七斗

杜葉尾村

一高五拾四石四斗九升

同國高嶋郡

藁藪村

一高三千石五合

元和五年十月二十日

八九三

元和五年十月二十二日

八九四

惣高合六万石也、○五萬五千六百七十石一升一合九

右安藤對馬守殿御繩元和五年己未御改御帳面扣帳、○本書上野碓米郡武藏兒玉郡ノ領地ヲ舉

モ、姑タルハ不審ナレド

〔宇都宮志料拾遺〕四 六合摺米納濫觴之事

奥平忠昌ノ國替ニ際シ代官某切腹ス

手塚氏慶長十九年古河へ御所替之節、○奥平忠昌ノ御代官惡く候故、石橋

にて取巻候に付、御代官切腹此譯ハ、御取立むつろしく御座候故、百姓迷惑

仕候、御内證有之、六合摺に亥の暮より罷成、江戸廻米四斗入○納綱かゝり

宇都宮御扶持米之儀を、村々よて升取相改上納仕、掛三所結候て、南部御藏

込納、如期御書上仕候得とも、内證ハ古河へ御國替之節、何方ノ村々百姓罷

出候哉、御代官取巻訴訟仕候に付、御腹立被成候、其意趣ニ免一倍罷成、其上

六合摺被仰付候、

青山忠俊ノ百姓ノ怒リ訴ス租税ヲ重ク

按、奥平侯古河に移封ありしハ、元和五年よて、慶長十九年に非ぞ、誤りよ

（海老名）や、海老名按るハ、奥平侯古河へ移封さるしハ、元和五年己未十月ふり、又亥

合摺よ被仰違候云々ハ、同侯元和八年壬戌十月御再領之節より被仰付事に乎

二十二日、辛未幕府、播磨圓通寺及ビ稱名寺ニ寺領ヲ寄附ス、

圓通寺

〔曾根文書〕

○播磨

播磨國印南郡曾禰村圓通寺領拾石之事、并境内竹木等、任當知行之旨、被寄附之訖、彌領掌不可有相違之由、所被仰下也、仍執達如件、

元和五年己未十月廿二日

伊賀守源朝臣勝重（花押）

（圓通寺）圓通寺

板倉伊賀守

〔播磨鑑〕

九佛閣并寺院蹟

佛頂山稱名寺

一御黒印

稱名寺

播磨國印南郡賀古川村之内稱名寺領六石之事、并境内竹木等、任當知行之旨、被寄附之訖、彌領掌不可有相違之由、所被仰下也、依執達如件、

元和五年己未十月廿二日

伊賀守源朝臣勝重判

是月、幕府、駿府城代、駿府城番ヲ置キ、遠江横須賀城主松平重勝ヲ駿府城代、大番頭渡邊茂ヲ駿府城番ニ補ス、

〔東武實錄〕

六

是月、松平大隅守重勝、○中略、重勝、遠江横須賀城ニ轉封ノ

駿河國府ノ城ノ城代トナル、渡邊山城守茂、大御、組ノ士ヲ引テ、駿府ノ城

番トナル、其子監物忠、山城守カ養子、實ハ、戸別ニ采地千石ヲ賜テ、山城守ニ

元和五年十月是月

八九五

ella algũ hijo suyo, que aun de sus propios hermanos no se si se fia en materia de reinar: y con esto se boluio al Miaco con intentos de partirse para su corte de Yendo.

元和五年十月是月

八九六

差シ副ヘラレ、父ト同ク、駿府ノ城ヲ守ル、

〔寛政重修諸家譜〕

三十 松平重勝

五年、○中略、重勝、遠江横須賀城

月二十日ノ駿府ノ城代をかぬ、許豊松平家

〔寛政重修諸家譜〕

八十 渡邊茂山

五年十月よ、駿府城を守衛之、

〔累代武鑑〕

二 駿府御城代 同心五十騎人

元和五年、同六年迄、大

番頭方補本方ナ書方ス大ハ番頭ナヨリ

元和五年、大相勤後於駿府

移ス條ニ見ユ、

常陸水戸城主徳川頼房、始メテ國ニ歸ル、

〔威公年譜〕 元和五年己未、公十七歳、

冬十月、公就國、東藩文

〔常陸徳川家譜〕水戸家

頼房中納言、○中 元和五年十月、始テ國ニ就ク、

大日本史料 第十二編之三十一終

succomber à la tentation que de s'éprouver de la sorte, parce qu'on n'a pas encore la grace qu'on aura pour lors. Cette sainte Dame estant arrivée au bucher, avant que de descendre de la charette, dit d'une voix élevée. *Ecoutez vous tous qui estes icy, je vous declare que je suis Chrétienne & que je meurs Chrétienne. Tous ceux qui mourront aujourd'huy, mourront Chrétiens comme moy.*

Tous les autres Martyrs se signalerent dans ce combat : mais, comme j'ay dit, la difficulté qu'il y avoit de les approcher, le tumulte du peuple, le cry des Bourreaux, l'absence des Peres & le petit nombre de ceux qui estoient capables de recueillir leurs paroles & leurs belles actions, nous ont privez d'un si riche thresor dont la perte est inestimable.

Il arriva en ce même temps un autre martyr de même nature que le precedent. Un jeune Chrétien âgé de trente ans nommé Ignace Xiquimon de la Province d'Omi, estant pour lors à Meaco, fut invité à un bal fort solennel qui se faisoit à l'honneur des Fotoques. Ayant refusé de dancer, & se moquant de cette vaine superstition, il fut chassé avec fureur par le peuple comme Chrétien, & obligé de se retirer à Fuximi distant de deux lieuës de Meaco. Le Gouverneur ayant eu avis de son arrivée, le fait saisir & le met entre les mains des Juges. Ceux-cy luy demandent s'il connoissoit d'autres scelerats qui fussent de la même Religion que luy. Ignace embrasé d'un saint zele répondit courageusement, qu'ils avoient tort d'appeller scelerats des gens de bien qui ne songeoient qu'à se sauver. *Pour moy, ajouta-t-il, comme il y a fort peu de temps que je trafique en ce país, je ne scay s'il y a icy d'autres Chrétiens que moy.* Il dit cela pour ne pas découvrir ceux qui estoient dans la Ville.

Il fut traité doucement en prison, parce que c'estoit un jeune homme fort sage & fort modeste, d'un naturel si doux, qu'il gaignoit le coeur même de ses ennemis par ses manieres honnestes & engageantes. Il jeûnoit les Vendredis & les Samedis dans la prison. Tout son entretien estoit de choses spirituelles, & il parloit de Dieu avec une telle ferveur, qu'il convertit un Chrétien Apostat qui estoit prisonnier avec luy pour ses crimes. Dans ces entrefaites la grande

nouvelle du martyr des cinquante-deux Chrétiens de Meaco arriva à Fuximi. On fit aussi-tost le procès à Ignace, & il fut condamné à estre brûlé tout vif.

Il fut mené au supplice avec une telle précipitation, qu'il ne se trouva ni bois, ni poteau dans la place pour le brûler. Pendant qu'on préparoit tout, Ignace estoit aussi tranquille que s'il eût esté dans son cabinet. La serenité de son visage faisoit voir la joye & la satisfaction de son coeur. Il employa tout ce temps à prier Dieu, ce qu'il faisoit avec une si grande modestie, que les Payens mêmes en estoient dans l'admiration. Lorsqu'il fut lié à son poteau & que le feu fut mis à son bucher, il recita à haute voix l'Oraison Dominicale : mais il ne la put achever, parce que la flâme & la fumée luy firent perdre la parole. Un barbare le voyant à demy brûlé s'approcha de luy, & luy dit : *Courage, mon frere, recommande-toy aux Fotoques ; car c'en est maintenant le temps.* Ignace détourna la tête pour luy marquer l'horreur qu'il avoit de son discours, & continua sa priere. Ayant achevé son *Pater*, il prononça tout haut *Amen*. Puis rendit son esprit à Dieu. Les Idolâtres admirerent son courage, & luy donnerent mille loüanges. Les Chrétiens enleverent son corps & l'ensevelirent fort honorablement.

VII.

P. MOREJON, HISTORIA Y RELACION DE LO SUCEDIDO EN LOS REYNOS DE JAPÓN Y CHINA, EN LA QUAL SE CONTINUA LA GRAN PERSECUCIÓN QUE HA AVIDO EN AQLLA IGLESIA DESDE EL AÑO DE 615 HASTA EL DE 19.

LISBOA 1621. P. 137.

Como el Xongun fue al Miaco, desterrò algunos señores, y mandò martyrizar algunos Christianos.

CAP. 17.

Diò ordē que se reedificasse tãbien la Fortaleza antigua, por ser llaue de los Reinos del poniēte ; y a lo que se entiēde pōdra en

Joachim avoit un frere qui estoit fort cheri du Gouverneur Ingendono. Comme il ne doutoit pas qu'il ne dût demander sa grace & l'obtenir, il le supplia tres-instamment de n'en rien faire, l'assurant qu'on luy déchireroit plutôt le corps en pieces, que de le retirer de la prison.

Messie s'est fait admirer aussi bien que l'incomparable Tecele, pour avoir surmonté toutes les tendresses de la nature, & fait plus d'estat de sa Foy que de ses biens, de sa vie & de celle de ses propres enfans. Nous avons dit qu'elle avoit une petite fille nommée Luce qui n'avoit que trois ans. Les Infideles firent tout leur possible pour luy faire abandonner sa Religion, en soulevant la nature contre la grace, & luy representant la douleur qu'elle auroit, de voir consumer d'un feu cruel une creature si innocente & qui luy estoit si chere : mais elle répondit qu'elle avoit sacrifié ses enfans à Dieu, & qu'elle ne pouvoit leur procurer un plus grand bien, que de les faire passer de cette vie temporelle à l'éternelle ; Que pour elle il luy importoit fort peu, ni en quel lieu, ni de quelle maniere elle mourût, pourvû qu'elle mourût pour Dieu qui estoit le comble de ses desirs.

Rufine estoit une sainte femme qui avoit un grand don d'oraison. Lorsqu'elle fut dans la charette, elle se mit à genoux & demeura long-temps comme ravie en extase. Elle avoit une jeune fille nommée Marthe, qui estoit fort jolie. Les Officiers de la Justice l'avoient tirée à l'écart pour la faire évader : mais elle pleura tant, que pour l'appaiser on fut contraint de la mettre en prison avec sa mere. On la menaça de luy faire souffrir les tourmens les plus horribles pour l'épouvanter, & on luy promit de la part du Gouverneur tout ce qui peut flatter la passion d'une fille : mais elle ne fit jamais d'autre réponse, sinon qu'elle vouloit mourir pour la Foy avec sa mere, ce qui la fit admirer de tous les soldats qui la gardoient. Dieu permit qu'elle devint aveugle dans la prison pour les incommoditez qu'elle y souffroit. Toute sa crainte estoit dans cet estat, qu'on ne la separast de sa mere. C'est pourquoy lorsque les prisonniers furent condamnez à la mort, elle la tint si fortement embrassée

qu'on ne la put arracher d'entre ses bras : De sorte qu'elle fut conduite au lieu du supplice & brûlée avec elle.

Agathe estoit une femme timide que la crainte des tourmens avoit fait chanceler lorsqu'on la menoit à la mort. Elle rencontra un Catechiste, à qui elle dit avec un grand sentiment de douleur, qu'elle avoit esté sur le point de succomber à la tentation : mais que par la grace de Dieu elle se sentoit si resoluë & si encouragée, que les plus grands tourmens au lieu de l'épouvanter, luy paroissoient infiniment doux & agreables. Elle fit éclater sa joye dans le bucher & au milieu des flâmes, où elle ne cessoit de louer & de benir Dieu.

Monique estoit dans la même charette qu'elle. Lorsqu'elle la vit parler à un Catechiste, elle tourna la teste d'un autre costé, tant pour ne pas mettre le Catechiste en danger, que parce qu'elle tenoit pour injure d'estre exhortée à la mort qu'elle desiroit avec tant de passion. Elle estoit du Royaume de Mino & femme de Michel Cunzi qui estoit banni pour la Foy. Elle eut une douleur extrême de ne le pouvoir pas suivre dans son bannissement, parce qu'elle estoit alors malade : mais Dieu la reservoit à de plus grands combats & luy préparoit une plus riche couronne. Cette sainte Amazone se dispoit au martyre par l'essay de tous les tourmens qu'on luy pouvoit faire souffrir. Un jour entr'autres elle prit en sa main un fer tout rouge de feu. Sa soeur l'ayant apperceu luy dit : *Ha ma soeur que faites-vous la ?* Monique luy ayant fait promettre qu'elle luy garderoit le secret, luy répondit : *Je m'exerce & je me dispose au martyre. J'ay déjà combatu la faim & j'en suis venu à bout : maintenant je fais un pas plus avant & je touche du feu. Qui-conque ne s'exerce pas de la sorte doit se retirer du danger.* Cette noble Japonnoise ne doit pas servir d'exemple à quantité de jeunes gens, qui veulent éprouver dans le monde, s'ils pourront supporter les rigueurs de la Religion ; ni décourager ceux qui ne se sentent pas assez resolus pour souffrir le martyre. On ne peut souffrir sans grace ni les tourmens des Martyrs, ni les austeritez de la vie Religieuse, & cette grace ne se donne ordinairement que lorsqu'on est dans l'occasion. C'est pourquoy c'est se mettre en danger de

de luy, que jamais en sa vie il n'avoit senti tant de contentement qu'il en sentoit alors.

Telle sa femme ne luy cèdoit ni en noblesse, ni en vertu, comme on a pû connoistre par le recit que j'ay fait de son martyre. Lorsqu'on la tira de prison pour accoucher, elle employa tout ce temps à faire de riches habillemens pour soy, pour son époux & pour ses enfans quand ils seroient menez dans des charettes à la mort. Y estant remise avant ses couches, un de ses petits enfans songea la nuit qu'on luy mettoit des fers aux mains, & raconta son songe à sa mere tout saisi de frayeur. Elle le reprit de ce qu'il craignoit la mort & ajoûtoit foy aux songes. Sa constance anima tellement ses enfans, que Catherine sa fille qui n'avoit que douze ans, attendant lire sa sentence, remercia les Juges de ce qu'ils la condamnoient au feu.

Ce fut un beau spectacle aux yeux de Dieu, des Anges & des hommes, de voir une Dame d'une si grande qualité, au milieu de cinq petits enfans, attachée à une croix & brûlée avec eux ! Les Chrétiens fondoient en larmes, touchez de tendresse & de compassion, & les Payens estoient dans un profond étonnement, voyant la constance de la mere & le courage des enfans. Comme elle descendoit de la charette pour aller au bucher, elle prit un manteau fort riche & fort beau qu'elle se mit sur les épaules, & le ceignit avec tant de modestie, que tout le monde demeuroit immobile dans l'admiration d'une si grande vertu.

Estant liée à sa croix, elle jettoit de doux regards sur ses enfans, & par un petit souris les encourageoit au martyre. Elle avoit, comme nous avons dit, à ses deux costez Catherine sa fille & Pierre son fils. Catherine estant à demi brûlée, dit à sa mere : *Ma mere je ne vois plus goutte.* Cette sainte Dame luy répondit : *Ma chere fille appelez à vostre secours JESUS & MARIE. Nous serons tout maintenant en Paradis.* Cependant elle sentoit ellemême les intolerables ardeurs du feu qui la brûloit : mais elle ne songeoit qu'à sa petite Luce qu'elle tenoit entre ses bras ; elle la caressoit, essayoit ses larmes, & la serroit si fort contre son sein, qu'on la

luy trouva attachée & comme incorporée après sa mort. Heureuse mere qui a honoré Dieu par un si beau sacrifice, & qui a souffert autant de morts, qu'elle a vû mourir de ses enfans ! Ne peut-on pas avec justice la comparer pour ne pas dire préférer, aux saintes Felicitez & aux saintes Symphoroses de la primitive Eglise, puisqu'à compter l'enfant qu'elle avoit dans son corps, elle en a immolé sept sur l'Autel de la Croix, & les a vû de ses yeux consumer à ses costez dans ces flâmes horribles, sans se plaindre & sans donner le moindre signe de douleur ?

Nous sçavons peu de choses des autres Martyrs, parce que la fureur de la persecution a empêché de faire les informations de leur vie, & que le bruit que faisoient les Bourreaux & les assistans nous ont osté la connoissance de ce qu'ils dirent à la mort. Voicy tout ce que nous en avons appris.

Leon Guisuque estoit un Chrétien si fervent, qu'il se moquoit de ceux qui le menaçoient de la mort & qui plantoient des croix devant sa porte pour l'epouvanter. Un peu avant que d'estre prisonnier il s'éveilla la nuit en sursaut, & dit à sa femme : *Madeleine, réjouissons-nous, voicy venir la justice. Ayons bon courage, Dieu sera avec nous.* En même temps il saute de son lit & se met en prieres, & voilà aussi-tost des Archers qui entrent dans sa maison, qui le lient & qui le menent en prison, Quelque temps après Madeleine sa femme, quoy qu'agée, fut emprisonnée & brûlée avec luy.

Lin Rifoye estoit d'un naturel fort timide, & apprehendoit extrêmement les moindres douleurs : Cependant il fut tellement fortifié par la grace de Jesus Christ, que voyant les croix & les buchers préparez, il dit en riant : *Sont-ce là ces tourmens horribles dont on nous a menacez ? Cela est bien doux & facile à supporter.* Il demanda ensuite à un des Officiers où estoit sa croix, & il alla l'embrasser. Il y mourut avec une constance admirable au grand étonnement des Chrétiens & des Payens, qui connoissoient sa timidité. Il avoit plusieurs fois demandé instamment d'estre receu dans la Compagnie de Jesus.

La nuit approchoit lorsqu'on mit le feu au bucher. Aussi-tost que la flâme parut, les assistans se mirent à crier & à pleurer, les Bourreaux à hurler, les Martyrs à chanter & à faire retentir l'air du saint Nom de Jesus. On fut quelque temps sans les voir & sans les entendre, pour l'épaisseur de la fumée & le bruit que faisoient les assistans : mais enfin le feu s'estant éclairci & le bruit appaisé, on vit ces glorieux Martyrs mourir pour la pluspart sans contorsions de corps & sans marques de douleur, les yeux élevez vers le Ciel, comme s'ils eussent vû les Anges chargez de couronnes qui leur estoient préparées.

On remarqua que les pauvres meres frotoient doucement la teste de leurs enfans pour les empêcher de pleurer. Mais ce qui surprit tout le monde, fut le courage & la fermeté de ceux qui estoient un peu plus grands : car on leur vit les yeux aussi rians & le visage aussi serein, que s'ils n'eussent senti aucune douleur. Et ce qui marque la constance admirable de ces Martyrs, c'est que bien que les hommes & les femmes, les vieillards & les enfans ne fussent presque point liez à leur croix, pour leur donner moyen de se sauver, lorsqu'ils sentiroient les premieres ardeurs du feu, pas-un neanmoins ne branla ni ne s'échapa ; mais ils moururent tous, comme j'ay dit, les yeux attachez au Ciel. Ce martyre arriva le 7. Octobre 1619.

Les Soldats demurerent sept jours sur la place pour empêcher les Chrétiens d'emporter leurs Reliques. Ceux-cy cependant tromperent leur vigilance ; car sans se soucier du danger où ils s'exposoient, ils en recueillirent une grande partie. On raconte quantité de merveilles qui arriverent cette même nuit : Entr'autres une grande clarté qui parut sur le lieu de leur martyre, & une belle étoile dans l'air qui fut veuë des Chrétiens & des Payens. Quoy qu'il en soit, tout le monde se retira penetré de douleur & saisi d'étonnement du courage invincible de ces Martyrs, & de la joye qu'ils firent paroître lorsqu'on les menoit au supplice. Puisque leurs corps ont esté reduits en cendres, il est juste que nous recueillions icy quelques Reliques de leur esprit, qui sont leurs vertus qui sont venus à nostre connoissance.

Cette troupe bien-heureuse avoit esté baptisée & formée à la vertu par les Peres de la Compagnie de Jesus. Le Pere Gaspar Villela, dont nous avons tant parlé dans le premier livre, avoit baptisé le Pere de Dom Jean Tafioye. Le fils ne dégénéra point de la noblesse & de la pieté de son pere. Il apprit dès son enfance à lire en Portugais, & par la lecture de nos beaux livres d'Europe, il se rendit un des plus parfaits Chrétiens du Japon. Lorsque l'Empereur estoit à Fuximi, quelques Idolâtres firent courir le bruit qu'il avoit renoncé la Foy. Cette calomnie luy fut si sensible, qu'il en tomba malade & en pensa mourir. Il recouvra sa santé par une espece de miracle, car il avoit esté desesperé des Medecins, & il reprit aussitost ses exercices de pieté, qui estoient de recevoir les Peres dans sa maison, de leur servir la Messe, d'instruire les Payens & de faire en tout ce qu'il pouvoit le fonctions d'un Apostre.

Ayant esté trahi par un de ses valets Idolâtres & déferé à l'Empereur, une troupe de soldats le vint saisir un matin qu'il estoit en prieres. Il les receut sans s'étonner avec beaucoup d'honesteté, & fit present à l'Officier qui l'avoit arrêté d'un poignard & d'un cimenterre d'une trempe tres-fine. Il fut conduit avec sa femme & ses enfans à la maison du Gouverneur qui estoit alors à Fuximi. C'est-là qu'il fut tourné de tous costez, attaqué de toutes parts, tenté de toutes les manieres imaginables, par menaces, par promesses, par des considerations d'honneur, de plaisir & d'interest. Mais il repoussa tous ces traits de l'ennemi avec le bouclier de la Foy, & répondit à toutes les propositions qu'on luy fit, qu'il vouloit vivre & mourir Chrétien, & qu'il se tiendroit heureux s'il pouvoit mener avec luy toute sa famille au Ciel.

Il fut traité dans la prison selon sa qualité, & il envoyoit aux autres prisonniers les meilleurs plats de sa table. Il estoit Prefet de la Compagnie de Nostre-Damé. Lorsqu'il eut receu la nouvelle de sa mort, il envoya son Rosaire à ses Confreres, & leur demanda pardon du mauvais exemple qu'il leur avoit donné. Il ravit tout le monde allant au supplice par sa modestie, sa douceur & son intrepidité. Il dit en chemin à un de ses amis qui estoit auprès

attachez. Il n'y avoit personne qui pût retenir ses larmes, voyant tant de femmes qu'on menoit au supplice & tant d'enfans innocens qu'on alloit égorger comme de petits agneaux.

A la sortie de Meaco il y a un Bourg fort peuplé, par lequel on va à Fuximi, & qui n'est pas loin d'un torrent, qui descendant du Septentrion passe par Meaco, & la divise en deux Villes, la haute & la basse. Ce fut là le champ de bataille où cette noble troupe de Martyrs triompha du monde, de l'Enfer & de la mort. Lorsqu'ils virent les Croix plantées au milieu d'un grand bucher, ils furent remplis d'une consolation extrême & descendirent gayement de leurs charettes. Chacun demandoit où estoir la sienne pour l'aller embrasser. Ils furent liez deux à deux à une croix, un homme avec un homme, & une femme avec une femme, chacun dos à dos. Voicy les noms & le país de ces illustres Martyrs.

Quatorze estoient de Meaco. Le plus illustre de tous estoit Jean Faximoto Tafioye Seigneur de la Cour, d'une grande distinction pour sa noblesse, ses grands biens, sa valeur & sa rare prudence. On fit tout le possible pour le pervertir, en luy représentant les grands emplois qu'il devoit esperer de l'Empereur s'il obeïssoit à ses Edits, & la ruine entiere de sa famille s'il n'y obeïssoit pas : mais tout cela ne put ébranler le courage de ce Heros. Sa femme qui avoit nom Tecele, estoit aussi de Meaco, elle suivit son mary à la prison avec six de ses enfans. L'ainé nommé Michel fut sauvé par le Gouverneur & retenu malgré luy pour ne pas éteindre entiere-ment une famille si noble, ce qui affligea fort son pere pour la crainte qu'il eut qu'on ne le pervertit. Tecele entra dans la prison avec les autres enfans, sçavoir Catherine, Thomas, François, Pierre & Luce. Catherine estoit âgée de douze ans ; Thomas d'onze ; François de huit ; Pierre de six & Luce de trois. Comme Tecele estoit grosse & preste d'accoucher, on la tira de prison ; mais l'execution ne se pouvant retarder, elle y fut renvoyée & mise à mort par une inhumanité sans exemple.

Les autres prisonniers Bourgeois de Meaco estoient, Jean Guisacu, Madeleine sa femme, & leur fille Reyne. Mancie Quiviro, Louïs

Montagoro & deux qui avoient nom François, le pere & le fils. Quatre estoient originaires du Royaume de Bungo, Thomas Guian, Marie Cungo, Jean Sacuraie & Ursule sa belle fille. Thomas Iguegam estoit de la Province de Fococu. Lin Rifroie & Marie femme de Chungocu. Cosme, Thomas, Xinxiro, Marie sa femme & une autre Marie avec sa fille Monique, dont le pere avoit esté martyrisé, estoient du país d'Yamaxiri. Antoine, Joachim Ogava & Monique de celui d'Yamati. Il y en avoit huit autres de la Province d'Onari ; Sçavoir Gabriel, Madeleine, Thomas Thoyemon & Luce sa femme, Rufine & Marthe sa fille, Leon Guinsaques & Marthe sa femme. Une autre Marthe & son fils Benoist âgé de deux ans estoient du país de Cavaqui. Deux Maries, Pierre Emmanüel Curosaburo, Thomas Yoyemon avec Anne sa mere estoient de la Province de Tamba. Il y avoit quatre autres femmes du Royaume d'Onie, Monique, Agathe, Messie avec sa petite fille Luce âgée de trois ans. Jérôme Sorocu & Luce sa femme estoient du Royaume d'Aqui. Il n'y en a qu'un nommé Jacques Truzu, dont on n'a pû sçavoir le país. Comme ce martyre est un des plus considerables qui soit arrivé dans le Japon, j'ay jugé à propos de marquer les noms, l'âge & le sexe de ceux qui l'ont souffert. Voicy comme ils furent disposez dans leur bucher.

Les deux premiers qui furent attachez à leur croix, furent Joachim & Gabriel comme les plus avancez en âge. Après eux les autres hommes furent acouplez de la même maniere. Les femmes mariées avec leurs enfans furent mises au milieu. On y voyoit la petite Reyne âgée de deux ans avec sa mere Marie. Marthe tenoit entre ses bras son petit fils Benoist qui n'avoit que deux ans. Luce qui n'avoit que trois ans estoit avec Messie sa mere. Marthe qui estoit aveugle & qui avoit huit ans, estoit attachée avec sa soeur Rufine.

Il y avoit entre chaque croix quantité de bois & de sermens [*sic*]. Mais ce qui attiroit les yeux de tout le monde, c'estoit l'illustre Dame & la pitoyable mere Tecele avec ses cinq enfans. Elle tenoit Luce âgée de trois ans entre ses bras ; Thomas estoit à sa droite ; François à sa gauche ; les deux autres estoient liez à une croix prochaine.

assistans. Sa resolution obligea les Officiers qui ne pouvoient plus dissimuler, de le mettre en prison avec les autres. Quelque temps après une occasion favorable s'estant présentée de l'en retirer, il ne voulut jamais y consentir.

Ingendono ne se contenta pas d'avoir fait cette premiere démarche : mais pour gagner les bonnes graces de l'Empereur qui devoit venir dans peu de temps à Meaco, il fit afficher par tous les carrefours de la Ville des Edits sanglans contre tous ceux qui retireroient chez eux quelques Chrétiens. Ensuite il envoya des gens dans toutes les maisons voir s'il n'y en avoit point de cachez. La peur ayant saisi les habitans, beaucoup de Chrétiens furent obligez de sortir de la Ville. Les uns se retirerent dans les forests, les autres après avoir recommandé leur petite famille à leurs parens Idolâtres, choisirent un exil volontaire, & renoncerent à toutes les commoditez de la vie. L'Empereur estant venu à Meaco vers le mois de Juillet, on crut que sa presence arresteroit le cours de la persecution ; mais le contraire arriva : car on se saisit d'un grand nombre de Chrétiens jusqu'à soixante-trois qui furent faits prisonniers.

Les prisons du Japon sont si étroites & si puantes, qu'il n'y a point de cachot, dit-on, en Europe qui leur soit comparable : mais les plus horribles de toutes sont celles de Meaco. Ceux qui sont dedans à peine peuvent-ils respirer, & leur haleine n'est pas plutôt sortie de la bouche, qu'elle s'épaissit & se resout en gouttes d'eau. Huit Chrétiens tomberent malades & moururent dans ces cachots : Les uns de chaleur qui les étouffa ; les autres de faim & de misere. Deux petits enfans de deux ans furent les premieres fleurs que Dieu cueillit dans ce jardin de souffrances : mais voicy des fruits d'une constance admirable, & je ne sçay si l'Eglise dans les premiers siecles, quoy qu'échauffée par le sang encore tout bouillant du Sauveur du monde, & animé par une infinité de miracles, en a produit de plus beaux.

L'Empereur ayant sejourné environ trois mois à Meaco, & s'en retournant à Jedo, passa par Fuximi, qui n'est qu'à deux lieuës de cette Ville Imperiale, où il apprit qu'il y avoit à Meaco beaucoup

de Chrétiens prisonniers pour avoir méprisé ses Edits. Ce Tyran entrant en fureur, commande qu'ils soient tous brûlez vifs sans distinction d'âge, de sexe & de condition. Ingendono Gouverneur de la Ville, qui n'estoit pas, comme j'ay dit, violent de son naturel, eut horreur de ce supplice & fut sur le point d'ouvrir les prisons : mais prévoyant que cette action seroit la cause de sa ruine, & sçachant que pas-un Chrétien n'accepteroit la liberté qui luy seroit offerte, il fut obligé d'executer cette sentence qui luy paroissoit avec raison injuste & barbare. Il fait donc préparer vingt-sept croix aussi belles & aussi bien travaillées que si c'estoit pour estre mises dans une Eglise. Ce spectacle surprit tout le monde. Car ceux qu'on brûle dans le Japon sont liez à un poteau, & non pas à une croix. Dieu le permit ainsi pour la gloire de son fils & pour la consolation de ses serviteurs qui furent merveilleusement animez & encouragez par la veuë de ce glorieux étendart. Il fit aussi amasser une quantité prodigieuse de bois pour accourcir le tourment des Martyrs, & pour obeïr à l'Empereur qui vouloit qu'ils fussent promptement expediez.

Le jour de l'execution estant venu on les tire de prison, & après les avoir liez les uns avec les autres, on les mene à la place publique, où ils trouverent neuf charettes préparées pour les porter au lieu destiné à leur supplice. On fit monter les hommes dans les premieres, & les jeunes gens dans les dernieres. Les femmes furent mises dans celles du milieu avec leurs petits enfans qu'elles alaitoient & portoient entre leurs bras. On ne vit jamais tant de monde assemblé qu'il y en eut, pour voir cette marche tragique & déplorable. Un Trompette marchoit devant, publiant à chaque bout de ruë leur sentences en ces termes.

*Le Xogun Empereur du Japon, veut que ces gens soient
bruslez vifs, parce qu'ils sont Chrétiens.*

Les Martyrs à chaque proclamation s'écrioient : *Il est ainsi, nous mourons pour JESUS-CHRIST, vive JESUS.* Ce qu'ils disoient d'un visage riant & regardant doucement le Ciel, où leurs coeurs estoient

Le même jour, à Fouchimi, Ignace Chitchiyemon, fut brûlé vif (1).

VI.

P. CRASSET, HISTOIRE DE L'ÉGLISE DU JAPON.
PARIS, M.DC.LXXXIX. TOME II. LIVRE XV.
PP. 334-346.

Je quitte avec peine les Royaumes du Ximo, païs éclairé des premiers rayons de la Foy, cultivé par les travaux & les fatigues incroyables de saint François Xavier & des Religieux qui l'ont suivi, consacré par le sang de tant de Martyrs qu'on y a répandu & par

Thomas Chian, Maria Tchoungò, Jean Sacourai, et Ursule, sa belle-fille. Ces quatre étaient de Boungo.

Thomas Ichegan, du Fococoù.

Lino Rifioye, Maria, sa femme, tous deux du Tchoungocoù.

Cosme, Thomas Chinchirò, Marie, sa femme; une autre Marie, et Monique, sa petite-fille, tous d'Yamachiro.

Antoine, Joachim Ogawa, Monica, tous les trois d'Yamato.

Gabriel, Madeleine; Thomas Toyemon, Lucia, sa femme; Ruffina, Marthe, sa fille; Léon Tchiousouke, Marthe, sa femme. Tous d'Owari.

Gabriel avait quitté le service d'un prince et de grands revenus, afin de mener une vie de misère et de se nourrir du pain des douleurs, pour l'amour de Jésus-Christ, son nouveau maître.

Ruffina, sur le chariot qui la portait au supplice, était comme en extase et ravie en Dieu: cet état lui était pour ainsi dire habituel. (Luis, p. 81.)

Martha, Benoît, son fils, de deux ans: de Cawatchi.

Maria, une autre Maria; Pierre, Manoel Courosabourò, Thomas Yoyemon, Anna, sa mère. Tous de Tamba.

Monique, Agathe, Mencia, et Lucia sa fille, de trois ans; d'Omi.

Monique s'était essayée d'avance à manier un fer rougi au feu, et elle dit sous le secret à sa soeur: «Je m'exerce au martyre; j'ai déjà combattu et vaincu la faim; je veux faire un nouveau pas en éprouvant les ardeurs du feu.» (Luis, P. 83.)

Jérôme Sirocoù, Lucie, sa femme; d'Aki.

Jacques Tsouzoù, de pays inconnu.

(1) Il était natif de la province d'Omi, et âgé de trente ans. Son corps fut recueilli par les chrétiens.

les cendres de tant de victimes qu'on y a brûlées: mais il nous faut faire un voyage à Meaco capitale de l'Empire aussi bien qu'à Jedo, pour y voir les tragedies sanglantes que les Tyrans de la Foy y ont représentées.

L'an 1618. le Pere Jean de sainte Marie de l'Ordre de saint François honora Dieu & la Religion d'un glorieux martyr, ayant eu la teste coupée à Meaco. Je suis marry de n'en sçavoir pas les particularitez. L'année suivante la persecution redoubla & commença par l'emprisonnement de trente-six Chrétiens de tout sexe, âge & condition. Le Gouverneur nommé Ingendone estoit un homme d'un esprit fort doux, & comme il connoissoit l'innocence des Chrétiens, il les laissoit vivre paisiblement sans leur faire de peine. Mais son fils retournant de la Cour, luy fit entendre qu'il y alloit de sa ruine & de celle de sa famille, s'il n'étouffoit une Religion que le Prince n'aimoit pas. Cet avis l'obligea d'envoyer des troupes dans une ruë où il y avoit quantité de Chrétiens. Il en fit saisir trente-six qu'il envoya en prison: mais parce qu'elle estoit pleine de prisonniers, on les fit demeurer à découvert jusqu'à ce qu'on eût fait le procès aux autres. Cependant leurs biens furent confisques & leurs maisons pillées.

Il y avoit dans cette troupe un bon vieillard Medecin, qui entre plusieurs belles cures qu'il avoit faites, venoit tout recemment de sauver la vie au fils du Gouverneur, l'ayant guéri d'une maladie qu'on estimoit mortelle. Le Commandant l'ayant apperceu, & voulant le faire évader, le fait délier & changer de place. Puis il luy donne avis secretement de se sauver: mais Jacques, c'est son nom, dit qu'estant Chrétien comme les autres, il vouloit mourir avec eux. Un soldat voyant son obstination, le prend par le bras & luy dit en colere: *Retire-toy d'icy, malheureux Medecin; va prendre une bonne place à la prison, où nous irons bien-tost te trouver.* Son dessein estoit qu'il s'en retournast chez luy: mais Jacques obeissant à ce commandement, s'en va droit à la porte de la prison, où il attendit assez long-temps ses compagnons. Lorsqu'il les vit paroistre, il va au devant d'eux d'un visage gay, au grand étonnement de tous les

martyre (1).

Le 7 octobre (2), cinquante-deux victimes furent liées sur des chariots, au nombre de onze, les hommes et les jeunes gens étaient dans le premier et le dernier, les femmes et les enfants à la mamelle ou portés dans les bras occupaient tous les autres. Un crieur précédait le cortège, et proclamait l'édit de mort : « Le Chôgoun, empereur de tout le Japon, veut et commande que toutes ces personnes soient brûlées vives en qualité de chrétiennes. » Et les martyrs confirmaient la parole du crieur, en disant : « Cela est vrai, nous mourons pour Jésus : Vive Jésus ! »

A l'extrémité de Méaco se trouve un faubourg très-populeux, dans la direction de Fouchimi, et à peu de distance du Camongawa (torrent septentrional), qui baigne et partage Méaco, vis-à-vis le grand temple Daibout. Là se dressaient les croix, espacées de quatre ou cinq brasses, et le bois, un peu éloigné, tout à l'entour ; les confesseurs y furent attachés deux à deux et se tournant le dos. Au centre étaient les mères avec leurs petits enfants.

Madeleine, femme de Jean Tchingacou, martyr lui-même, avait dans ses bras sa fille Régine, enfant de deux ans ; Marie avait Monique, sa fille de quatre ans ; et Marthe, son fils Benoît, de deux ans. Une autre Marie tenait son fils Pierre, de quatre ans. Mencia pressait sur sa poitrine sa Lucie de trois ans, et Rufine, sa petite Marthe, de huit ans et aveugle. « Mais, » dit un pieux auteur (3), « qui aurait vu avec des yeux sans larmes cette Tecla, mère de cinq enfants, et qui en avait trois auprès d'elle à la même croix : car elle avait dans ses bras Lucie, de quatre ans ; Thomas de douze ans était suspendu à sa droite, et François, de neuf ans, était lié à sa gauche. Ses deux autres enfants occupaient la croix voisine. »

(1) On évalua le bois à quatre cents écus, et l'on attribua à la douceur naturelle du gouverneur le soin qu'il prit d'abrèger le supplice.

Les croix étaient travaillées avec art : le P. Gaspard Luis en vit une à Macao en 1620.

(2) Carrero dit : le dimanche 16 octobre.

(3) Luis, p. 73.

L'incendie s'alluma bientôt dans ces immenses pyramides un déluge de flammes envahit les martyrs, tandis que de toute leur âme ils invoquaient Jésus. Les tendres mères caressaient avec la main la tête et le visage des enfants, pour essuyer leurs larmes et apaiser leurs plaintes. Catherine, fille de Tecla, sur le point d'expirer, s'écria : « Mère, je n'y vois plus. » « Invoque Jésus et Marie ! » lui répondit sa généreuse mère. Cette femme séraphique tenait dans ses bras sa petite Lucie, et elle l'étreignit avec tant d'amour qu'on trouva plus tard l'enfant adhérente et comme incorporée de nouveau à sa mère. O saintes symphorose et Félicité ! cette martyre fut, ainsi que vous, mère de six enfants ; Michel, son fils aîné, privé de mourir, fut suppléé par le septième enfant vivant dans ses entrailles.

A la vue de cet holocauste, les chrétiens conçurent une si vive ardeur, qu'ils ne craignaient plus ni brasier ni supplices. Les gentils déclaraient n'avoir jamais vu de constance aussi héroïque.

Les reliques, gardées pendant sept jours par les satellites, furent plus tard livrées aux chrétiens.

Une comète qui parut au ciel, parmi des éclairs et des feux surnaturels, signala, dit-on, ce martyr : et ces prodiges furent attestés par les infidèles, aussi bien que par les chrétiens (1).

(1) Luis, P. 74.—Les noms des martyrs étaient : Francesco, le père ; Francesco, le fils ; Jean Tchiousacoù, Madeleine, sa femme ; Régine, leur fille ; Mencia Tchivirò ; Louis Matangoro ; Jean Fachimoto Tafioye, Tecla, sa femme, et leurs enfants : Catherine, de treize ans ; Thomas, de douze ans ; François, de huit ans ; Pierre, de six ans ; Lucia, de trois ans.—Tecla était enceinte d'un dernier enfant.

Jean était noble de race ainsi que sa femme. Le père de Jean avait reçu le baptême par les mains du P. Villela, et lui-même avait toujours été d'une dévotion exemplaire.

Tecla, qui était sur le point d'accoucher, fut d'abord laissée dans sa demeure, où son occupation était de préparer des vêtements pour son martyre et pour celui des siens. Remise en la prison, elle encouragea ses enfants, et les rendit héroïques.—En descendant du char, elle se revêtit d'un manteau magnifique, et son apparence était si noble et si grave qu'elle ravissait tous les yeux, et qu'elle fit éclater un applaudissement immense.

Tous ces martyrs étaient de Méaco.

des chrétiens se prévalurent de la persécution exercée envers eux pour les opprimer à leur tour et leur arracher leurs dernières ressources ; quant aux débiteurs, ils n'avaient point de honte de renier leur dette, ou de n'en payer que la moindre partie. Ce fut la ruine d'un grand nombre de fidèles.

De janvier à Pâques, les Pères, sous différents déguisements, prodiguèrent leur ministère : et à Pâques, une persécution nouvelle et plus vive s'éleva. Une placard fut affiché de nuit, vis-à-vis la rue de Dieu, menaçant d'incendie et de mort tous les alentours. Ceux mêmes qui l'avaient apposé, et qui étaient des païens débiteurs d'un chrétien, détachèrent l'écrit au lever du jour, et coururent chez le gouverneur, dénonçant les exilés comme en étant les auteurs. Treize chrétiens, l'âme de cette Église, furent incarcérés.

Dans ces circonstances le Coubo lui-même arriva à Méaco (8 juillet). On espérait quelque trêve, mais il y eut un accroissement de rigueurs. Au bout de trois jours, Jean Tafioye fut jeté dans les fers, avec sa femme et ses six enfants ; les prisonniers étaient alors au nombre de soixante-trois. Michel, fils aîné de Tafioye, était alors absent et ne fut point arrêté : emprisonné plus tard, il fut relâché par le juge, qui ne voulait point trancher dans la racine une famille aussi considérable (1).

Mais dans cette prison infecte et pestilentielle, où l'haleine retombait en rosée, et où la faim et la soif, le soleil et les frimas conspiraient contre la vie des confesseurs, huit d'entre eux avaient vu s'achever leur sacrifice par la pure souffrance, avant l'heure du supplice (2). Deux créatures de deux ans, vrais lis d'innocence,

(1) Un renégat reçut à cette époque le châtement immédiat de son crime. Après avoir renié, sur l'heure même il se vit atteint d'une fièvre aiguë, et perdit en peu d'heures la raison et la vie, sans avoir eu le temps de se repentir.

(2) Ce furent : Michel, âgé de deux ans, de Méaco, le 17 mai ; Mathias Tchousayemon, de Figen, 16 juillet ; Francesco Fiozo, du Tchoungocou, 4 août ; Pierre, âgé de deux ans, de Méaco, 11 août ; Joachim Josobioye, du Tamba, 14 août ; Jean Chenzaï médecin, très-âgé, du Wacasa, 30 septembre ; Diogo Itchiyemon, du Tchoungocou, 19 octobre ; André Ghioïtchi, aveugle, d'Owari, 21 octobre.

étaient allés embellir le Paradis. L'un des autres, André, un aveugle, était préfet de la Congrégation de l'Annonciation, érigée sous le vocable de Saint-François-Xavier. Ses avis pleins d'éloquence embrasaient tous les cœurs. Les fidèles veillaient avec bonheur sur le vénérable aveugle. Mais renvoyé par son hôte, et ne voulant compromettre personne, il se fit conduire à un pont où les gardes l'arrêtèrent. A l'audience, pressé de renier, l'aveugle se fit sourd. Dans la prison il sut conserver la liberté de sa parole, et recueillit de merveilleux fruits ; mais à la fin consumé de misère, il alla recevoir sa couronne et jouir de la lumière sans déclin et sans terme.

Jean Chenzaï, médecin, vénérable par ses années, était devenu sourd, et n'était plus attentif qu'à recueillir les inspirations célestes. « Mon crime serait trop énorme, » dit-il à son juge, « si dans ma vieillesse je reniais la foi qui m'a pris dans les langes. » Et dans la prison, il exaltait la félicité réservée à ses derniers jours : « Après avoir été pendant tant d'années alimenté et soigné par mes frères, je me vois souffrant pour Jésus-Christ : que puis-je désirer de plus à cette heure suprême ? » C'est ainsi que, chargé d'années et orné de précieux mérites, il atteignit le terme de son épreuve et de ses ardents désirs.

Les corps de ces confesseurs furent rendus aux chrétiens, qui les ensevelirent honorablement.

Cependant le Coubo devait consommer la persécution par des immolations terribles. Il avait ignoré jusqu'alors l'existence en cette prison de nombreux chrétiens contempteurs de ses décrets. Il l'apprit à Fouchimi, à deux lieues de Méaco, lorsqu'il se rendait à Yendo. Enivré de colère, il ordonna de les brûler tous, sans délai et sans distinction d'âge ni de sexe. Ingandonno, qui s'était promis d'ouvrir la prison et de mettre les chrétiens en liberté, se vit obligé d'y faire revenir ceux-là même que par indulgence il avait laissés en dépôt dans leurs demeures.

Ces mesures sévères, et la vue des bois amoncelés et de vingt-sept croix érigées au lieu des exécutions, firent présager un éclatant

que estauan presos en el Miaco cerca do sesenta Christianos, y que murieron en el cinco, o seys. Dizen agora, que boluiendo el Xongun de Ozaca al Miaco, mandó a Itacuradono, que es el Governador de la Ciudad, que le hiziesse concertar vn relox muy rico, que los Padres le dieron antes de agora. El Governador que es hōbre pio, y pensó con esto librar a los Christianos de la carcel, respondió, que no auia quien supiesse del Reloges, sino vno, que con otros estaua preso por Christiano. El Xongun dizen que se alteró mucho con oyr esto, diciendo, que como era possible que huiesse Christianos en aquella Ciudad despues de tantas leyes, y rigor suyo, y de su padre. Y que visto esto, mandò, que luego los mandassen quemar a todos viuos, assi por el odio que tiene a la ley de Dios muy grande, como para con este rigor hazerse temer del pueblo. Itacuradono con harto dolor de su coraçon huuo de executar la sentencia; Lleuandolos atadas las manos atras en vnas carretas, por todas las principales calles del Miaco, saliendo infinidad de Gentiles a ver tan espantoso espectáculo, por estar alli casi todo el exercito, y gente del Xongun, y de todos los demas señores. Dizen, que fueron muy alegres, y predicando por el camino a los presentes; y en la ribera del rio Camo fueron con ilustrissimo holocauste, (como primicias de los moradores del Miaco, en esta persecucion) ofrecidos al Señor. No se sabe de cierto el numero de los quemados, mas de que los presos eran entre mugeres, niños, y varones, cerca de sesenta; y que los que murieron en la carcel fueron Mathias, Pedro, Ioachin, Diego, y Andres: los demas estan escritos en el libro de la vida, y sus nombres vendran escritos en la annua.

V.

LEÓN PAGÉS, HISTOIRE DE LA RELIGION CHRÉTIENNE
AU JAPON. PARIS, 1869. LIVRE II.
CHAPITRE IV. Pp. 409-415.

Deux Pères de la Compagnie assistaient les fidèles de Méaco; l'un d'eux même put visiter Yendo, et consoler les chrétiens pré-

cedemment administrés par les Pères de Saint-François, alors exilés. On vit de fervents chrétiens faire treize jours de route pour assister à la sainte Messe et puiser la force divine à la source des Sacrements. La naissance de notre Sauveur avait été célébrée solennellement; ce fut pour les païens l'occasion d'accuser devant Ingandono, gouverneur de Méaco, cette secte opiniâtre et séditeuse qui méprisait les lois et qui persistait dans le culte du Christ. Le gouverneur était convaincu de l'innocence des chrétiens, et sa bienveillance naturelle lui fit négliger les premières clameurs. Mais son fils revint de la cour porteur d'édits cruels, et sut inspirer des craintes à cet autre Pilate.

Dans Méaco se trouvait une rue connue sous le nom de rue de Dieu; ce titre lui était venu d'un homme vénérable, appelé Caio, de la famille Foïn, qui, dépouillé de tous ses biens pour avoir confessé Jésus-Christ, y avait été confiné avec sa famille par Taicosama. Ce fut dès cette époque un lieu si vénéré que les bonzes et les quêteurs idolâtres s'en éloignaient comme d'un sanctuaire habité de Dieu même. Cette rue s'était insensiblement peuplée de fidèles, plus qu'aucun autre endroit de la ville, et le gouverneur la choisit pour y exercer ses rigueurs. Trente-six des principaux habitants furent enchaînés et rattachés à un long câble: on les entraîna ainsi vers le tribunal. Au spectacle inouï de cette chaîne d'accusés des deux sexes et de tout âge, un fleuve de peuple inonda le passage. Le gouverneur envoya les confesseurs à la prison: et comme elle était remplie de criminels, les chrétiens n'y eurent point d'abri jusqu'à la conclusion des causes précédentes. Cependant et par provision on séquestra tous les biens: riche aubaine pour le fisc, car ces inculpés étaient les premiers de la ville; toutes ces richesses furent vendues à l'encan.

Ingandono publia de nouveaux édits contre les personnes qui connaîtraient des chrétiens sans les révéler. Les espions pénétraient partout; les fidèles se cachaient dans la cité, ou s'enfuyaient dans les bois. Au nouvel an japonais, il y eut d'autres misères: à cette époque solennelle, où étaient réglés tous les comptes, les créanciers

Legato che si vidde al palo, e che la fiam ma s'andaua rinforzando, diedesi ad alta voce à recitare il Pater noster; mà nel mezzo la vampa, & il fumo li ruppero le parole. Staua agonizando, & ecco vn Barbaro scioccamente pietoso li s'accosta, e dice, Sù fratello, raccomandati a'Fotochi: adesso è il tempo. Voltò la faccia Ignatio sdegnato, e pronuntiando l'ultima parola, Amen, dal breue fuoco, n'andò all' eterno refrigerio. I Barbari con merauiglio se lodi essaltarono la costāza d'Ignatio, il cui corpo cadendo in terra consumato fù raccolto, & accolto con somma veneratione da' Christiani. Era Ignatio sul fiore dell'età di trent' anni, nato nel paese di Omi.

* * * * *
* * * * *

Per commissione de P. Visitatore

Di V. P.

Figliuolo indegnissimo

Gasparo Ludouico.

III.

LETTER FROM RICHARD COCKS TO THOS. WILSON,
ONE OF H. M. SECRETARIES. NAGASAKI,
MARCH 10, 1620.

[*Extract*]

And nowe for newes in these parts. Maie it please you to understand that this Emperour is a greatemie to the name of Christians, especially Japons, soe that all which are found are putt to death. I saw 55 martired at Miaco at one tyme when I was there because they would not forsake their Christian faith, and amongst them were litle children of 5 or 6 years ould burned in their mothers armes crying out Jesus receive their soules.

(*India Office, London.*)

IV.

P. MOREJÓN, HISTORIA Y RELACIÓN DE LO SUCEDIDO
EN LOS REYNOS DE JAPÓN Y CHINA, EN LA QUAL
SE CONTINUA LA GRAN PERSECUCIÓN QUE HA
AVIDO EN AQLLA IGLESIA, DESDE EL
AÑO DE 615 HASTA EL DE 19.

LISBOÃ, 1621. P. 137.

Como el Xongun fue al Miaco, desterrò algunos señores,
y mandò martyrizar algunos Christianos. CAP. 17.

Siempre se temio que con su venida al Cami se ofreceria alguna ocasion en que apretasse mas cõ los Christianos: y sobre esto escriue el dicho Padre desde Ozaca a 16. de Setiẽbre de 619. lo siguiẽte. En la carcel del Miaco estã haya muchos dias presos por la Fè de Christo cerca de sesenta Christianos entre hombres y mugeres, y seys murieron este año en la misma carcel santamente, adonde con varias industrias, è inuenciones fueron visitados, y ayudados con limosnas de nuestros Padres; y los demas estan esperando lo que este tyrano ordena dellos; puede ser que no los mande matar, y que por agora dissimule con ellos, y con ellos, y con nosotros; lo qual seria gran descanso, y bien de la Christiandad, por la qual andamos tan sollicitos. Y esta es la mayor pena y ansias que tenemos, que por lo que a nosotros toca, ningun caso hazemos del tyrano, pues el mayor mal que nos puede hazer es, el mayor bien que desseamos. Pero es tan grande bien, que como no le merezco a Dios, mas temor tengo de que no se me conceda, que del mismo tyrano. Y assi, viniendo el a esta Ciudad me estuue quedo, ayudando a mis Christianos escondidamente, aunque algunos me persuadian mucho que me saliesse della, parece que conforme a esta carta aun estauã en paz.

Pero huuo otras cartas mas frescas; y en vna de Nangasaqui de fin de Otubre de 619. dize vn Padre assi. Doy fin a este carta con vna nueua que corre aqui, por ser muy cierta, y es cosa acontecida en el principio deste mes de Otubre. Ya se ha escrito

prometteuano gran cose, ò la sbrauauano, nè altro le poteuano spremere di bocca, eccetto che, Voglio essere ammazzata con mia madre per la Fede: non satiandosi mai le Guardie, e Soldati di stupire, e celebrare simile resolutione, Diuene cieca, così disponendo il sourano segreto dell' Altissimo, e sentendo Marta, che i Prigioni erano spediti, e sententiati, teneua del continuo strettamente abbracciata la madre, per non restare sola nella prigione.

Agata, in andando alla morte, s'abbattè in vn Dogico, ò Catechista, e chiamatolo da parte si scusò, anzi accusò con intenso sentimento, come se fusse stata dubbiosa, e forse pendente per tema de' tormenti; mà che allora, mercè la celeste gratia, si sentiua tanto rincorata, che ogni tormento le pareua gustoso, e felice, come in effetto diede poi ad intendere nel sembiante esterno.

Monica moglie di Chunzi Michele, bandito per la Fede, trouauasi nell' istesso carro: hor' auuistasi del Dogico, che discorreua con le Cópagne, voltò altroue la faccia come sdegnata, parte per non metterlo à qualche pericolo, parte trapúta da generosità, parédole che riceuessero ingiuria ad essere essortate, oue correuano tanto auidamente. Era discendente questa Signora del paese Mini, Donna generosissima, e quasi vna Christiana Amazone, faceuasi guida, e maestra all'altre. Si lamentaua spesso, che per stare allora ammalata, non puotè andare bandita col bandito consorte, non sapendo à quanto più nobile corona fusse destinata dal Cielo. Soleua qualche volta vedere, e sperimentare, quali forze, & animo hauesse per il Martirio: & occorse che vna volta maneggiando vn ferro rouente, stupita di ciò la sorella, dimandolla, E che pretendi di fare? Fecesi promettere segretezza, soggiungendo, Sorella mia, vadomi essercitando, & auuezzando al Martirio: Di già hò combattuto felicemente con la fame: hora tiro vn passo più auanti verso il fuoco; e chi in questa maniera non si dispone all' vltimo tormento, più sauamente fà à scansare il pericolo. Non mancò ancora di essere à tutti vn perfetto modello di fortezza, e d'ogni altra virtù. Giunta in faccia delle Croci, prima di calare giù dal carro, alzando quanto mai puotè la voce, intonò queste parole. Io Monica sono, e muoio vera Christiana,

e tutti quei, che meco hoggi moriranno, muoiono Christiani, e per la Fede Christiana. Non sappiamo altro de gl' altri, si può bene ragioneuolmente conchiudere, che chi soffri l'istessa pena fusse ancora dotato dell' istessa fortezza.

Xichiemone Ignatio e bruciato viuo in Foximo.

Qvasi ne 'medesimi giorni, facendosi in Miaco vn solenne ballo a' Fotochi, nè volendo vn certo Ignatio ballare, nè hauer cura de' ballarini, nè fù scacciato à furia di popolo come Christiano. Ritiratosi in Foximo terra poco discosto diede nella Corte: Da questa combattuto fieramente ad abbandonare la Fede, rispose, non essere cosa da Christiano il voltare le spalle al suo Signore. Interrogato, se conosceua altri sciaguratti di questo nome: Sciagurati non sono, soggiunse, quei che tutti stanno in saluarsi, & io per essere qualche tempo, che poco traffico, e conuerso, non hò contezza, oue siano altri Fedeli: il che disse per non mettere la Corte in sospetto, & altri in pericolo. Nella prigione, per essere Giouane grandemente ingenuo, e modesto, era trattato anzi cortesemente. Digiunaua il Venerdì, & il Sabato. Soccorreua gl'altri con spirituali ricordi, tanto che guadagnò vn Christiano rinnegato, che per misfatti staua nell' istesso luogo. Scrisse alla moglie assai fresca d'età, che stesse salda nella Fede, e per non venire in potere di qualche Barbaro, che subito dopo la sua morte, si rimaritasse con qualche Christiano da bene, consegnando i figli per educatione à certi Fedeli suoi attinenti. Giunse trà tanto in Foximo la nuoua del solenne Martirio occorso in Miaco: il perche gl' Vfficiali, e Magistrato in vn tratto comandano, che Ignatio sia abbruciato viuo. Detto, fatto, con tanta prestezza, e precipitio, che nessun Christiano puotè tenerli dietro. Montò sopra vn Cauallo: à mezza strada affrontatosi con vn Catechista, l'ebbe per compagno sin' al Martirio. Che per essere vna cosa determinata così alla balorda, non v'era in ordine nè palo, nè sarmenti: Il Carnefice, & i Barbari tutti si affannauano in adunare legna, & il buon Ignatio, pregandoli non si prendessero briga, attendeua à raccomandarsi à Dio, con vna serenità mirabile.

manette. Suegliato con paura raccontò alla madre il sogno, la quale brauò non poco al figlio, che temesse i sogni. Giouò mirabilmente la sua costanza a' figli, tanto che Catarina, vdeudo la sentenza, con ampiezza di parole ringratiò affettuosamente i Giudici. Mà che mostra fù il vedere Tecla sul carro accerchiata da cinque figli? I Fedeli piangeuano d'allegrezza, & i Barbari mirauansi l'vn l'altro per istupore. Nel calare che fece dalla carretta per andare alla Croce, cauò fuori vn'Ammanto di strana vaghezza, & in publico se lo vesti, e recinse con tanta modestia, che tutti immobili non si poteuano satiare di mirarla & ammirarla, alzandole vn'applauso immenso, come che scendesse à nozze, ò à regio festino. Nella Croce poi si portò da vna Serafina, non temendo fiàme, tanto auuampaua di dentro. Stauano legati vicino à lei Pietro, e Catarina, quale essendo hormai mezza arrostita, disse, Madre mia non vedo più lume. Generosamente, rispose, ò figlia, chiama Giesù, e Maria: hor hora saremo in Paradiso: l'obediuaano i buoni figliuoli, ripetendo quei nomi sì dolci, e potenti. Teneua in braccio Lucia, come diceuamo, bambina di tre anni, l'accarrezzaua, le asciugaua le lagrime, e tanto se la strinse al petto, che le fù trouata poi attaccata, e di nuouo quasi incorporata. Et in che cosa Tecla fù inferiore à quelle antiche Heroine, alle Felicite, alle Sinforose? Se vi fusse stato Michele ritenuto per forza dalla Corte, sarebbe morta con sei figli, almeno supplì quello, che teneua nelle viscere.

Chiusuche Leone dall'vscita de' Nostri dal Giappone, si mostrò di tale generosità Christiana, che si rideua di chi li minacciua, e piantaua Croci sù la porta per atterrirlo. Poco prima della prigionia, suegliato vna notte repentinamente, disse alla moglie, Sù Maddalena, allegramente: hor hora comparisce la Corte: animo grande: Dio sarà in nostra compagnia. Salta di letto, si getta in oratione, in vn subito si vede legato, e condotto solo in prigione: Poco dopo Maddalena, benche assai attempata, li fù compagna in carcere, e nel fuoco. Yoyemon Tomaso consolò, e stabili felicemente suo padre, il quale, stando prigione, e moribondo, vacillaua nella santa Fede.

Rifioye Lino, vedendo le Croci, e cataste all'ordine, con riso, e

volto disprezzeuole, E questi, disse, sono quei strani tormenti de' Gen-tili? oh sono ben leggieri, e gustosi. Quindi con modo compito, & amoreuole dimandò ad vno de' Ministri, Insegnatemi per cortesia, oue è la mia Croce? La diuotione, e bontà di Lino fù sempre di raro esempio, e conforto à Fedeli: dimandò cen grand' istanza più volte, d'entrare nella Compagnia: e se bene era di natura timida, e di molta paura ne' frangenti; tuttauia nell' essere abbruciato fù dalla superna fortezza stabilito, e fornito di tanta ricchezza di cuore, che tutto il mondo hebb che dire, e celebrare di costanza si rara in petto, che mai la conobbe.

Gioachino haueua vn fratello molto fauorito nella Corte di Yngan dono, dal quale era stimato, & vdito à cenno: onde, temendo per tal mezzo, d'essere rilassato, supplicò il fratello, che auuertisse à non farne parola, e che mai sarebbe vscito di prigione, se non rapito in pezzi.

Gabriele compagno di Gioachino nella Croce, sendo al seruitio d'vn Prencipe, fattosi Christiano, rinunziando alle sue entrate, con buona gratia del suo Signore, se ne venne à Miaco, tollerando vita meschinissima, e mangiando pane di dolore, per amore del suo nuouo Padrone Christo.

Messia pregata à lasciare la Fede, almeno per non hauere à lasciare Lucia sua figlia senza guida, & allieuo, rispose con animo più che virile, Hò io di già sacrificata Lucia al mio Creatore: poco m'importa morire qui in prigione, ò altroue, pur che io muoia per l'istesso Creatore, come hò già molto tempo fà desiderato.

La diuotione di Ruffina fù sempre segnalata. Sù la carretta andò per molta strada inginocchioni rapita, & attuffata in Dio: cosa à lei molto propria, e quasi connaturale.

Quale fù la Madre, tale si vidde la figlia Marta. L'haueuano i Ministri riposta da parte, accio non entrasse in prigione con gl'altri; mà tanto seppe piangere, e gridare alle stelle, che per acchetarla fù di mestiero ricousegnarla alla madre. Le minacciuaano fame, sete, catene, morte; & ella sempre à sprezzare, e ridersi del tutto. Ogni giorno i Seruitori d'Ingandone, per ingannarla, le

Rifioye Lino, e Maria sua moglie. Del paese Yamaxiri discendeuano Cosimo, Xinxirò Tomaso, Maria sua moglie, & vn'altra Maria, con Monica figliuola. Da Iamati, Antonio, Ogaua Gioachino, e Monica. Otto furono della Prouincia Ouari, Gabriele, Maddalena, Toyemon Tomaso, con Lucia moglie, Ruffina, e Marta sua figlia, Chiusuche Lione Marta sua moglie. Da Cauachi, Marta, e Benedetto suo figlio di due anni. Della prouincia Tamba, due Marie, e Pietro, Curosaburò Emanuele, Yoyemon Tomaso, con Anna sua Madre. Della contrada Omi, numerauansi quattro donne, Monica, Agata, Messia, con Lucia sua figlia di tre anni. Da Achi, erano Sorocù Girolamo con Lucia sua moglie: Di vn tale Tzuzù Giacomo non si sà il paese Tutti questi, eccettuandone solo quattro, furono fatti Christiani per mezzo della Compagnia.

E perche trà tutti parvero i primi quella felice coppia di Tafioye Giouanni, e Tecla, nobili Miacesi, vuole ogni diritto, che in loro ci fermiamo vn tratto, non mancandoui materia d' illustri Panegirici alle penne, e voci d'Oratori. Il P. Gasparo Vilella, de' primi nostri, che predicasse nel Giappone trà gl'altri, è fama costante, che battezzasse il padre di questo Giouanni, quale poi fù sempre persona esemplarissima à tutti li Fedeli. Giouanni non degenerò punto dalla nobiltà, e pietà paterna. Da Giouanetto imparò à leggere ancora i nostri libri d'Europa: onde imbouè quelle Christiane virtù, che tanto dimostrò in questa vltima persecutione. Li fù attaccata vn' horrenda calunnia da gl'inuidiosi, affermanti che hauesse voltate le spalle alla Fede: del che s'accorò talmente, che postosi in letto diuenne frenetico: & il delirio sempre daua in rapportare le pene dell'Inferno, ponendo in disperatione quanti Christiani vi capitauano à visitarlo: e schiamazzaua confaccia si trauolta, e contrafatta, che spauentaua chi che fusse. Disperato da' Medici, fù guarito dalla celeste mano, tornando à gl'esercitii di prima, riceuendo in casa i Nostri, seruendo la Messa, predicando, facendo tutti gl'vfficii d'vn Apostolo, ò di petto Apostolico in ciò, che gl'era lecito. Hor hauendo date le sue ad vn Seruitore Gentile ribaldo, fù accusato come Christiano. Vna mattina per tempissimo, stando in oratione,

e sospettando ogn'altra cosa, vedesi comparire la Corte auanti. Non si perdè punto, anzi scusandosi di non hauere altro alle mani, regalò il manigoldo d'vn pugnale, e scimitarra di finissima tempra Andò con la moglie, e figli al Luogotenente del Gouvernatore, essendo questo per altri affari in Foximo. Varie furono le dimande, infinite le promesse, gagliarde le persuasiue, che non conueniua à personaggio sì conosciuto, tanto fauorito dal Cubò, di senno si capace, di mano sì valorosa, restare auuilto in vna legge tanto odiata nel Giappone. Almeno hauesse riguardo a'figli, quali sarebbero stati fauoriti dal Cubò, e tirati ad ogni altura d'immaginate grandezze. Rispose in due parole, ch'egli voleua morire da prudente, ritenendo vna Fede prouata tanto tempo. Che i figli, come Christiani, voleua seco condurgli à Christo. Rimasero attoniti, hauendo troppo del miracoloso nel Giappone, ancora tra Christiani, l'ammorzare le famiglie, e non curarsi della posterità. Cominciarono per tanto à sbattere le mani in segno di dolore, vedendo seccarsi sì nobile pianta in Miaco: e fù tale il sentimento della Corte, che non vollero che fusse incarcerato Michele suo primogenito, con isperanza, che harebbe mandata la casa inanzi. Nella prigione fù trattato Giouanni alla grāde, potendo con gli auuanzi souenire ad altri, come fece ad Andrea Cieco, e Chenzai Giouanni, quali restarono morti in prigione. Riceuuta la nuoua della morte, essendo Prefetto della Congregatione dell' Annuntiata, le mandò il suo Rosario per memoria, chiedendo perdono a Fratelli della poca edificatione. In andando al supplicio, diede da merauigliare non poco la sua modestia, & hebbe à dire ad vn suo confidente, che mai in vita sua senti tanto contento, e dolcezza, quanto in questo passo, per altro sì tremendo.

Di Tecla si può quasi dire il medesimo. Nacque Tecla in Miaco da Genitori non men nobili di sangue, che ricchi di Fede, e fù allevata con molta honestà, e timore di Dio. Posta che fù in prigione, per essere vicina al parto, fù rilassata, e non attese ad altro in casa, se non à fare per se, Marito, efigli belle, e ricche vestimenta per il Martirio. La ritornarono in prigione prima che partorisce. L'istesso giorno vn suo puttino si sognò certe catene, e

bagna Miaco segádolo per mezzo, incontro à Daibut, ch'è insieme nome di vn grá tempio appresso li Giapponesi, e de 'Fotochi. Qui giunti li Fedeli, in vedendo le Croci alzate, le legna ammucciate, con nuoui occhi, e lena mirandole, saltarono giù dalle carrette: Qui à due à due huomo con huomo, e donna con dóna, sono legati ad vna Croce stessa, voltandosi la faccia, e l'aspetto trà le Croci, masse di sarmenti, e legna. I primi due furono Gioachino, e Gabriele più prouetti d'età: appresso gli altri huomini di mano in mano. Nel mezzo furono fermate le madri co'loro bambini, & altre Donne. Vedeuansi attaccate à Maddalena, Regina puttina di due anni: à Maria, Monica di quattro anni. Marta abbracciaua Benedetto di due anni. Vn'altra Maria teneua stretto Pietro di anni quattro. Con Messia si stringeua Lucia di tre anni: e con Ruffina Marta figliuoleta di otto anni, e cieca. Mà vediamo ad occhi asciutti, se possiamo, Tecla. Questa di cinque figli, tre ne tendeua seco nella sua Croce, cioè trà le braccia stringeua Lucia di quattro anni: à mano destra haueua pendente Tomaso di dodici anni: dall'altro lato teneua Frācesco di noue anni: gl'altri due stauano nella vicina Croce. Ecco il modo come furono ripartiti, e legati. Mentre si prepara la materia per l'incendio, hebbero tempo, & ardire non pochi Christiani di portare dell'acqua fresca alle Croci, rinfrescando i Martiri, che ad vn cuore allegramente cantauano mille benedittioni à Christo Rède' Martiri. Fù tanta la copia del legname, e fascine, che pareua vna stesa selua. Era già sù l'imbrunirsi: comparisce il fuoco: s'attacca ad vn 'Holocausto si grato all' eterno Padre: allaga d'ogn' intorno la fiamma: lauora senza ritegno: i Crocesissi alzano le voci, e gl'occhi al Cielo: Giesù Giesù rimbomba. Il popolo innumerabile a'gridi: il Carnefici à gl'vrlì: li Barbari a strepiti: non poteuasi intendere parola. Vedeua bene tutta la gente vno spettacolo tenerissimo: Le buone Madri sù la Croce con la mano allisciauano, & accarezzauano le teste de'bambini, per acchetare i pianti, e' vagiti. I Giouanetti più grandi furono notati, con occhi, e fronte tanto serena, che pareua non sentissero punto di caldo. Non vi fù chi si ritirasse vn tantino dalle fiamme: il che si vidde

chiaramente da' legami restati in Croce nel medesimo sito, benche fossero stretti assai leggiermente. Di gran gloria fù parimente l'essere spirati non pochi di loro co' volti eretti alle stelle. I Christiani restarono tanto edificati, e consolati, che non temono più nè fornaci, nè altri supplicii per Christo. Compito si funesto lauoro, i Manigoldi, e tutti alla libera s'auuicinarono: e fù tanta la calca, che poco mancò, che no restassero molti affogati da torrenti di migliaia di persone. Si parti poi ciascuno: chi con lagrime, & encomii lodaua tanta costanza, & inaudita fermezza d'animo: chi la battezaua con altri nomi di pazzia: la più comune de' Gentili fù, che i Christiani fossero gente di testa ferrata, e di resolutione bronzina, che gettaua la vita à capriccio: tutti pero concludeuano, che simile costanza mai s'era veduta, ò intesa. La fama di questo fatto presto si diramò per tutto l'Imperio, per tanti forastieri, che v'erano presenti: Occorse a'sette d'Ottobre. Per sette giorni continui furono le Guardie de Gentili attorno alle sacre reliquie. Seppero poi li Fedeli, esponendosi à graui pericoli, rubbarlesi, & asconderle. Affermano i Barbari, che nel giorno del Martirio, comparisse nel Cielo vna gran stella crinita, d'eccessiuo splendore. I Christiani attestano, che la seguente notte il Cielo iui sopra lampeggiaua, e riluceua à merauiglia. Non v'hà cosa di sicuro: Questo si, che tutti viddero, che il fumo dell' incendio non era punto sozzo; mà tutto si aggruppò in vna nuuola assai chiara, e di bellissima vista.

Nomi di questi ss. Martiri, con le virtu d'alcuni di loro.

Qvattordici di questi gloriosi Campioni, furono natiui di Miaco. Due per nome Francesco, padre, e figlio. Chiusacù Giouanni, Maddalena sua moglie, e Regina figlia, Chiuyrò Mansio, Matangoro Ludouico, e Faximoto Tafyoie Giouanni con Tecla sua consorte, e cinque figli, che furono Catarina d'età di tredici anni, Tomaso di dodici, di otto Francesco, di sei Pietro, e Lucia di tre: oltre che Tecla, era grauida, tenendone vn'altro nel ventre. Quattro nacquero in Bungo, Chian Tomaso, Chungò Maria, Sacurai Giouanni, & Orsola sua Nuora. Di Fococù era Ichegam Tomaso. Del Chungocù,

questo i Barbari, e con solenni fischiate, & vrli lo trattauano da scemo; mà egli ridendosi all'incontro della misera pazzia loro, pieno di anni, carico di pazienza, ornato di meriti, si guadagnò il Martirio l'ultimo di Settembre. Tutti questi santi Martiri furono condotti à Christo per mezzo della Compagnia. I loro corpo venuti in potere de' Christiani furono sepelliti quanto meglio fù possibile.

Cinquantadue Christiani sono bruciati viui in Miaco.

Non ci voleua altra crudeltà, che quella del Cubo, à vergare le carte, e fare intendere alla posterità vna barbarie più che Neroniana. Raccontarò il seguito con ogni fedeltà, e breuità. In tornando l'Imperatore à Hiendo, fece posata in Foximo, terra due leghe in circa lontana da Miaco. Quiui, intendendo esserui prigionieri Christiani disprezzatori delle sue leggi, entrò in tanta furia, che ordinò subito che tutti fussero abbruciati, senza differenza d'età, ò di sesso. Restò sconcolato Ingandono per questa sentenza, essendo di natura dolce, e compassionevole, e staua in procinto d'aprire le carceri, e dare libertà a 'Prigionieri; mà li fù più tosto necessario, che facesse ritornare alcuni rilassati. Da questa nouità intendendo i Fedeli quello, che si tramaua, con mirabile allegrezza si disposero a' tormenti, massime che allora sapeuano, che s'alzauano alcune catoste di sarmenti, e si preparauano 27. Croci, si pulite, e con tanta maestria, come se hauessero ad essere piantate per essere adorate, e riuerite. Pareua però strauagante la nuoua inuentione del supplicio: Niuno si ricordaua mai tante Croci insieme. E' ben cosa molto comune nel Giappone il morire legato al palo, diuampato dalle fiame; mà non già in croce: per tanto i medesimi Gentili tirauano à buon'augurio tal filza di Croci. Altri più sensati diceuano, Certo queste sono le Croci, che gl'anni andati nell'altra persecutione furono vedute germogliare dentro gl'istessi tróchi, e cespugli, oltre ogni natura d'alberi: Nè ciò era senza proposito; perche vna di queste Croci viddi io stesso có molti altri nel Porto di Macao al I. di Giugno del 1620 quale fù trouata à caso, e ci recò gran merauiglia, e spauento. Sia come si vuole: questo è certo, che illegname fù

portato in tanta copia, che passò il prezzo di quattrocento scudi. Dicono ciò fusse, per essere il Governatore, come dianzi diceuamo, di natura soaue, e non poter soffrire lunghezza, ò varietà di tormenti; ò fusse perche ordinò il Cubo che il tutto si spedisse quanto prima. Hor nella prigione altro non risuonaua, se non Christo, e sue lodi. Due giorni auanti il Martirio i Christiani, fidatisi della clemenza del Governatore, andarono intrepidamente à dar il buon prò a 'Prigionieri. Questi, non capendo in se d'allegrezza, dauano liberamente Agnus Dei, Corone, Imagini, & altre pie memorie di se a gl' amici, e conoscenti. Altri si vestiuanò quanto più sontuosamente poteuano, come se douessero andare al trionfo. Venuto il giorno, escono in vn cortile: sono legati, e compartiti in varii modi, & ordini: comparsi nella publica piazza, trouano in procinto noue carrette: nella prima, e nell'ultima montano gl' Huomini, & i Giouani in quelle di mezzo erano tirate le Dóne co' fanciulli, che lattauano, e portauano in braccio. Non siuidde mai tanta moltitudine, per essere quiui concorsi tutti li Grandi, e Potentati con soldatesche, per far pompa, e salutare l'Imperatore. Andaua inanzi le carrette il Tróbeta, che promulgaua la sentenza in questa forma per tutti li capi di strada. Xongùn Imperatore di tutto il Giappone commanda, e vuole, che questi siano abbruciati viui per essere Christiani. Aiutauano i Martiri il Banditore à gridare, replicando, Così è: moriamo per Giesù: Viua Giesù: e con altre orationi giaculatorie, e con sembante allegrissimo andauano al fuoco. De' Gentili molti lagrimauano per tenerezza, non pochi restauano attoniti di simile costanza. Il viaggio era lunghissimo, nel mezzo del quale comparue vna diuota Donna, quale animosamente penetrò alle carrette delle Donne, salutandole, e raccomandandosi ad esse con molte lagrime. Le furono sopra i Manigoldi, e le domandarono, Se fusse Christiana? Si che sono, e voglio essere Christiana, rispose. Restarono storditi, e la mandarono via per forza, per non accendere più la prontezza de' Christiani, e solleuare qualche tumulto. Nel fine della Città di Miaco v'hà vn Borgo molto celebre, e frequétato, per il quale si v'à à Foximo, e stà posto non lungi dal Camongaua, torrente Settentrionale, che

nome Giouanni di Santa Marta, ne potendo soffrire, che vn Gentile-fusse strappazzato, per hauere appigionata la sua casa a Lino, fattosi intrepidamente auanti la Corte, Con quale giustitia, disse, voi altri fate cosa capitale l'affitto delle case? Che cosa mai importa a voi, se siano habitare da' Christiani, o da' Pagani? Peruero, come realmente erano, parole di Christiana liberta. Per Christiano fu fermato, & in vedendo le catene si accomodo da se stesso le mani dietro, andando festeggiando verso la prigione. La sua morte accadde a' 4. d'Agosto.

Gioachino discendente dal paese di Tamba, habitante nella contrada di Dio in Miaco, sul principio della cattura si mostro anzi dubbioso, vacillante, e quasi arrendeuoile: mà, rinforzato da celeste soccorso, sul morire disse chiaramente a' Ministri, che moriuua volentieri per la Fede, desiderando di patire molto piu. Vogliono che ciò dicesse a persuasione della madre, moglie, e figlio, affinche chiudesse gl'occhi con maggiore consolatione sua, e de'suoi. Fini li suoi trauaglia' 14. d'Agosto.

Giacomo di Chungocu, persona sempre a se simile, di rara bōta, e diuotione, dopo molte minaccie de' parenti: dopo varij contrasti con amici: dopo l'essere andato sperso, & essere stato priuato d'ogni suo hauere, alla fine fu imprigionato, vedendo dopo si sozze oscurita di pene vn bello, & eterno sereno di godimenti. Passo al cielo a' 19. d'Ottobrie.

Andrea fu vn certo Cieco, natiuo del paese Ouari, Prefetto assai zelante della Congregatione dell'Annuntiata, eretta sotto la tutela di S. Francesco Xauerio. Soleua ogni settimana ragunati li Fratelli, far loro infocate esortationi, conforme al bisogno della persecutione. La Corte cercaua a tutto potere, ne mai poteua vedere questo benedetto Cieco, tanto era ben guardato, e custodito da' Fedeli. Fu per tema di qualche male mandato via di Casa dal suo hospite, con la madre vecchia: e per non essere cagione di danno altrui, ordino lo conducessero ad vn Ponte, e non dubitassero punto, che non harebbe palesato veruno. Trouato qui da' Ministri, & assediato di domande, oue fusse stantiato tãto tempo senza mai comparire? il buon Cieco

rispōdendo alla cieca, e raggirando gl'Inquisitori, fece che non seppero cauarne costrutto. Lo pregarono che rinuntiasse la Fede: & egli di Cieco si sinse ancora Sordo. L'imprigionarono, e lui tutto il giorno a predicare Christo con tale energia, che a gara vi concorreuano ancora i Gentili. Se bene non mancaua della feccia, e schiuma del popolaccio, che l'uccellaua con diuerse burle, per essere Cieco, hora togliendogli il mangiare, hora chiudendolo in qualche buca, oue combattendo con mille schifole immonditie, non potesse requiare. E benche di complessione ancora verde, e robusta, cede alla carcia di tanti stratij, e disagi, sendosi due volte rihauuto da graue malattia. Mori a' 21. d'Ottobrie. Vennero al suo passaggio i figli: gli tratto come stranieri. Venne la moglie: l'animo alla costanza, e dissele, che poco si curasse di perdere i figli, che Dio mai l'harebbe abbandonata.

Giouanni, vno de' primi, e sinceri Christiani di Vacasa, sendo carico d'anni esercitaua ancora la medicina; ma per essere hormai sordo, vltimamente attendeua solo ad vdire l'interne inspirationi. Vna sua figlia andaua bādita per la Fede. Il figlio valoroso soldato, e fauorito dal Tono poco manco, che non perdesse la robba, e la vita per essere Cattolico. Due volte si fecero diligenti inquisitioni per hauere Giouanni nelle mani: preso poi fu trattato molto cortese, & honoratamente da Ingandono, merce alla diligenza, & intercessione d'vn suo Corteggiano, che haueua vna Nipote di Giouanni per moglie. Istigato da' Ministri ad abbadonare la Fede, Troppo enorme cosa, disse, sarebbe alla mia vecchiaia al lasciare vna Fede ritenuta sin dalle fascie. Piacque si sauia risposta: fu pero imprigionato, e raccomandato assai, che non fusse spogliato dell'habito proprio, e che s'hauesse rispetto alla sua canutezza. Era visitato bene spesso: il che daua occasione ad alcuni di visitare ancor' altri Christiani prigioni. Pareua à Giouanni d'hauer trouata la sua ventura ne gl'vltimi anni, sendo solito dire: Io qui sono prouisionato dal publico: non vado attorno in visite: nō pago pigione di casa: hò stanza coperta, e difesa da piogge, e venti: stò patendo per Christo: e che mai posso più bramare in questa vita? Si rideuano: di

suoi settatori trouauano, e non accadeua misfatto nella Città, che non l'hauessero fatto loro soli. Fuggendo, e passando di casa in casa vn Padre de'Nostri, s'incontrò à stantiare nell'istesso appartamento, oue staua vn Bonzo; ma però in diuersa stanza. L'hospite venne à parole con vn suo auuersario, a cui haueua vinta vna lite. Questi sdegnato sopra modo, e rauuisando l'hospite per Christiano, disse che voleua andare, & ando ad accusarlo. Quāto che hebbe tempo, e commodita di confersarsi, che subito fuggi, sendo necessitato cedere la sua casa all'Accusatore. Quasi ne' medesimi giorni, che fù à gl'otto di Luglio, l'istesso Cubo giunse a Miaco: raccogliessimo vn poco il fiato, sperando qualche tregua a tante afflittioni; mà succede tutto al rouescio: non scorsero tre giorni, che fu incarcerato Tafoye Giouanni, con la moglie, e famiglia, sotto pretesto, che hauesse maltrattato a ragione vn suo veruitore Gentile, poco fedele nella robba di casa. Il poltrone, non potendo difendere per altra via le sue magagne, diede vna querela contro il suo padrone, che fusse Christiano. All'improuiso viene sopraggiunto da' Ministri di giustitia: confessandosi alla schietta Christiano, li sono poste le manette, seguendolo dietro la moglie, à foggia d'vn'altra Felicità, con sei figli: Compariscono inanzi al Giudice: sono traportati in carcere, empiendo il numero di sessantatre, de' quali solo tre furono eletti al trionfo del Martirio. Michele figliuolo maggiore del sudetto Giouanni non trouandosi con gl'altri, non fu preso con essi; se bene dopo incappo ancor lui nelle mani della Corte; ma fù scarcerato facilmente, non potendo soffrire manco gli Sbirri, che si tagliasse dalla radice vna famiglia si chiara. Senti cordialmente Giouanni questa liberatione del figlio, il quale tra infiniti patimenti si mostro generosissimo Caualliere della Fede. Non auenne il medesimo a due altri; ad vno de'quali essendo promessa la vita, se hauesse rinegato, appena s'arrende, che steso da febre acuta, vsci de ceruello, e di vita senza pentirsi; e come vogliono alcuni, gl'istessi, che l'hauenuano suoltato dalla Fede, l'aiutarono a finire la vita. Il suo cadauero comparue in vn'attimo trapuntato, e sforacchiato, o susse per celeste vendetta, o per lo fetore delle carceri. Il tremore, e

spauento fu di gran freno a'deboli nella Fede, specialmente alla moglie, e figlia, restate per la Corona Christiana, hauendo mandato In Cielo vn suo figlio morto nella prigione, andando gl'altri al Martirio, volle restare senza muouersi: Si pensa che cio susse artificio delle Guardie, corrotte condonatiui da' Barbari parenti della femina.

Morte di otto Christiani nella prigione di Miaco.

Le prigionie Giapponesi sono tanto sciagurate, e pestifere, che ogni infame Segreta d'Europa a fronte a quelle, sarebbe ampia, & agiata habitatione: quelle poi di Miaco sembrano appunto tane di Conigli: Basta dire, che l'halito, e respiratione di quei meschini, alzādosì in alto, & iui refrigerandosi per l'aria piu libera, e pura, e poi condensandosi, si risolue in minute stille. Gli ammalati poteuano ben lamentarsi, che non si sapeua il nome di compassione: si che da tanti stratij di fame, sete, sole, freddo, otto di loro da lento Martirio disfatti ne volarono a'celesti premij. Tocco la prima forte a Michele, e Pietro Miacesi, bambinelli di due anni, appunto due gigli del Paradiso, raccolti nel fracidume, e lordure di quegl'horrori. Michele fece la scorta a'suoi progenitori a' 17. di Maggio. Pietro lascio dietro i suoi, quali non erano per seguirlo, a gl'vndici d'Agosto. Gl'altri sei d'eta piu prouetta, furono Chiusayemone Matthia, Fiozo Francesco, Yiosobioye Giochino, Iehiemone Giacomo, Guiuichi Andrea, e Chenzai Giouanni.

Nacque Matthia nel regno di Figen, e si mostro tanto generoso nel primo assalto, che essendo caricato di catene, e villanie da tutto il vicinato resto immobile, senza punto atterrisi. Fu condotto in prigione sul principio di Gennaro, e giunto all' vltimo passo, fatta venire a se dalla prigione delle Donne Messia sua moglie, con vna figliuolina di tre anni, per vltima sua volonta, lascio loro raccomandata la perseueranza nella Fede: mori a di 16. di Luglio.

Francesco della prouincia di Chungocu tiro vn' anno intiero di prigionia. Questi in vedendo ligare Lino, che poco dopo fu fatto martire, per hauere honorato il corpo d'vn Martire Francescano per

figlio del Gouvernatore. Il Bargello co'Sbirri voleuano à tutti li patti, che il Medico, chiamato Giacomo, lestantemente si ritirasse. E gli di ciò molto bene accortosi, non ci volle nè meno pensare. Gl'accennauano gli Sbirri, lo scioglieuano, li mutauano luogo, li diceuano all'orecchie, Scampa di quà. Giacomo faceua il soldo. Alla fine vno più insolente, presolo per il braccio con rabbia, O cera di Medico, disse, camina auanti, e vâ à pigliarti buon luogo nella prigione, che presto t'arriuaremo. Obedi Giacomo, ando, aspetto, e vedendo comparire i Compagni, gli venne incontro, con istupore di tutti li circostanti: e la Corte non potendo più dissimulare, lo pose fragl'altri. Pregato poi con buona occasione ad andarsene, ringratio molto l'offerta, volendo restare.

Ingandono fece poi appiccare per le cantonate Editti seuerissimi contro chiunque sapeua chi tenesse nascosti Christiani, ò li teneua. Qui si, che entrò per tutto, & in tutti vna paura tremēda. Spie d'ogn'intorno: cercare, e voltare sottosopra tutti gl'alberghi De Fedeli parte à nascōdersi, parte à trafugarsi nelle ville, e selue conuicine. Questi à raccomandare la tenera famiglia a'parenti Gentili, prendendo libero esilio: Nè mancauano di quei, che mutando stanza ogni giorno, per essere rigettati da tutti, non sapeuano oue intanarsi: E vi furono non pochi, che spesero quanto haueuano in facchini, e caualli, per far someggiare, e tramandare hor quà, or là il suo. Per compimento delle disgratie, stauano appunto sul mese di Gennaro, e mal capo d'anno, nel qual tempo i Giapponesi bandi cono solennissima fiera, e publica piazza, nella quale si contratta: si saldano conti: si aggiustano partite, per il rimanente dell'anno: Per il che i Creditori Gentili, per assicurare il danaro in queste tresche, vedendo che i Christiani malamente poteuano rispondere, si posero à fare estreme angarie contro di loro, spremendogli il quattrino per forza, e se erano debitori, truffando buone somme, negauano sfacciatamente i debiti, ò ne pagauano la centesima parte: & essendosi chiusi li fondachi, e fermatosi il traffico de' Mercanti Christiani, chi fallito, chi mal in arnese, tutti senza robba, e partito, restauano four di se stessi: In tanti

riuolgimenti niuno si riuoltò contro Christo. Vn'huomo nobile per la sua molta prudenza, era stimato l'oracolo d'vn vicinato: fù come Christiano stimolato à rinegare, minacciò che si sarebbe partito da quella stanza; il che temendo forte i vicini, non lo molestarono più, anzi li restituirono vn' Imagine inuolatali di nascosto. Vna Vedoua illustre, volendo ritirarsi da si mal tempo, raccomandando la piu piccola sua figlia à certi parenti: Questa à schiamazzare, e piangere, che voleua assere Martire, tanto che per acchetarla, fu di mestiero condurla seco. L'altre sorelle maggiori, contrastarono buona pezza, per volere tutte due seguire la madre. I Nostri correuano inanzi, e dietro, sotto diuersi sembianti, animando tutti, durando questa borasca da Gennaro à Pasqua, quando sorse di nuoua vn'altra battaglia, molto piu ruinoso di quante erano state. Tra' banditi fuori della Citta, vi fu vn riccone molto denaroso, quale con larga mano imprestaua, e soccoreua gran parte de vicini Gentili. E per hauere lasciati infiniti crediti, tornaua di quando in quando nella Citta, per riscuotere, & esigere quello che poteua. Venne molto in vrta a'Creditori, e per leuarse lo d'attorno, concertarono questa ribalderia. Attacano di notte tempo vn Cedolone in faccia della Contrada di Dio, minacciando fuoco è fiamma à tutto il contorno. Fatto il giorno, lo staccano, e portano à gl'Vfficiali del Gouvernatore, affermando che questa era minaccia de' Christiani banditi, in vendetta del loro esilio. Fù creduta la calunnia, e sepditi huomini armati, che si cacciassero tutti li ripostigli, strade, rinbocchi, senza risparmio, ò differenza. Furono persi tredici soli Christiani, fiore, e neruo della Fede, e de'fedeli Miacesi. Diede questa grandine di furore ancora sopra i Gentili, confiscandosi li beni, di chi hauesse appiggionate le cafe a'Fedeli. Vno de Gentili à sua discolpa, incolpò vn Christiano Tomaso. Eccoli la Corte in casa: trouano solo sua moglie infantata: la sbrauano, perche si professaua Christiana: danno di mano à quanto vi era, le bene eraui poco, hauendo speso il tutto in soccorso de' fuggiti, ò fuggitiui Christiani. Vedendo i Gentili, che l'esternio veniu sopra di loro per cagione de'fedeli, cominciarono à proclamare, e mettere in horrore il nome di Christo, dando la caccia à quanti